中央公論

第二十年第九號

九月一日發行

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行明治卅八年九月一日

本號目次

今や天下多く紛糾し、而して國事はますく多端に、社會の事はいよく複雑ならんとす、吾人の大に雄飛活躍すべきは正に此秋にあり

乃ち本誌は本號に於て更に一歩を其の材料の上と編輯の上とに進めたりと信ず、次號に於て又更に數歩を進めんことを期し、而して來々號に於ては特に目覺ましき一大發展をなすべく計畫しつゝあり、其詳細は凡て次號に發表すべし

諸名家の特に本誌の爲めに寄せられたる文章は本月分のみにても甚だ多く、從つて（本號の所々に挿入したる豫告の如く）之を次號及び來々號に讓るの已むなきに至りしものあるは寄稿諸先生に深謝する所也、尚續々として諸大家の寄稿絶ゆることなし、由來材料の豐富と趣味の多角なるとは諸大家の厚意に負ふ處多し、特に卷首に大書して之を謝す

中央公論



第二十年
第九號

講和談判の進行
滿韓問題の解決

日本全權小村氏、露國全權ウイッテ氏等は八月九日より北米合衆國ニウハンプシャイア州ポーツマスに於て媾和談判を開始したり。其の初日に於ては兩全權の其の元首より委任されたる權限の各完全なるを確かめ、英佛兩言文を談判の用語と爲すに決し、次て日本全權より書面を以て平和克復に關する要求條件を提出したり。談判の眞相を秘密にすること亦此の間に於て口約せられしが如し

日本全權が其の對手の權限の完全なるを認むるや否や、直ちに要求條件を提出して。また其の間に多少の繁文縟禮を加へざりし簡易率直なる手段は、頗ぶるウイッテ氏の意表に出てしなるべし、ウイッテ氏はローゼン氏以下文官、武官、財政官を始め、國際法學者中一方のオーソリチィと目せらるゝマルテンス博士等を隨へ、儀容堂々、恰かも五月の武者人形然として談判に臨みたるを以て、豫備の談判にまでも少からざる日時を要すと豫期したる可ければ也、吾人は此の點に於て彼我兩全權の配映（コントラスト）の殊に妙なるを思ふ

ウイッテ氏はまた露都を發する時、米國聯合通信社員に語れるを發端として、巴里に於ても、太西洋の船中に於ても、紐育に於ても頻りに傲語し大言し、露國假令戰ひに敗れたるも未だ平和條件を命令さるゝの地位に落ちずといひ、露國々内の同盟罷工、一揆、叛亂、革命運動の如き亦深く顧慮するに足らずといひ、割地償金の如き屈辱的條件は斷じて之を容れず。寧ろ戰爭を繼續すべしと放言し、或は新聞記者を優遇し歡待し、

一方には日本全權と秘密嚴守を約しながら、一方には巧みなる新聞記者に事情を漏泄するが如き、千籌万策殆んど盡さざる無し、想ふに此の間米人の渇仰する黄金の散布せられしもの亦少からざるべきか、之がため米人の同情頗ぶるウイッテ氏に集中し、其の反響主として伯林に現はれしが、大統領ルーズヴエルト氏は蠣濁のウイッテ氏を引見せる時、故らに『足下戰敗國の全權たるを忘却する勿れ』と一棒を喫せしめたりといひ、又ウイッテ氏の秘密漏泄を背信として、米國及び列國の非難翕然として氏に至らんとすと傳ふ、ウイッテ氏が尚ほ全く露國一流の尊大と無遠慮とを擺脱し得ずして、動もすれば策略の痕跡を暴露するの拙なる、時に嗤ふに堪えたるものあり、但だ其の極力表示せる强硬なる言語が頗ぶる列國に反響し、殊に日本の政客新聞記者等を眩惑して紛々擾々、内より外交當局を攻撃せしめたるを視ては、ウイッテ氏また或は舌を吐きて一笑するも知る可らず

然れども流石はウイッテ氏なり、小村氏が簡易率直に其の要求條件を明示したるに對して、また最も俊速に之を解決し、着々其の談判を進行せしむるの伎倆實に凡ならざるものあり、吾人の今日まで接受したる中外の諸報告によれば、九日以來十六日までに決定したる所のものは大凡下の如し

第一　韓國に於ける日本の優越權を承認す（在韓の露國臣民は最惠國約款に浴すべし）

第二　露國は滿州より撤兵すべし、但し日本も等しく撤兵す

第三　清國の領土保全主義を恪守すべし

第四　遼東半島の租借權を日本に讓與す（即ち旅順大連を日本に歸す）

第五　東清鐵道南滿州支線（即ち哈爾賓以南旅順口までの鐵道）を日本に讓與す

第六　露國は東清鐵道本線を專ら經濟上に使用して軍事用に供せず、而して日本も亦其の領得する南滿州支線に於て之と同樣の義務を負ふべし

右に於て我が開戰の目的たる滿韓問題は全く解決せ

られたりと謂べし、韓國に於て、我が曾て大同江を分界線として日露兩國の勢力範圍を定むべしと提議したるとありしを想はゞ、而して開戰前露國との外交談判に於て、鴨綠江の左右二十五基米を緩衝地帶とすべきを議論したりしとを想はゞ、我が韓國に於ける勢力今や全く定まれりとすべく、其の淸國と戰ひ。露國と戰へるの全く無效ならざりしを思はざる能はず

遼東半島の租借權を我に收めたるは、露國の東亞に於ける策源地の一を奪へるなり、東洋に於ける一の禍根を除きし也、而して我が國民十年の志を酬いし也、以て一快事と爲すに足る、南山役以來旅順要塞の攻略に生命を殞せる我が忠勇なる軍人は、茲に至て能く瞑するを得ん乎

露國をして滿州より撤兵せしめ、且つ淸國の領土を保全する主義を恪守（即ち滿州に於ける一切の權利を淸國に還附）せしむるは、また彼をして全く我が從來の主張に屈伏せしめし也、明治三十三年以來の我が主張は、茲に至て竟に貫徹す。是れ主として連戰連捷せる我が武力の効果也、吾人は今更ながら我が海陸軍人の功勞に感謝せざる能はず

露が哈爾賓以南の東淸鐵道を我に讓與したるに就ては、彼我全權頗ぶる激論を費したりといふ、ウイッテ氏が曾て露淸銀行重役として最も東淸鐵道（表面の名義は露淸銀行所有にして露國政府が投じたる該鐵道費用は大抵此の銀行の手を經由せり）の事情に通曉せるポコチロフ氏を淸國より招致したるより視れば、言を鐵道所有名義に藉て頑なる反對を唱へたると察すべし、隨て我が全權が之を折服すべき材料蒐集と理論主張に於て辛勞少からざりしを推知せらる

彼我共に東淸鐵道全線を軍用に供せざるとは、殊に注目すべき點也、露國果して誠實に此の約を守らば、其の滿州驛より哈爾賓を經てニコリスクに至る鐵道を全く軍用に行使するを得ず、即ち浦鹽斯德は勿論、哈爾賓にまでも出兵すること實に至難ならざるを得ざるべし、滿州驛よりニコリスクまで東淸鐵道の本線（北滿州橫斷線）一千四百三十四露里は全く用ゆるを得

ず、此の間を徒歩するか、然らずんば西伯利亞の舊道を執るの外なければ也、斯の如くならば、露國東亞に十万の兵を駐留せしむるも亦難かるべし、故に此の協定は（誠實に實行せらるゝものとして）事實上露國の東亞に於ける武力に制限を加へたるもの也

之に對して我れ亦新たに領得する東清鐵道南滿州縱斷線（哈爾賓旅順間）九百八十露里を軍用に供せざるの束縛を受く、想ふに彼れの面目を立つる我が讓歩に外ならざるべし、但だ我が滿州撤兵と本約款に由て、吾人の當然推知し得べき事實は、我が政府が遼東半島の租借權を領得して旅順口大連灣を占有するに止め、滿州をば全然清國に還附するの意向なること是れ也、一部の豫期したる滿州委任統治の如き玆に至て全く行はれず、彼の滿州處分に頭腦を病ましめ、更らに露佛諸公使に煽動せられて輕噪に騷ぎ立てたる清廷の君臣も、定めて滿足を表すべき也

滿韓問題は斯の如くして略々解決せらる、吾人實に之を祝す、然れども我が戰勝の榮譽を飾るべき諸條件と。戰爭の慘禍を多少輕減すべき賠償とは、知らず如何に決すべき、是れ彼我談判中至難なるものにして、又實に我が利害榮辱の由て岐るゝ所也。吾人は素より戰勝に眩迷して滿韓問題を忘却するが如き世の膚々者流に與せずと雖も、土地割讓と戰費賠償とには大に重きを措かざるを得ず、我が全權旣に償金（indemnity）の名を避けて補還（reimbursement）なる語を用ひ、名を重んぜずして實を採るの機智あり、樽俎の間巧みに對手を屈伏せしめて、以て平和克復の榮任を完成せんことを望む

若し夫れ平和談判の未だ結了せざるに方つて、我が軍能くリネウイチ將軍の軍を擊破せん乎、啻だに頑迷なる露國の君臣を省悟せしむるに足るのみならず、媾和問題の進捗を助くるに與つて力あること論無し、但し生靈を損するの慘や實に忍びざるものあり、而して露國の負擔條件の更に加重すべきこと當然のみ

（八月十八日記）

人心の要求

時代は何を要求しつゝあるや、詳らかに之を言へば、今の人心は如何の點に歸嚮しつゝあるや、思想界の傾向に注目するもの先づ之を看取するを要す

讀書の風の大に盛なりしは著るしき傾向なり。近來の出版社會に重んぜらるゝものは成功及び立志の數より移りて、農業工藝等に及べるも而かも精神界に屬する著述の需要漸く多き事實は蔽ふ可らず。單に風光物象のみを咏嘆せる詩人が、今や人生の疑問に其の感懷を攄ぶるの傾向ありて、有明、泣菫等の作の愛せらるゝは其の一證也、宗教上の書籍雜誌の多く賣行くも其の一證也、人生の眞趣を悟り得ずと稱して華嚴の瀑底に投死せる書生を悼むに、滔々たる哲學上の理論を以てする人ありしも其の一證也

日露戰役起りてより幾んど二十ヶ月、百万の生靈征戰に勞し、血を沙漠の熱砂に染め、骨を滿北の寒山に暴せしもの、何ぞ啻だに一二三万のみならんや、假令千古の詩人ならずと雖も、眼前に戰爭の慘禍を視るもの坐ろに可憐無定河邊骨、素是春閨夢裡人の嘆なきを得ざるべし、其の父を喪へる兒。夫を失へる妻。子を奪はれし翁媼の悲むを目撃せば、誰か人生の無常にして且つ慘憺たるに悚然たらざらん、單に金殿玉樓あるも、單に美衣美食あるも、曾て安心の境を得ると難からん、人心の應さに欲求する所知るべきのみ

且つ生活の難きや唯だ衣食を得るにすら苦むもの益々多からんとす、此等の人常に快車肥馬を驅るもの、錦繡を着綺羅を纏ふて、榮華を恣にするもの、夏は深山に清風を味ひ冬は海濱の温氣に浴して曾て勞苦を知らざるが如きものを見る毎に、煩悶彌よ盛にして自から苦むと愈よ大ならん、物質的文明の進歩は貧富の懸隔を伴ひ、貧富の懸隔は不平煩悶疾苦を來す、此の時に方つて人心の慰藉を要請するの切なる、何ぞ多言を要せんや

吾人は當さに斷じて曰はんとす、此の人心の要求に應ずるものは宗教なりと

遠くソクラテスよりカント、ヘーゲルに至るまで、古來哲學者の研鑽する實に盡さゞるには非ざりき、人生の謎疑は曾て釋然として解決されしものあらず、哲學を學ぶに隨つて迷羊の嘆益々深きは多く例證あり、但だ理性に聽くして學問に深きものに在ては、哲學を學ぶ必らずしも妨けざるも、彼の日夕勞苦して煩悶し懊惱する人や、怙恃を失へる鰥寡孤獨や、普通の識力を有し。普通の生活に在る最大多數の人々は、所謂深邃幽玄と稱せらるゝ哲學以外に於て、別に直覺的に安心立命の地位を得ざる可らず、而して是れ宗敎の能くする所には非ずや、今の人心の要望するもの則ち宗敎に非ずして何ぞ

飢えしものには食を與へよ、渴せるものには水を與へよ。徒らに苦行難業と階級的形式を以て人心を惱苦せしむるや、佛陀出でゝ千古の迷霧を排除し、列國合縱し聯衡して利を競ひ權を爭ふや、孔丘蹶起して仁義を說き、擧世僞に走り我を執するや、基督博愛の敎を垂れて不朽の道を傳ふ、總て時代の要求に應ぜしなり、我が親鸞。日蓮等の新たに一宗を創せる、亦まゝ然らざる莫し。今の宗敎家何ぞ深く之を思はざる。區々蝸牛角上の爭鬪を事とせる陋習未だ全く脫却するに至らざるは嘆ずべき夫

男女學生の交際に就て

竹越與三郎

男女の交際といふことゝ、男女學生の交際といふことゝは自ら別問題であらうと思ふ。さりとて男女學生の交際も又男女の交際といふ廣い所から論じたものでなければ公平な結論を得ることが難いのである。で吾輩は此問題を議するに當つて先づ男女交際といふ廣い所から論じて見たいと思ふ。

凡そ問題を議するに當つて、世間の爲にかくあれかしと思ふことゝ、自分がこうして居るといふことゝ是亦自ら別論であらうと思ふ。吾輩は極めて隱居勝の人間で交際社會に出て才辯を戰はすことは自分の長所ならざるのみならず、他人と交際するのも、どちらかと

いへば甚だ面倒に感ずる方で、寧ろ家に引込んで人の尋ねて來るのを待て居るものであるから霞ヶ關の夜會にも生れて以來一度も行たことがない引込思案の人間で、從て自分の家庭も其通りて、自分では餘り交際といふことをせぬ人間てあるが、自分の一身のことゝ、此問題に對する議論とは自ら別であらうと思ふ。

然らば世の中全體からいうて男女交際はなさしむべきものか、或は止むべきものかといふに、これは或人が革命を論じた言葉を以て解釋することが出來る、或英國の政治家が革命を論じて「革命といふものはよいか惡いかを論ずる暇がないもので、よいわるいを論じて居る中に革命は遂げられて了ふ。夫れ故に革命の善惡は論じて益なし」といふたことがあるが、これは柳宗元が封建を論じて「封建は理にあらず、勢なり」といふたと同じことである。吾輩は男女交際をよいとか、わるいとかいふ人に、若し惡いならば果して止むる力ありや否やを聞きたいのである。

我一國の万機を司る總理大臣が百官を率ゐてルーズベルトのお孃樣を出迎に出て百方之を歡待する世の中に、又我有栖川宮の妃殿下が伯林の停車場に立たるときにカイゼルが出て其玉手に接吻する時代に於て、果して男女交際が社會の厭ふべく抑ふべきものとして排斥し得べきや否や。若し國家的のことに於ては之を褒むべき、勸むべき、爲すべきことゝして、而して人民の社會的のことに於ては之を耻づべき、抑ふべき、排すべきものとするならば社會道德と國家道德とのユニットが二つになるものであつて、かゝることは事實に於て決して許すべからざることである。かくの如く國家的の方面に於て認められ、歐米列國に於て認められ、又我社會の總てに於て要求せらるゝ男女の交際が果して惡いことゝするならば誰が如何なる力を以て之を壓抑することが出來るか。書を焚き儒を坑にするの勇者が出て來た所が兎ても出來ぬことゝ思ふ。況んや區々一二官吏の力を以て之を矯めんとするが如きは所謂精衞の海を埋めんとするが如しである。かゝる道理なれば吾輩は男女交際を以て一般に於て止むべからざる勢なりとし、此止むべからざる勢に抵抗するは社會の改革者も政治家も到底なすべからざることを見るのである。爲すべきことは之を利用し、善導して、よき目的よき方法の下にするの外ないのである。

吾輩は先きに男女交際は勢であるといふたが豈たゞ勢のみならんや、又理であると思ふ。吾輩は此人類社

會の文明に進むといふことは、總ての人の望む所にして且つ社會自然の勢であると思ふが、我國も亦文明に進むことを以て其目的として居るならば忘れてはならぬことが一つある。それは即ち文明の極致は女性的なることである。或は世間には社會は蠻勇でなければ強くないとか、蠻勇時代の勇氣を維持せねばならぬとかいふ豪傑があつて此世の中を料理すること恰かも少女が糊と鋏とを以て細工物でもするが如く、これとこれとは文明て、あれとあれとは野蠻に殘しておくといふことが出來ると思ふ人は別問題であるが、然し全體を文明に進めんと思ふ人は、文明の全體は女性的なることを忘れてはならぬ。此論たるや甚だ説明を要することであるが、手短くいへば文明といふことは荒々しい事よりデリケートに進み、無作法よりレフアインメントに進むことである。デリケートネス、レフアインメントといふものは男女共に有するものであるが、畢竟嚴義にいふ女性的のものであるを忘れてはならぬ。又今日の文明を來したる、又來すべき要素としては政治、法律、宗教、戰爭、及び經濟といふ樣な物があるが、此等は無論世を進めるには大いなる力のあつたものには相違ないが、同時に此等のものは其美と共に其弊を持て來て、何となく世の中を殺風景となし、重々しいものとなし、人を壓服するやうな空氣にしたことは爭ふべからずである。故に此文明に對しては如何なる時代に於ても反抗の聲なきはない。即ちルーソーが「自然に還れ」と稱へたる聲は如何なる時代にも繰り返され、又ゲーテの如く「此文明の流弊を拯ふは藝術の外なし」の叫びをなすものも出て來るのである。

吾輩思ふに、否な吾輩のみならず多くの人が思ふ如くに、此文明の流弊より脫却するにはカルチユーアの外ないのである。即ちマシユー、アーノルドのいへる如く哲學に代る哲學、宗教に代る宗教、法律に代る法律を求めて光明と甘美即ちライトとスヰートネスを此世に來たして天地を晴々とし、空氣を清潔にし、總ての人の心を輕やかにすることが出來なければ此文明の流弊を脫却する能はずと思ふ。光明と甘美の流れを此世の中に示し、又カルチユーアを此世の中に來すとは如何なることかといふに今迄の總ての哲學的科學的の智識を人情化することである。かゝることは代々の政治、法律、哲學、宗教の智識より來るにあらず、我々の頭腦より來るにあらず、實に吾々のハートより來るのである。而してハートの多くを有するものは女性であ

る。故に今日の文明の生ずる重々しい、いやらしい空氣より脱却するには、たゞ女性的のパートより生ずる働を以てせざるを得ぬ。眞善美果して一なるか否かは別論として假りに美といふ一字について論ずれば譬へば滿洲に於て我軍が非常の武功をあらはしたといふ書を書いて、砲彈天地を轟かし、劍戟日に映ずる丈けでは美といふことが出來ぬ、かくの如く阿修羅王の荒るゝが如く憤闘する際に、土人の家に父母を失ひて方向に迷ふ三四歳の小兒の泣き叫ぶのを見て、猛將が之を助けつゝ進むといふのを書くので初めて戰爭美が生ずるのである。即ち百万の大軍がたゞ動く丈では美にならぬが僅かに此間に小兒を救ふといふ女性的美あつて初めて戰爭美があるのである。此事は美であつて又善である、即ち又眞であると思ふ。かゝる時には眞善美一にして又同時に女性的なりといふことを得るのである。かゝる譯合で何れの方面より見ても文明の極致は女性的にして、此世を文明にするには女性の力を籍らねばならぬことは明々白々である。夫れ故に男女の力を合するといふのは啻に勢なるのみならず、又理であると思ふ。故に我輩は男女交際は政治上の便宜より抑ふべからず、否な寧ろ奬勵しなければならぬと思ふ。

かくの如き次第であるから女性に對して我々の望む所も純粹な智力的科學的の方面に於て人生を補ふて貰ふことよりはレファインメント、デリケートネス、同情、温かき心胸、高尚なる感情、忠恕の念、などによつて人生を補うて貰ひたい、といふた所が併し良妻賢母といふ狹い範圍の中に女性を追ひ込まうといふのではない、良妻賢母以外之を一身に行ひ、之を一家に行ひ、之を朋友に行ひ、若し餘力あらば之を社會に行はんことを無論望みたいのであるが大體に於て我々は女性からは女性的助力を望むことを忘れてはならぬ。又女子教育の方針や、社會が女子を待遇するにも此區分を忘れてはならぬ。

以上は男女交際についての概論であるが然らば少年少女即ち學校にある男女學生の交際についての考は如何といふに、學校にあるものは未だ相當の年齢もない學生であるから男女交際などをする必要はない。又往々其間には過に犯さるゝことがあり易いものと思ふ。故に我輩は學生たるものは態々男女交際などをする必要はあるまいと思ふ。否な殆ど問題にならぬと思ふ。故に之から態々男女交際を初めるなどゝいふことは詰らぬことで一世の士君子の心配するのは無理ならずと

思ふ。然しかゝることは願はしからざることゝするも已に事實であるならば是亦如何ともする能はずと思ふ。たゞ成るべく其男女自ら尊敬するの心を抱いて過ならんことを希ふの外はない。男女の過なるものは畢竟自敬の念が足らぬ故に起るのである、故に我少年少女は己れの一身は一家に關し、一國に關して、なかなか重大なることを考へて自ら愛惜し、自ら尊重するの念がなければならぬ。昔マヂニーが勞働者に對する福音(ゴスペル)を述べた、それは言々句々悉く肺肝より出でゝ一世の勞働者を動かしたのであるが彼が最も力を盡したのは己れに對する責任を怠てはならぬといふ事であつた。今より之を讀んでも人をして自ら重ずるの禁ずべからざるを感ぜしむるのである。吾輩は近來少年少女の交際及び其弊害についての議論を屢々聞くのであるが徒らに其弊を訐發するのみであつて、彼等を啓發し、己れに對する責任を知らしむる議論の少いのを深く遺憾とする吾輩は已に少年少女の交際を今より開く必要はないと思ふが、若し已に事實となつたとすれば如何ともする能はざるのであつて、只之を導けば弊害のない樣にすること能はざるにあらずと思ふ。我國の士君子が初めて亞米利加、英國等に行て一番驚いたのは男女の馴々しくして而も其間に分界あつて我々の想像するが如き弊害の少きにあつた、爾來我國の有樣はどうかといふに冥々の間に此風の感化をうけつゝある。而して歐米の有樣に驚いた我國の風は更に又支那人民の爲に驚かれて居る。二三年前我國に視察に來りし支那學者の紀行文を見ると、旅館に宿りしに客の寢床を婦人が仕末するのを見て由々しき大事なるかの如く書いてある。さりながら此風は我國に數百年來存して居つたので歐米の風を眞似たでもなければ、又此制の爲に特別の弊害が起つたといふことを聞いたこともない。故に少年少女の交際は別段させる必要はないと思ふが、已に事實となつて居るならば又張膽明目して書を焚き儒を坑にするの必要もあるまいと思ふ。若し其間に弊害ありとせば風の神となつて吹き拂はんとするも出來ぬことであるから、火の神となつて其弊を脫ぎ捨てさしむるの外なしと思ふ。男女學生の交際に對する火の神の働とは何ぞや、即ち少年少女をして自ら愛惜し、自ら尊重するの念を起さしむることである。否な猶り少年少女のみならず我日本國民の總ては之より自ら愛惜し、自ら尊重するの念を養はねばならぬと思ふのである。（文責在記者）

暗示の社會に及ぼす影響（上）

文學士　福來友吉

中央公論からして催眠術といふものが社會に及ぼす影響のことに付て何か話をして呉れろといふ委託があつたのでありますが、私は催眠術の理論の方は稍や研究した積りであるけれども、其物が社會の上にどれ程の影響を及ぼすものであるかといふことに付ては餘り思ふ程研究したことがないのであるからして、實は其御依頼には應じ兼ねた譯なのである、それであるからして自分は十分滿足する丈けの研究はないのであるけれども、是まで研究し來つたる所の事柄に依つて催眠術の原理たる暗示が社會に及ぼす影響は斯ういふものであらうかといふ推論的の考があるが、それをば御話申して置きたいと思ふのである

此暗示といふものが社會にどれ程の影響を及ぼすものであるかといふことに付ては、先づ第一に暗示といふものは心理學上如何なる意義を有つて居るかといふことから論じなければならぬと思ふ、此暗示の意義に付ては他の雜誌に於ては屢々論じたる所であるけれども、何しろまだ此言葉は新しい言葉であつて、世間は未だ十分な意義を知つて居らないのであるからして、更に暗示の社會に及ぼす影響を論ずるに先つて其意義を摘んで申したいと思ふのである、然るに此暗示といふものゝ意義を論ぜんとするに先つて、先づ觀念の力といふことを論ずる必要がある、觀念は力なりといふことは一切の暗示現象從て催眠現象を說明する爲めの第一原理となる大切なものなのである。觀念といふものは單純なる主觀的事物であつて、精神身體の上に物質的勢力程の大なる働を有するものでないといふことは多數の人の思つて居る所である、併し是は甚しき間違ひである、實に人間が此世に處して行く上に於て最も不利益なる所の間違ひであると信ずるのである、實に此觀念といふものは力である、其活動といふものは物質上の活動と殆ど同一のものである、時としては物質の活動よりも更に大なることがあるのである、例へば太陽の光線が網膜を刺戟して視感覺を生ずるといふことは物質上の力である、世人は視感覺を生ずる所の刺戟は唯此光線と云ふ物質の勢力ばかりであつて、觀念にも是と同一なる力があるといふことは信じて居ら

ないのであらうけれどもそれは間違ひである、觀念といふものにも全く光線と同一なる所の力がある、彼の幻覺(即ち夢は其中の一である)といふのは全く觀念の力から起つたものである。即ち觀念といふものが眼の網膜を刺戟して玆に光線の刺戟に依つて生じたるものと同一たる神經興奮を惹起して、此神經興奮が腦髓に傳つて感覺的現象を生ずる、是が即ち幻視といふものである。有りもせざる幽靈を見たり、狐憑狂の人が狐を見たり、其他色々の有りもせざる物を見ることがある、全く是は太陽の光線に依つて生ずるのではない、精神中に存在する觀念が網膜を刺戟して生ずる所のものである、他の心理學者は幻視といふものを説明するのに斯ういふ理論を以てせぬのであるが、併し私は此の如く説明するのである、是は私か實驗したる事實に依つて立てたる所の説で十分なる證據があるのである。それで私の實驗的研究の結果に依つたならば觀念といふものには光線と同一なる力があると斷言が出來るのでありまする、又是と同樣で幻聽といふものは主觀的觀念が耳の聽神經の機關を刺戟して、玆に外界から來たる音刺戟に依つて生じたるものと同一なる神經興奮を生じ、此神經興奮が腦髓の中樞に傳つてさうして音の現象を生ずる、斯くして出來たる所のものは即ち幻聽といふものである、幻聽といふのは實際外界に聲がないのに聲を聽いたり、話する者がないのに話を聽いたりする、是は即ち幻聽、全く外界の音刺戟から來るのではなくして主觀的觀念の作用に依つて生じたるものである、それであるからして觀念といふものには外界の音刺戟と同一なる力があるといふことが出來るのである、又何をも味ふことなくして味ひを感ずることがある、是は幻味といふものである、又何等の刺戟もなくして香ひを感ずることがある。之を幻嗅と名くる、是等も外界の物質的勢力に依つて生じたる感覺現象ではなくして全く觀念の刺戟に依つて生じたるものである、即ち觀念が舌の味神經を刺戟して生じたるものが幻味で、觀念が鼻の嗅神經を刺戟して生じたるものが幻嗅である、それであるからして主觀的觀念には味ひや香ひの感覺を生ずる所の力もある、又更に甚しいものになつて來ると觀念の作用に依つて火傷を生ずることがある、例へば人を催眠術に罹けて燒火箸であると僞つて筆の軸でも當てた時には其筆の軸の當つた所の部分は忽ち充血して遂に水腫を生ずることがある、全く火傷の現象である、尤も是は甚しき現象であ

つていつても催眠術の現象に於て見ることが出來るといふ譯ではないけれども、能く罹つたる人に於ては斯ういふこともあるのである、是は全く今自分の手に燒火箸が當つたのであるといふ觀念の力に依つて遂に其部分か充血して火傷と同一なる水腫を生じたのである、實に觀念の力といふものは甚しいものである、又フォーレル氏は或女を催眠術に罹けて乳の所に郵便切手のやうなものを貼り付けてさうして之を發泡膏であると云つて僞つたる所が、果して其部分が水腫をして發泡したのである、即ち觀念といふものには發泡膏と同一なる力があるのである私が或人に催眠術を罹けて手の脊中の所を捻めるのであると云つてちよつと指の先を觸つたのである、さうした所が忽ち其局部が充血して紫色になつて、丁度其處を捻つたと同一なる現象を生じたことがあつた、捻められたといふ觀念が此の如き現象を惹起したのである、是は能登國七尾の人であるが、其人が若い時に一遍死んだのである、死んだのであるからしてもう棺などの用意をして野邊に送ることにして置いた所が、忽ち其人が生きて出て周圍の人を驚かしたのである、其時其蘇生したる人の話がなかなか面白い、今私は地獄へ行つたのである、地獄へ行つて鐵の門の所まで行つた所が、赤鬼が居つてお前はまだ此所に來るのは早い、今一度娑婆に還すからと云つて大きな鐵の棒を持つて尻の所を擲つたのである、其擲られた時の痛さで以て今此通り眼が覺めて來たのであると云つた、さうして其擲られた所か眞赤に充血して、其人の一代其部分が赤あざになつて仕舞つたといふ話である、是は私が當人から直接に聽いたのてないが、其事を現に見た所の友人から聽いた話である、是といふのは全く觀念の力である。其人が實際死んだものなら生きて還る筈はないが、まだ十分死に切れなかつたのである、其死んだやうに見えて居る間に地獄に行つた所のことが精神に浮んで、さうして尻の所を金棒で擲られたといふ觀念が浮んだのである、其觀念の力に依つて尻の所にさういふ赤あざを遺したのである、是は皆觀念の力である

又觀念の力で病ひを治すといふやうなことは、澤山あることで同じ藥を盛つても藪醫者の盛つた藥よりも東京あたりの有名の大家の盛つた藥の方が利き目が多い。藥に別段變つたことはない、同じ藥を盛つて居るのであるけれども藪醫者の盛つた藥より大家の盛つた藥の方が早く利く、是は全く大家を信用する觀念の働

きである、又世の中には禁厭いて以て病ひを治すことがあるが、是は全く禁厭ひを信仰して其の結果として治るので、即ち觀念の力で病ひを治すのである、斯んなやうなことは幾らでも實例があることであるからして一々それを擧げることも出來ないが、唯其中の著しいもの一つ二つを言つて置かうと思ふ、私の知つて居る岐阜の醫者でありますが、其人の患者にヒステリーの女があつた、其ヒステリーの女が度々胃痙攣をやつたのである、其時に其醫者がモルヒネを注射してやると其胃痙攣が治まる、それていつても胃痙攣をやるとモルヒネを注射する、注射すると直ぐに治る、斯うなつて居つたのである、所がモルヒネを餘り度々注射するとモルヒネ中毒を起して患者の爲めに惡いので、そこて醫者が考へて數回モルヒネを注射した後に實際モルヒネを注射せず、水を注射針に入れて是がモルヒネであると言つて注射した所が、矢張り實際のモルヒネを注射したと同一に忽ち其胃痙攣が治つたのである、それから其以後いつでも胃痙攣の時にはモルヒネを注射せずして水を注射して其度毎に治つた、それで亦患者に於ても水を注射されたのであるからモルヒネ中毒を起すことなくして能く病いが治つたのである、

是はどういふ譯であるかといふとヒステリー患者は醫者からモルヒネを注射されたと信じて居るからして其の觀念の力が強く働いたからして其結果として胃痙攣の苦みも治つたと云はねばならぬのである、又是は私の友人から聞いた話であるが、其人が千葉に旅行したことがある、其時に千葉に虎列剌が流行したのである、そこて或人が虎列剌に罹つて非常に下痢をやつてもう醫者が集つて居るけれども到底是は治らないと云つて匙を投げて持餘して居つたのである、其時に千葉に行つた人が其事を聴いて虎列剌ならば極く〳〵良い所の藥を持つて居ると云つて五六粒の丸藥を出して、是は虎列剌に向つては最も良い所の妙藥であるが、併し是は人から貰つたので澤山ない、唯殘りが五六粒あるが之を皆やることは出來ないから、一部分、分けてやると云つて二三粒を分けて、それを最とも大切にして虎列剌患者にやつた、虎列剌患者がそれをば飲んだ所が醫師が手を離して匙を投げた病人が一週間程で忽ち全快したといふことである、其丸藥といふものは虎列剌の藥でも何でもない、例の萬金丹の古びた黴の生へたやうなものであつたが、醫者が匙を投げるまでの虎列剌患者が治つたのを見ると、之を飲みさへすれば

自分の病ひが治るものだといふ觀念を生じたのであるから、其觀念の力に依つて病ひが治つたのである、其外色々あるが、別段澤山實例を擧げるにも及ぶまいと思ひます、此頃催眠術で以て病ひを治療するといふことが流行るのであるが、此催眠術で病ひを治すといふのは結局病んで居る所の人に其病ひの治るといふ觀念を十分與へ、其觀念の力で病ひを治してやるのであります、

是は觀念の力で病ひの治る方の話であるが、又觀念の力で病ひを起すこともあるのである、群馬縣前橋附近の或村に五六軒の家で共同的に使用する、一つの井戸があつたのである、或日のこと一人の女が水を汲みに行つた所が其釣瓶に獸物の毛が少し這入つて居つたのを見たのである、そこで是は不思議であると云つて井戸の中を調べて見た所が、一匹の猫の死骸が古くなつて其中に落ちて居つたのである、其事を知らなかつた時までは別段變つたこともないのであるが、井戸の中に其古猫の死骸があるといふことが分つた其當日、彼處でも此處でも其水を飲んで居る人の家では下痢をするものがあつたり吐瀉する者を五六名出したのである、なぜ此の如く病人を生じたといふと、全く此の如き水を飲んで居つたからして何れ腹に惡いであらうといふやうな觀念が強く現はれて、其結果として或は下痢し或は吐瀉する者が出來たのである、又是は日向國の或醫者であつたさうです、其人が病人を見舞ひに行つて饑じい腹で急いで家に歸つて來た、其時に何か早く食いたいので急に戸棚を開けて見た所が、其處に鯨の生肉があつたのである、日向の國の方では鯨を生で噛ることが隨分流行るさうですが、戸棚に丁度鯨の肉があつたから是は結構であると云つて、饑じいものであるからしてそれをガツ／＼食つて大變旨く感じたのである、それはそれで宜かつたが、後になつて妻君が戸棚を明けて見るとそれがないから驚いて、誰が食べたのであらうと言ふと、それはおれが食つた實に旨かつた、そこで妻君が默つて居れば宜かつたが、あれは鯨の肉でありませぬ、牛の肉であると言つた、さうすると先生吃驚りして是は大變だといふので非常に下痢をして嘔吐をして苦んだといふことである、若しも牛の肉を食つたのでも妻君が默つて居れば何のこともなかつたのであろふが、之を聞いた爲に斯くなつたのである。今では其人は牛の臭ひを嗅ぐことさへいやになつたといふことである、全く是は觀念の爲めにさうい

ふことになつたのである、隨分心配や恐れの爲めに熱が出たり病氣になるなど丶いふことはあるとである、斯く觀念といふものは人の病ひを惹起すばかりてなく、時には觀念といふものが人を殺すことさへあるのである、それには詮索して見たらば隨分澤山實例のあることであるけれども、玆には一つ外國の面白い實例を擧げて見やう、セルヴィヤといふ國の役人に觀念で以て死んだといふ話が玆に一つある、其話の大體を一つ話して見ませう、セルヴィヤといふ國の首府にベルグレードといふ町がある、其役所にアデスといふ一人の屬官が勤めて居つた、此人はなか／＼身體の壯健な人で、役に就いてから二十年未だ曾て病氣の爲めに一度も役所を休んだことがない、極めて精勤家で長官の信用を得て居つた人なのである、所が世の中は不如意なもので、さういふ工合に其人が能く役を勤めて長官の氣に入るといふと、他の人が之を憎んでどうかして彼奴を一つ休ませて見たいものであると、五六の同役が相談を致して、或日アデス先生がいつもの通り役所に出た其歸り道を見計つて待伏せをして居つたのである、アデス先生はそれとも知らず晩方家の方に歸つて來る道て、一人の同役がフット物蔭から現はれて「ヤ、お前は何處か惡いのではないか大變どうも顏附が尋常てない」と云つて、怪し氣な顏をして別れて行つた、そこてアデスは自分の身體が強いので別段何とも思はぬが、さういふことを言はれるのは變なことであると家の方に歸る、又二三丁行くと別の人が出て來て「ヤ、お前の顏は大變惡い、何處か身體に變つたことはないか、此頃は虎列刺が流行るから注意せねばならぬ」と云つて別れた、愈々變だと思つて又歩いて居ると、又三番目の同役が待伏せて居つて、直ぐ側に寄つて顏を見て「どうもお前の顏は眞靑になつて居る」それから脈などを取つて見て「是はどうも脈が高い、何でも注意せねばならぬ、お前の脈は今百四十打つて居る、乾度虎列刺に相違ないから早く病院に行くが宜い」と鋭く言つた、此一言を聽くとアデスはアッと一聲叫んで其所に悶絶して、其儘擔架に乘せられて家に歸つたが竟に其侭死んで仕舞つたといふことである、斯ういふ譯で觀念といふものは人を病氣にする所ではない、時として殺すことさへある、それであるからして觀念といふものは人を病氣にしたり人を殺したりする所の力があるのである

右の如く觀念といふものには非常に大なる活動力が

あるのであるが、併し斯く申すと或人は次の如く言ふてあらう、果して觀念に右の如き力があるものとしたならば、どんな暑い時でも寒いといふことを考へたならば忽ち身體が寒くなつて來る、又自分の足が動かないと心で考へたならば忽ち足が動かぬやうになるべき筈である、所が實際さうでない、暑い時に寒いと考へて見ても一向寒くならぬ、矢張り暑い時分は暑い、足が動く最中に當つて動かぬといふことを考へて見ても矢張り足は依然として動く、どうも其所が理窟に合はないではないかと斯ういふ工合に疑問をするだらうと思ふ、それは一應其通りである、併し之には相當の答辯がある。私は此疑問に答ふる爲めに三昧と稱する精神狀態を說かねばならぬと思ふ、三昧といふのは精神の或一定の方向に專注して更に他念なき狀態のことである、觀念が其活動力を實現する爲めには必ず此三昧の狀態に這入らねばならぬのである、寒いといふ觀念には實際寒い感覺を惹起すべき原動力があるのである、併ながら吾人が暑い時に當つて心に寒しと觀念して見ても更に寒くならないといふのは、是は觀念に寒いといふ感覺を惹起すべき力がないのではない、此力はあるのであるけれども、寒いといふ觀念が其力を實現するに必要なるだけ精神の注意を占領することが出來なかつた爲めである、即ち吾人は一時ちよつと寒いといふことを觀念して見ても、忽ちにして亦暑しといふ觀念が現はれて出る、或は又此の如く寒いといふことを觀念して見ても果して寒くなるものであらうかどうであらうなどゝいふやうな疑が生じて來る、此疑や暑しといふ觀念が出て來るものであるからして、一時寒いといふ觀念を浮べて見た所が忽ち是等のものゝ爲めに妨害せられて寒いといふ觀念が其働を現はすことが出來ないのである、言換へて見たならば反對觀念が現はれて出て寒いといふ觀念の活動を妨害するからである、斯くなつて來ては如何程觀念に力があつても其力は到底實現することが出來ないのである、それであるから寒いといふ觀念が其力を實現して實際の寒さを感ずる爲めには唯一時ちよつと寒いといふことを思ひ浮べたばかりではいかないのである、一心一向になつて寒いといふことを心に觀念して、更に此觀念を妨害する他の觀念なきこと、即ち寒しといふ觀念に向つて三昧の狀態に入らねばならぬのである、斯くする時は酷暑炎天の時はおろか、烈火の中に在りても寒さを感ずるのである、彼の甲斐國惠林寺の禪僧に快川

師といふ者があつた、此人が信長の爲めに攻められた時、安禪不必山水、滅却心頭火亦冷と喝して泰然自若として猛火の中に死んで仕舞つたといふことがあるが、即ち是は火の中に在りながら寒いといふ觀念の三昧の狀態に入つた最も良き實例である、又夏の夜蚊軍に肌を脫いで如何程蚊に螫されても平然として坐して居る所の禪僧もある、又尻を捲つて荊棘の上に坐し平然として痛みを知らざる所の禪僧がある、是も亦三昧の結果である、蚊に喰はれても痒いといふ觀念を去つて仕舞つて精神を他の方に向けて居たならば決して痒いものでない、荊棘の上に坐つて居つても痛いといふ觀念を去つて仕舞つたならば痛い筈はないのである、それであるから定力の修つた人といふものは自由自在に三昧の狀態に入つて、實現せしめんとする觀念の力を何處までも實現せしむることが出來る、即ち火の中に在つては火の觀念三昧に入り、水の中に在つては水の觀念三昧に入るといふやうな譯で、隨時に隨所に三昧の狀態に入ることが出來るから觀念の力で物質の勢力に抵抗することが出來る、單り是は禪ばかりでない、佛教の修養といふものは殆ど皆觀念の力を應用して成りたるものであつて、何れも三昧の大切なることを說くのである、例へば美人の爲めに心を動す時には不淨觀と云つて人間の汚いといふことを心に觀ずる、さうするといふと次第〳〵に精神は人間の汚いといふことに充滿されて、竟に其女に對する愛着心を滅して仕舞ふことがある、全く不淨觀といふことは不淨觀念三昧のことである、其他幾らでもあるが、皆觀念の三昧を應用して修養の本として居るのである、併ながら佛教の三昧といふものは皆練習の結果であつて、練習なき通常の人には之に入ることが出來ないのである、併し通常の人であつても或場合に於ては偶然に三昧の狀態に入ることが出來るのである、例へば進擊の熱中しつゝある所の兵士は鐵砲の丸に中つても更に痛みを感ぜぬことがある、思はず識らず血の出るのを見て自分が丸に中つたといふことを氣附いて其時に始めて痛みを感ずるのである、是はなぜさうであるかといふと、其兵士は進擊三昧に入つて居るからである、即ち其兵士の精神は一向專心に進擊の方に向つて集注して、痛みなどを受附けないやうな精神狀態となつて居るからである、カーペンターといふ生理學者は精神を講義に向くることに依つて激しき神經痛に對して無感となつた人である、「自分は

自ら講義することが到底出來まいと思ふ程激しき神經痛に苦みつゝある時に講義を始めたことが度々ある、然るに自分は一旦確乎たる努力以て心を講義の方に向けるや否や、忽ちにして神經痛は治つて仕舞つて、少しの困難もなく講義を續けて行くことが出來るのである、然るに講義が終つて注意が緩むや否や忽ち神經痛が現はれて來る、どうして今まで是れ程激しい神經痛を無感覺であつたかと驚く程激しき勢ひを以て神經痛が現はれて來る」と、斯ういふことを言つて居る、又ローゼンバッハといふ人の話に依ると、或女優が激烈なる齒痛の時に舞臺に出ても演藝中更に痛みを感ぜず演藝を滿足に仕遂げることが出來たといふ話である、此カーペンターでも又此女優でも詰り精神を或は講義の方に或は演藝の方に專注して其物に向つて三昧の狀態に入つた結果であらうと思はれる、パスカル、ウエスレー、ロバートホールなどゝいふやうな人も矢張り斯ういふことが出來たといふ話である、吾人にあつても熱心に圍碁して居る時には暑さも寒さも感じないことがある、又角力などを取つて居る最中には手や足に傷を受けても痛みを知らない角力が終り血の出るのを見て始めて痛みを感ずるといふことが多いのである、是も即ち碁に熱中して居る時は碁三昧である、角力に熱心して居る時には角力三昧であつてそれが爲めに痛みや暑さ寒さなどを知らぬのである、又被催眠者に例へばお前の手は最早無感覺であると云つて聞かした時には其手に針を刺しても又は切つても一向痛さを感ぜぬものである、是はどういふ譯であるかといふと、もし自分の手といふものはどんなことがあつても感覺はないといふ三昧に這入つて居るから、其三昧が實現したのである、

以上述べ立てたやうな事實があるからして私は次の如く斷言するのである、**觀念は力である、併ながら此力の實現は精神が觀念に向つて三昧に入ることを要す**るのである、若し此三昧に入ることがなかつた時には觀念は力ありと雖も之を實現することが出來ない、斯う私は斷言するのであります

以上論じたる所に據つて觀念の力のあること及び其實現はどういふ場合に於て在るのであるかといふことを略ぼ說き盡したと思ふ、是より暗示といふものゝ意味を說かうと思ふのある

露國宮廷の内幕

福本日南

世界最大の伏魔殿――尼古剌は元理想の人――ツアールの初戀――世界漫遊は失戀の苦を慰せんが爲――亞歷山三世の崩御――ツアールの即位及結婚――皇后の性行――皇帝の施政と革政党の陰謀――リヴアヂヤの遊離と近世の暗殺法――皇帝の理想を抱ける理由――皇帝御幣擔となる――秘密探偵の神聖同盟――ピセドノチエフの專權――アレキシーフ將軍

今の世界に三つの伏魔殿あり。其一は北京なり、又其一は君士坦丁堡なり、最後の一は彼得堡なり。而して其仕掛の最も大にして化物の最も多きこと、この彼得堡の伏魔殿を推すべし。諸々の罪惡皆此の内に籠り、世界の禍亂も恐らく此中より發するならん。さらば其魔王と推さるゝツアールは自由自在の働が出來、爲さんと欲する所は何事をもなし得るか、又其身邊は極めて安全にして總ての惡魔は大魔王に服從するかといふに、否々事實は決して然らず、此大魔王の身邊には常に彼に向て危害を加へんとする無數の小魔あり、須臾の間も覬覦の念を絶つことなきなり。故にツアールの名の下に外は世界の恐怖を起すに足ると雖も、内に於てはツアール自身如何にして己れを安穩に暮さんかと際限なく善心煩悶せらる。斯くいへばとて現ツアール尼古剌二世を罵らんが爲にあらず。尼古剌二世は先帝亞歷山三世と違ひ、元理想の人なり、寧ろ人道を重んじ、世界に平和を送りたしといふ善良なる君主の一人なり、さりながら悲しい哉、其意志薄弱にして總ての專政主義の宮廷に盤屈する弊害に打勝つ氣力なし、爲めに不知不識の間に舊來の專政主義にくさられ、其意志に反して中は壓制を行ひ、外は世界に禍亂を送る中心となれり。

此人の生活に就て小說的の話あり、尼古剌がツアールウッチ即ち皇太子なりしとき彼得堡の一頁家の令孃とわりなくいひかはされたり。此時に當りては彼の眼中帝位もなく寶冠もなく、此女と偕老同穴の望を遂ぐれば尼古剌の望は足れりしなり、其事が父の亞歷山の耳に入るや否や、亞歷山は大に怒り、汝不屈至極の奴なり、我ロマノフ家の家風を墜し、尊嚴を瀆し、御先祖ピーター大帝の顏に泥を塗るものは貴樣なり、若し其女を斷念せざれば帝位の繼承者などゝは以ての外なり、早速皇太子を廢して了ふぞと強迫せられたり。されど此時は皇太子が非常に其女に熱心なりしを以て大に起て爭はれ、なか〳〵父君の惡口などに同意せざ

りき、さるによつて亞歷山は怒りて皇太子を宮外に逐ひ出し、而してやがてヘッセンの王女今の露國皇后たるアリス姬を皇太子の承諾をも待たず父の權威によりて其妃とすることに決したり、皇太子は不平滿腹なりしも意志の弱き人の常として、其考がいろ／＼に動搖し、いひかはしたる女と添ひ遂げたきことは添ひ遂げたし、されど亦一度大露西亞皇帝の冠も戴いて見たし、此二つの考が晝夜に戰ひ、遂に悶煩の結果暫らく漫遊をやり、息抜をせんとて出掛けられたり、彼の日本に來て大津の水邊に血を浴びせられたるは此漫遊中の出來事なり、返す／＼も薄命の皇太子なるかな。

已にして本國に還られ亞歷山三世はリヷアヂアの離宮にて崩御せられたり、我々と違ひ凡そ高貴なる人の彝倫の關係程冷かなるはなし、亞歷山の崩御の際に皇太子の間に合はれしや否やはよくわからず、湯藥に侍せられしや否やもわからざるも兎に角も先きに不中となられし親子の和解は父帝亞歷山の冷たくなつて寢て居らるゝ玉床の前に於いて始めて出來たり、而して尼古剌は父帝に繼ひて露皇帝の位に即かれたり、已に皇帝になられたる以上は先帝の遺詔に違ふことを得ず。アリス姬はヘッセンより入りて皇后となられたり、扨て其アリス姬即ち今の皇后と逢うて見らるゝに、才貌兼備の人にして而かも皇帝に心を盡して仕へらるゝこと一方ならず、かるが故に何時となく先にいひかはされし女のことも忘れたり、否な見ぬ前にこそ嫌ひたれ、逢うて見れば此人の方がよかつたかも知れぬなり、夫れが爲め夫婦中も非常によく、茲に圓滿なる家庭を造りたり。惟ふに尼古剌が朕は幸福なりと感ぜられしは此刹那なりしならん。噫々果して彼は幸福なりしか、昔ソロンが「人間の幸福は蓋棺の後ならざれば知るべからず」といひしが如く此皇帝の幸福も甚だ當てにならぬ幸福なりしことは爾後の歷史の敎ふる所なり。

皇帝の位に即かれし時の歐洲の評判は實に非常なりし、此理想家にして而かも人道家たる皇帝がツァールとして立たるゝ以上は露人には自由を與へ、世界には平和を送り給ふべしとは一般に期待する所なりき、皇帝及び皇后が初めて伯林より維納、巴里等を見舞はれし際、其馬車の至る所、其地の國民より非常の歡迎を受けられたり、何ぞ知らん、こは一般の誤想なりき、皇帝は即位の當座こそ暫らく專政主義、官局主義と戰ひ見られたれ、何が扨意志の弱き人なれば忽ちの間に壓せられ、手も足も出ぬ樣になつて矢張り歷代の君主

と一般に專政抑壓の木主として祭らるゝに至れり、それ丈けならば未だしも安全なり、されど流石に自家の理想を土臺より捨つることは何人も出來ぬことにて皇帝も其一人なり、それが爲め動ともすれば自家の懷抱せらるゝ理想を其政府に實行せんことを希望せらるゝことあり、夫れ故ポビドノスチエフ始め專政黨にとりてはなか／＼油斷ならず、かゝる人を君主と戴く以上は何日何時如何なる風の吹き廻しによりて先朝以來確實に享有する地位と權力を剝奪せらるゝ恐なしとせず、寧ろ此皇帝を押し込め、皇太后をして攝政の地位に當らしめ、而して己等は心の儘に此政府の上に翔翺するの得策なるには若かずと考へたり、以後彼得堡の中に恐るべき陰謀絶えず、皇帝の身邊は時々刻々危くなれり。

夫れが爲に或年皇帝は皇后と共に名は避暑と稱して、實は避難のためにリヷアヂャの離宮に趣かれたり、此リヷアヂャの離宮は先々朝以來のものにして、結構の裝置いふばかりなく、加ふるに其地はクリミヤ半島にありて風景といひ、氣候といひ、人間界にあるエデンの園とまで歌はるゝ所なり、こゝに移られし以來、皇帝の健康は大に勝るべき筈なるに、卻て次第／＼に衰弱せられたり、其初めてこゝに來られし時は毎日皇后と共に散歩せられしものが、一二ヶ月の後には枕に就て起らるゝことも出來なくなれり、爲めに多くの有名なる醫師を召して診察させられし所が近世流行する恐るべき一種の毒殺法にかゝらせられたるを發見せり、それは毒を一時に進むれば毒殺は直ちに分るを以て極めて少量の毒を以て漸々に弱らしむれば毒殺たることの知れざる中に其毒に中りて死す。これ近來發明の毒殺法にして、眞僞は知るべからざるも日本に於ても野口寧齋事件もこれに相當するよき材料となれり、皇帝は正しくこれにかゝられたり、それが爲に大騷動となり、極めて秘密に此陰謀の張本人を詮議したるも如何にしても發見することを得ざりき、此頃よりして理想の皇帝が其理想を失ひかけたり、何となれば皇帝は寧ろ寛大なる方にて先帝の實行せる嚴酷なる警察制度の如き寧ろ實行し得ざる方の人なりき、されども敵はニヒリストと思ひきや、ソスアリストと思ひきや、皇帝左右の侍御の臣にあるといふに至りては如何に寛大なる皇帝も驚かざるを得ざるなり、それが爲めに警察を嚴にすることを命ぜられたり、皇帝一度其意を示せば待て居ましたといはぬばかりに壓制の火の手は

皇帝の意志の十倍となつて行はる。これについてよき一例あり、皇帝病後一日リヴアヂャの中を逍遙して居られたり、薔薇の花の極めて美しく咲き匂ふを見られ、其處に居合せたる園丁に一枝手折りて進せよと命ぜられたり、園丁は恐れ惶みて其花を手折り、皇帝の前に進めり、皇帝の距離三四間となりし時忽ち何處よりかヅドンと一發、發砲の音して其と同時に園丁は其儘其處に倒れたり、皇帝驚き見るに園丁は前額を打たれて即死せり、其時ばらばらと七八人の日本にては角袖巡査ともいふべき平服したる警官、皇帝の周圍を取り巻けり、皇帝は餘りのことに驚かれ、其警部長ともいふべき男に如何なる次第かと問はれしに、警部長謹みて奏すらく、長官の命ありて身分知れざるものが皇帝の御前十メートル以内に進まば擊ち倒せとの事なり、只今遙かに見れば、怪しげの者近くにより擊ち倒せるなりと、かゝることは一つのみならず、而してかゝることのある每に極めて其跡を秘密にせられたり、かるが故に一般人民の方より見れば皇帝故なくして無辜の民を殘害することゝなる、此等も亦人民が皇帝を怨慕するの一原因となれり。

彼や此やの事によつてリヴアヂャの離宮に居るも面白からず、彼得堡に歸らるれば、こゝは又依然たる陰謀の大魔窟なり、さなきだに神經家たる皇帝は益々神經家とならざるを得ず、人間は危害の四集する時は多くは迷信家が御幣擔となるものなり、聰明なるべき筈の皇帝も此等の事情によつて何時の間にか非常の迷信家、非常の御幣擔の仲間に入られたり。先朝以來宮中に入りし一人の豫言者にして而かも極めて奇蹟を行ひ、日本社會でいへば盲目を目明きにし、躄の足を立てると評判の下に宮中に入りしジャンの豫言を極めて信ぜられ、次で佛人フイリップを信ぜらる。フリップは日本の梓巫(アヅサミコ)の類なり、亡靈の口寄をするものなり、國家の大事あればこれに窺を立てられ、何ぞといへばピーター大帝とか亞歷山一世とかの靈魂を寄せてそれに色々とのを問はる。これについて氣の毒なる一話あり、今皇帝の無二の賴とせらるゝものは皇后の右に出づる人なし、皇后は心を盡して皇帝を助けらるゝ者にて、皇后の玉腕によらるゝ時のみが皇帝の安慰なるべしと思はる、所が梓巫(アヅサミコ)に聞かれたる結果によれば皇后も餘り賴にならず、何となれば一日ピーター三世に如何なる譯にて死せられしと三世の靈を寄せて問かれしに、三世の靈は、自分は不幸にして皇后カザリン二世の爲

に殺されたりといへり、されば皇后とても油斷はならず、皇帝の煩悶一層を加へたり、第三番目に皇帝ノ親任を得たるものはビゼトノチエフなり、ビゼドノチエフは實に皇帝の短所に附け込み、一朝にして顯榮の地を得たり、其故如何といふに、皇帝の身邊を窺ふものは國內に無數なり、從てこれが豫防として無數の秘密探偵發せらる、これは今に始まりたることにあらずして歷代以來の慣行なり、從來皇帝を窺ふものは在野の政黨なりしが今は在朝黨も油斷ならず、又一方には無賴黨の不平動靜も探偵する必要あり、こゝがビゼドノチエフの附込み所なり、ビゼドノチエフは神聖同盟秘密會を組織し、其會員は一般には知らさず、只其姓名を知るものは皇帝只一人なり、此神聖同盟の會員たるものは皇帝あるを以て一身あるを知らず、皇帝の爲めには何時にても身命を捧げて忠勤を奏すると自稱する輩なり、ビゼドノチエフは乃ち之れを携へて皇帝に對し、「臣等近頃中外の形勢を察するに朝廷の大官と雖も往々陛下に忠ならざるものあり、臣等愚鈍を盡して非忠奸賢愚を辯じ、以て陛下の叡慮を安んじ奉らんことを期す」といふことを以て皇帝を動かしたり、是を以て皇帝は彼を露國に於ける第一番の忠義者なりと安信せられたり、全體皇帝は勉强家にして毎朝六時頃より起きて朝の種々の勤をせられたる後、午前十時頃より國務を見らるゝなり、彼國は內閣制なければ、各國務大臣は交々入りて各自所管の政務を奏上す、それより前には臣下は逢はぬ例なりき、然るに何が扨勤王無比の神聖同盟を提ぐるビゼノチエフなれば彼一人には十時前に特に謁見を許可せらる。これが非常の特權なり、これが爲に非常の危險なる事が出來たり、如何なる誠意誠心の國務大臣と雖もビゼドノチエフが中にありて「某大臣は近頃斯の如き陰謀を巧む、陛下に不利なる斯々のことを謀る」と讒すれば、昨日まで露國政府に於いて威權嚇々たる大臣も今朝は忽ち免職を蒙る。前大藏大臣ウヰッテ氏の如きは確かに之に中てられた一人なり。それ故何時となくビゼドノチエフの勢中外を傾くるに至れり、彼に黨し彼に媚ぶるものは皆信用せらる、逃ぐるを以て有名なるアレキシーフ將軍の如きは此神聖同盟の一人なりき、これによつて予は初めてよくわかつた事あり、彼のビゼドノヂエフは今暫らく退けられて居るも、其同盟黨は依然として存し皇帝は矢張り此等のものを忠臣と思うて居る樣なり、見られよ、アレキシーフなどがあれ丈けの國家の大事

を誤れば夙にも身の罪を問はれざるべからざる筈なるに依然として高位を保つは全く此理由なり。

噫呼皇帝はジアン及びフイリップに聞かるゝ間は其害尚少かりしがビゼドノチエフに聞かるゝに及び遂に國家の危急を廂ち得られたり、此位わからなくなつて來ると最早や婦女子にも劣れり、將來此君主が政府を改革して赫々の光を揚ぐるが如きことは餘程緣遠きことならんと思ふなり。(文責在記者)

日南氏の時局論管に其趣味の津々たるのみならず、又よく鑿々として肯綮に當るを以て江湖に傳唱せらる。是れ偏へに氏の眼光よく社會の暗黒面に徹し、事物の眞相を觀破するを誤らざるに依らずんばあらず、此篇露國闇黒史の第一篇にして、次號には第二篇として

露國軍事界の内幕

を掲載せらるゝことを約せらる。露國の眞相を知らんとするの讀者は一讀大に得る所多かるべきを信ず。

▲男女學生の交際　文學博士　三宅雄次郎

▲人類の生存競爭　理學博士　丘淺治郎

右二篇は次號の誌上に掲載せらるべし



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と勢力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず、

亞細亞に於ける英國の勢力

「モーニング、ポースト」

中央亞細亞會の會員はアルベマール街に於ける彼等の本部に集り、亞細亞に於ける英國の勢力と題するサー、トーマス、ホルデヒの講演を聞けり。今彼の說の大要を記せんに、全印度を通じて英政府が至上の權力を有することは毫も疑を容れず、若し印度半島に向て侵略を試みんと欲するものあるも英國が印度を支配すべき先天的運命を有するものなるを悟らざるを得ざるべし、露國も亦中央亞細亞に於て無上の權力を有するを信ずるものなりと雖もそは英國のと趣を異にし、毫も人民の感情に根據を有せざる所の權力なり、加之日露戰爭の結果アフガン及びバルフの

酋長等は露國軍隊の歐洲的ならずして亞細亞的なるを視、信仰の點に於て甚だ擬爲たるものあるを知りたり。恐らくは戰後露國に對する態度に少からざる變更を見るべし、然れども彼等は露國よりも一層日本人の無信仰なるを嫌惡するものなり、かるが故に彼等は日本人の勇敢機敏なるを知り、又日本人が彼等の爲に戰はゞ大なる助力たるべきを信ずるに拘らず、英國が日本と同盟することは迷信深き彼等の喜ぶ所たるべきや否や少しく疑はざるを得ざるなり。

日露戰爭より生ずる影響を以て單に一時的のものとなし、露國の亞細亞に於ける兵力は戰後直ちに恢復せらるべきものとするも、露國が大規模の襲擊的行動をなさんまでには尙幾多の年月を費さゞるべからざる理由あり。カブールは印度に入るべき歷史的關門なりと雖も現今英國が其勢力を集中すべき地を求むれば、ヘラット、カンダハル、シスタン及びクエッタ等なり。吾人が日本人を評價するに稍々實力よりも少き數を附したると仝じく、又阿富汗士坦の自國を防衛する力を評價するに甚しく之を輕んずるの傾あり、彼等は平原に於ける大戰爭に於ては或は敗北を取るべきも、山地の不規則なる戰爭に於ては最も有力なる助力たらずんばあらず。

且つ印度に於ける戰爭に用ふべき材料は少くとも露國のそれに二倍せり。又露國と開戰の宣告あらば土人の熱心なる助力を見るべく、露國との開戰は印度の土兵によりて非常なる歡迎を受くべし、何となれば是れ最良なる土兵の多數にとりて其軍事的野心を實現するの好機會なればなり。吾人が日露戰爭より得たる教訓は日本人が國民兵役の義務を課して適者を徵集し、之に完全なる訓練を施したるによりて其兵の甚だ強きこと到底吾人の常備軍の及ぶ所にあらざること之れなり。我等は此法を用ひて印度人を訓練し、以て國境に備へざるべからず、英國軍隊は殊更に其身體に適せざる所に勢力を徒費するの要なかるべし、又阿富汗士坦の如きも遂に歐洲的訓練を用ふるに至るべきを信ず。今日本人が戰爭國民として最大のものたるに至りし理由を考ふるに、彼等が宗教的狂熱、征服的野心、掠奪的貪婪等に動かされたるにあらずして、實に純粹なる愛國心――國の爲に一身を犧牲とし、國の獨立を尊重する熱心――最も高尙なる意味に於ての愛國心に基ゐすること疑を容れず、愛國心は日本兵の強き原因なり、吾人も此原因をとりて我兵を訓練せざるべからず、こは英國及び印度兩國に通じて必要なれども殊に印度に於て其須要の急なるを見る也と。而して最後に彼は英露互に其弱心を捨て、商業上の利害を一致せしめて平和の破れざらんことを祈る旨を附加したり。

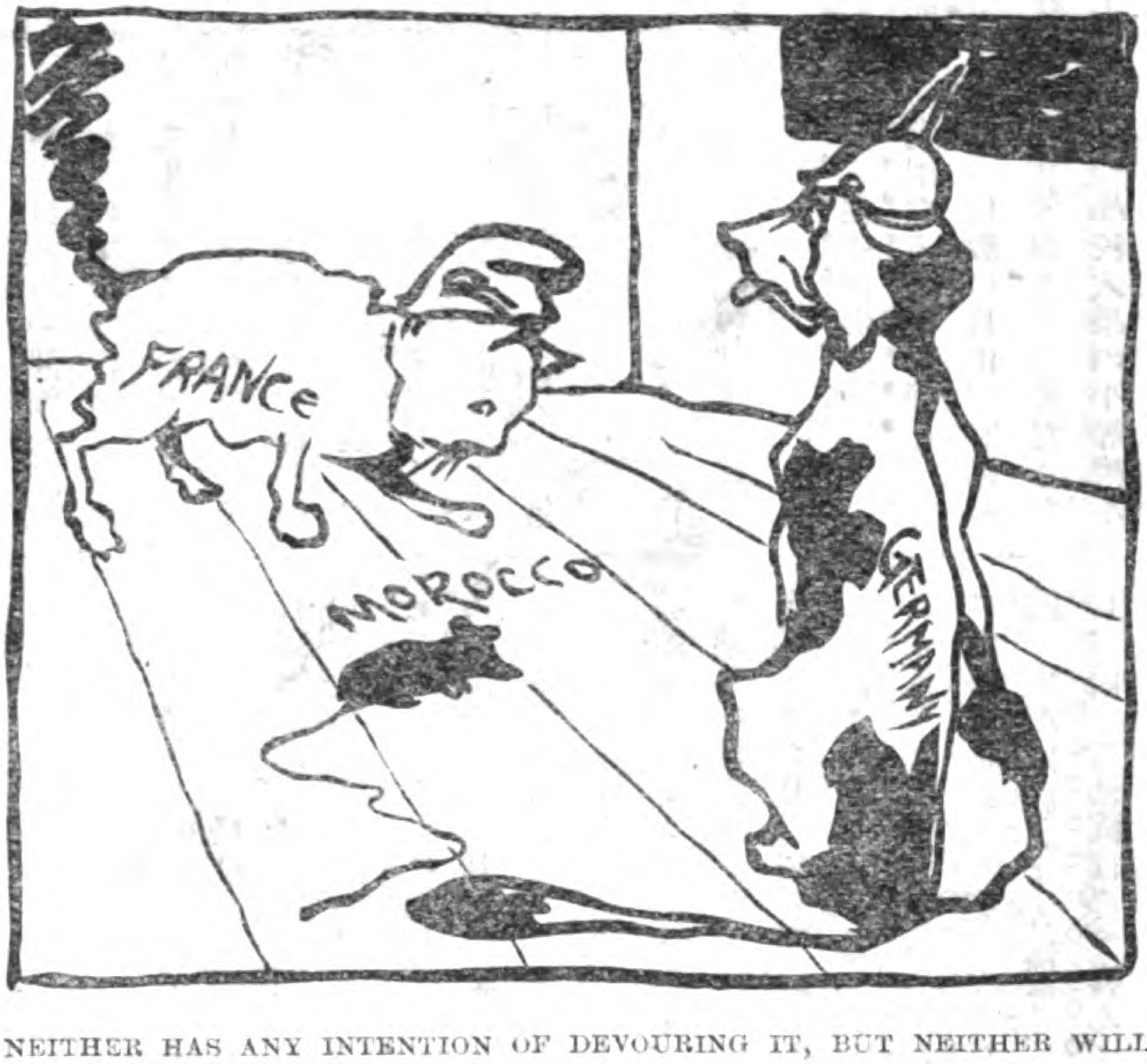
露國の猶太人虐待

「倫敦タイムス」

露國に於ける數千の猶太人が署名して露國大臣會議に呈出したる請願書を飜譯したるものゝ一節を載す。

「最近二十五年間露國に於ける猶太人に對する露國の法律及び規則を見るに五百万の猶太人を驅りて多くの乞食に變化せしめんとするものなること極めて明白なり。千八百八十一年の一揆中多數の猶太人の殺戮者を混じたるの事實を以て、當局者は常に猶太人を排斥して家宅を有し、財產を有するを禁ずるの好辭柄となしつゝあり。獨り新たなる土地に移住するを禁ずるのみならず、已に住居しつゝある舊地をも逐うて或る一小地域に限らんとするの策を取りつゝあり、境地より五十「バースト」の圏内に住し、其が爲めに其宅地を奪はれたる猶太人は已むなく彼方此方に

流涙せざるべからず、而して廣大なる露國の全版圖は猶太人の爲に僅かに三小限界を與へらるゝに過ぎず。猶太人の群衆は「殖民地領内」と稱せらるゝ二十五の部局に生活することを得れども、其他の露國の土地に住せんとするものは大學教育を受けて十年間第一流の商人たるか又は手藝に熟達したるものならざるべからず、而して手藝に熟達したるものとても何れの土地にも住する自由を有するにあらず、たゞ歐洲露西亞に於ける特別なる「殖民地領内」に住することを得るのみ、之れ猶太の工人はモスコー及びタウリンの邊に居ることを許されざるに依るなり。又最後に總ての猶太人に向て一の例外もなく悉く入るを禁ぜられたる土地あり、西比利亞即ち是れなり。猶太人は非常なる罪過を犯し、追放せられたるにあらざれば如何なる事情ありとても西比利亞に入ることを許されざるなり、かゝる居住の制限及び其他諸々の伴從的制限の結果として「殖民地領内」の都市及び町々は實に猶太人を以て人山を築かれつゝあり、歐洲各國及び其他の諸邦に移住せるものの加はれるに拘らず「殖民地領内」に於ける僅かの都市及び町々にある猶太人の數は四百二十萬の夥きあり、皆其狹きに苦んで劇烈なる競爭絶ゆることなきなり。



NEITHER HAS ANY INTENTION OF DEVOURING IT, BUT NEITHER WILL LET IT ESCAPE.

—*Fischietto* (Turin).

而して一方に於ては彼等の學校に入學することを防がんが爲めに補習學校に入るべき學生の數を一割となし、大學に入るべき數に至つては極めて少數のものに限られたるを以て高等學校に入るもの、數も甚しく減少したり、加之其少數の大學を卒へたるものと雖も其特權極めて小にして殆んど何等の益なしといふも不可なき程なり、何となれば猶太人は國家及び政府の官局に入ることを妨げられ、又地方會議に列することを拒まるゝを以てなり。又法曹界に入つて法律の運用を司るが如きも猶太人にとりては頗る難事にして司法大臣の特許あるにあらざれば能はず、宗教に關しては殊に嚴重にして最近十四年間猶太人より一人の牧師をも出したることなきなり。之を約するに露國の立法は露國に於て猶太人の生存することを不能ならしむるにありといふも決して誇大の言にあらざるを信ず。

所謂「殖民地領内」に於ける猶太人の數は凡そ其六割の多きを占め、而

して租税の負擔は其九割の重きを課せらるゝに拘らず、猶太人は一切其施政に關與するの權なく、被選擧權は素より選擧權さへ有するを得ざるなり、猶太人は非猶太人によりて支配せられ、而して其租税は實に苛酷にして惡意ある方法によつて收斂せられつゝあり、此等の方法及び規約によりて管理せらるゝが爲めに猶太人は却て聖彼得堡政府の恐怖及び厄介物とならんとし、「殖民地領内」に於ける全猶太人の二割は非常なる困阨の境に陷り、今や露政府の慈善的支給によりて生活するに至りたり、ヴイルナ、ベルヂツエフ及びオデッサ等の如き大なる猶太人社會に於ては猶太人の貧困者の數二割五分乃至三割三分の多きに達したり、此等の多數の貧困者を外にして明日如何にして生活すべきかを知らざる哀れなる賤民勞働者の數は幾何なるかを知るべからず、而して勞働者が有する唯一の武器――己れの好む工場及び職業を自由に選擇するの權――さへ猶太人の有せざる所なるを以て、猶太人にして若し餓死するを甘んじ、乞食となるを選ぶにあらざれば血涙を吞んで不法なる雇主の下に止らざるべからざるなり。又猶太人の資本家と雖も五月法の定むる所によりて行動の自由及び販賣の自由を制限せらるゝを以て決して幸福の狀態に達すること能はざるなり。

露國に於ける猶太人の此哀れなる境遇を改良して他の歐洲諸國に於けるが如くならしむる唯一の方法は勞働に關する苛酷なる壓制を撤し、他の露國民と平等なる權利を附與するの外なきなり。信教の自由、官制及び地方會議の參與等に次ぎ移轉及び居住の自由等を與ふるの外なきなり。又猶太人は選擧權を有し、財產權を有し、且つ學校入學の平等權を有せざるべからず、若し移轉自由及び職業の自由選擇等にして許されざらんか、そは到底秩序ある國家を造る所以の道にあらず、知れ、秩序ある國家は獨り、人民各自の能力を發揮し、其最善の能力を盡して生活するによりて始めて造らるべきものなることを。

日清同盟說

「ニューヨルク、サン」

今や在華盛頓の官吏及び外交家は多く意を清國の將來に注ぐに方り、世或は戰爭の終結が同國に及ぼすべき影響を惡惧するものあり、是れ他日露國が進んで清國に闖入せんことを懸念するが爲めにあらず、又列强が清國の分割を企て、若くは特權を同國に獲得せんことを懸念するが爲めにもあらずして日清同盟の成立せんとき、之に伴ふ危機の慮あるが爲めに出づ。抑も日本の戰端を開きたる目的は一に將來の福祉を全うせんとするに有るを以て日本は平和條約を締結するに當り、將來露國より來るべき危害を遏止せんことを努むべきは論を俟たず、故に其條約中大に警戒する所あるべしと雖も、露國の亞細亞に於て其國力を挽回し、自强を圖るを阻止することは日本の能くする所にあらざるなり。是を以て說を爲す者あり、曰く露國は數年を出でずして國勢を恢復し、國威を四隣に伸ぶるに至らん、是れ日本の警備を怠る可からざる所以なりと。米國の識者間に行はるゝ說に依れば日本の此際に取るべき自然の方針は清國と同盟して完全なる協商を遂ぐるにあり、斯くして清國を以て露國の南進を妨止する藩屛と爲さば日本は十分に安堵の思を爲すを得べし、而して清國は必ず喜んで此同盟を迎ふるならん、日本人は常に世に黄禍なるものなきを說き、又黄禍の如きものを現出するの意なきを揚言せり、此說の當否は姑らく措て問はざるも清國の事情に通曉すること殆ど自國の事情に於けるが如き華盛頓駐在の外交官は日清同盟の事實とな

るべきは自然の勢なりと思考せり。

華盛頓に於ては黄禍を憂慮するものありといふを得ず、日本は累次反覆して此の如き事の起るべき理なきを説きたるを以て人々其盲を信じて甚だしく黄禍を恐るゝものなしと雖も、日清同盟して露國の侵略を防ぐに至らんことは要路に在る者多く之を信ぜり、但し列強が此の如き同盟の成立を阻止するの計に出づるや否やは固より豫め知るべきにあらざるなり。

日英同盟微りせば露國は他邦の援助を受けたりしこと疑を容れざるに之あるが爲に能く他邦をして局外に立たしめ、以て日本に裨益したること尠なからざれば該同盟の重れて訂せらるべきは期して待つべきなり。今や英國は日本の實力を認識したるを以て同盟の繼續に同意すべきは明確なる所なるが、日本の意向も亦玆にあることは頃日、日本公使館書記日置益氏の爲せる演説に徵しても知ることを得べき也。



MAKING IT INTERESTING.
—Rehse, in the St. Paul *Pioneers Press*.

日本人の清國經營に對する猜忌

「プチー、パリシアン」

日本は曾に滿洲に於て其各軍を動かすを以て滿足せず、尙は方畧極めて整然たる計策を以て清國の各省に進入しつゝあり、就中由來其虎視眈々たる諸洲に向ては特に然るものゝ如し、且つ日本人は商業上の關係は往々にして他の附屬的關係を發生すべきを悉知するが故に彼等は汲々として清國の商業を獨占するの企畵に盡瘁せり、余は玆に未だ世人の熟知せざる所を報道し、日本人が清國に於て非常なる同化策を施しつゝある所以を說明せんと欲す。

燐寸の製造及び販賣が日本商業中主要の一たることは世人の熟知する所、嘗て英國人之と競爭を試みんと欲し、福州に大工場を設置せん爲め、一のシンヂケートを組織したり、福州の位置たる其附近に數多の河川ありて樹木兩岸に繁茂し、這般の事業には最も適當の地なり、然るに用材水運の爲め、筏を通ぜんには豫め清國官憲の許可を得ざるべからず、於是乎熾んなる競爭は日英人の間に起

れり、日本人は其獨占權を喪失せざらんことを顧慮し、有らゆる手段を盡して英國人に當り、遂に樵夫を煽動し、又同盟罷工を起さしめ、且つ清國官衙をして其許可を拒絕せしむるに至れり。茲に於て英國人は終に之を放棄するの止むを得ざるに至りたり。

此の如き事情は僅かに百中の一たるに過ぎず、其他左に掲ぐる事項は日本人の特有手段の一例を示せるものにして其政治上に影響する所甚だ廣し、千九百三年歐洲人就中英國人は福建省の大港たる廈門の前面にある一島の讓與を清國政府に要求し、同政府が之を承認するや否や忽ち日本人は島内に歐洲人の警察權を許すは此れ清國の主權を讓與し若くは之を侵害せしむる所以なるを忠告したりしが、協商爲めに遷延し勝ち決せず、終に歐洲人は失望の餘り一歩を讓り、清國警察は實際日本警察たるを發見したり、詳言すれば日本人は清國官憲をして福建省に移住せる臺灣人間より警察官を採用せしめたり。

又湖南の首府長沙に於て歐洲人は一の居留地を得たりしが日本人は此處に再び干涉し一時清國をして其警察權を保有せしめ、終に之を横取したり。

斯の如くして英佛獨白等の歐洲人は清國の各地に於ける新開市及び開港場に在ては實際日本人の爲めに保護せらるゝと同時に又其監視を受けつゝあり、是れ我佛國人のみならず、亦英國人の考慮を要する處なりといふべし。而して一旦戰爭の終局するに至り、大に日本人に恩惠を售らんと欲しつゝある英國人は從來其清國に於て失ひたる地歩の遠大なるを覺知せざるに似たり。

媾和條件と歐米の論調

其一　佛國

佛國の諸新聞は八月十二日其前日ハヴァ通信社が發表したる講和條件に付評論を始めル・ジュールナル、ル・タン、ジュールナル・デ・デバー新聞は此等の條件を苛酷と稱すると同時に其談判の基礎として受理し難き程のものにあらざるを認めたり

▲ル・ジュールナル　は曰く此等の條件は露國の主要利益又は黑龍州本部に影響を及ぼす所なし浦鹽斯德軍備撤去の問題なければ也條件中主要なるものは樺太割讓及償金支拂の二問題に過ぎず而して樺太は露國が近く一八七五年に於て之を取得し爾來之を等閑に附して今日に及びたるものなれば殆んど露國領土とは見做し離きもの也軍費問題に就ては『償金』なる語に代ふるに『拂戻し』なる語を以てせられたり本問題は蓋し多くの論議を避くさるゝ所なるべきも用語の變更が露國の面目を保つに利する所大なるべきは爭ふべからず

▲ル・タン　は條件を左の三種に分類せり

（第一）危險なる論爭を見るの虞なき條件即ち滿洲撤退、遼東租借權及旅順、ハルビン鐵道の移轉交付及韓國に對する保護權の承認

（第二）第一類に比すれば困難なる問題即ち樺太割讓及償金問題の此二問題は之を圓滑に解決せんが爲め何とか交讓の方法なかるべからす

（第三）露國海軍力の制限及中立港抑留艦艇の交附、此兩件は歐洲最大國の一たる露國の面目を損するの嫌あると同時に東洋に於ける將來の平和を維持するに不必要なり故に日本が此等の條件に代ふるに金錢上の或方法を以てすることを承諾せんことを希望す尙同紙は漁業權問題には論及し居らされどもラ・パトリーの如き國民派に屬する諸新聞は之れを露國に

取りて屈辱的條件なりとせり

▲ジユールナル・デ・デバー　若し露國にして浦鹽斯德までの鐵道を其各線路の安全を確保するに足るべき條件にて保存せんと欲せば遲滯なく講和條約を締結するを切要とす之れが爲めには露國は樺太も犠牲となし償金も支拂ひ且つ極東に於ける海軍力の制限をも肯諾して不可なかるべし蓋し極東に於ける海軍力は露國にして侵略策を有せざる限りは其必要を見ざる所にして且つ今日は斯かる侵略策を實行するに恰當の時機に非ざるを以て也

其二　獨逸

▲ナチオナール・ツアイツング　開戰以來日既に淺からず且つ露國は陸上及海上に於て重大なる損害を受けたりと雖も同國の滿洲軍は尚ほ依然として存在するのみならず益々增援されつゝあり且つ日本軍の露領に足跡を印したるは樺太の占領を以て嚆矢とするの事實は露國が講和に對する頑陋の程度を增進し且つ自國民に向ひ一敗地に塗れたるに非れば土地を割き軍費を償ふの謂れなきを示すの根據と爲すことを得べし日本は露國が甘じて讓與せんとする所のものを以て滿足せず其異常の成効に乗じて利益を收め今後少くも多年の間露國をして復仇を謀らざらしめんと欲するもの也露國にして講和を拒絶せん乎同國内には更に困難紛擾の續出するを見ん何となれば國民に對して此上犠牲を求むること必然の結果となるべきを以て也之に反し日本は國家を愛する國民の相一致して後援するあり且つ海上に於て無限の優勢力を有するが故に假令滿洲に於て戰敗する事あるも其統一依て以て破綻を生じ浦鹽斯德及カムチヤツカに對する其計畫を中止せざるを得ざるに至るが如き虞なければ也日本の講和條件は確に輕易なりと云ふべからず且つ其内露國の自負心を害するもの一にして足らずと雖も固と此等の條件は最後通牒に非ずして是より商議を爲すの基礎たるに過ぎざれば未だ講和談判成効の望を絶つに足らざる也



THE RETORT COURTEOUS.
—May in the Detroit *Journal*.

其三　露國

講和會議に關し近來露國新聞紙の説く所を見るにノーウオエ・ウレミヤ新聞を始め其他多くは露國に屈辱を與ふる條件に同意せんより寧ろ戰爭を繼續すべしと唱導し如何なる事あるも樺太割讓及償金支拂の要求は斷

じて露國の容認し能はざる所なりと主張せり

▲ルッス新聞　ラムスドルフ伯の機關新聞たる同紙は曰く日本の講和條件は遙かに豫想を超過せり戰役の拂戾しは或る程度まで協定の餘地ありと雖も東亞に於ける露國海軍力の制限、中立港に於て抑留せらるゝ露國軍艦の交附及樺太の割讓は露國に於て到底同意するを得ざる要求なり日本にして此等の要求を撤回せざるに於ては講和會議は玆に斷絕するものと見て可なり

同紙又曰く日本が露國全權と會見の上にあらずんば講和條件を開示するを得ずと主張せし所以のもの其意何れに在りや之れ第三者の手を經て開示すると何の異なる所なきに非らずや顧るに日本が右の主張を固執せる目的は過般の外債を起さんが爲め時日を遷延せんとするに在ること疑を容れず

▲ラスウイエット新聞　は(ウストチスキー公の機關紙)日本の要求は露國に對する凌辱也露國は償金を支拂ふことを要するが如き地位に在るものにあらずウキッテたるもの即時に此等の要求を排斥し會議の續行を拒絕せざるべからざりし也

唯自由派及び急激派のみは平和を鼓吹し露國は戰敗者たるが故に到底讓步する所あるを免るべからず若し之を好まざるに於ては講和會議の開始に同意するの理由なし此際露國は單に體面の問題に拘泥せずして須らく國家の實利を考量すべしと論ぜり

其四　米國

▲ニューヨーク・トリビューン　普佛戰爭の際佛國が以て國辱なりとし三十四年の久しきを經て尙ほ復讐の念を絕たざるは五十億法の償金支拂にあらずして二州の割讓に在り從て若し日本にして巨額の償金を要求するも之れ露國に對し無禮又は屈辱を與ふるものと云ふべからず

▲サン　日本は其要求をなすに正當の理由を有し且つ之を放棄せんよりは寧ろ戰爭を繼續するを可とすべし日本は今や莫大の費用を投じて國際的義務即ち露國政府をして滿洲撤退の約を履行せしむるの義務を盡したる故に露國が事玆に至りて已むを得ず撤退するも其撤退は日本が生命財産に多大の犧牲を供したるに對して十分なる報償を成すものにあらず是れ日本の主張として正當なりと云ふべし、日本は一國の土地明渡訴訟事件に於て各條約國に代りて原告の地位に立ちたるものと見做すべきもの也されば露國が其訴訟入費を支拂ふべきは當然のことなりと云ふべきのみ

▲ニューヨーク・ヘラルド　露國は普佛戰爭に於ける佛國と同樣の條件を承諾すべき理由を有せず蓋し當時獨逸は佛國の首府を占領し居たれども日本は未だ露都に向ふ途上にも上り居らざるを以てなり然れども露國たるもの此際須らく歐洲の歷史を稽閱せざるべからず歐洲諸國中古來一國として償金を支拂ひ又は領土を割讓するが如き『屈辱』に逢はざりしものなし然れども其事實は此等諸國が今日の隆運即ち隣國の尊敬或は欽羨を享くるの位地に立つを妨げざる也佛國は嘗て償金を拂ひ且つ領土を讓りたれども爾後卅餘年にして實力及無形上の勢力を增進し露國は之と同盟せんことを求め英國も亦之と同盟するを利とするに至れり此實例は此際露國をして所謂『屈辱』に關する無用の空論を排し專心以て其利益の增進を圖るの可なるを悟らしむべき也

▲ニューヨーク・デーリー・トリビューン　日本に於て樺太を保有するは全然至當なりと云ふべし然れども同國が太平洋に於ける露國海軍力の制限を主張するは其當否稍々疑ひあり何となれば斯くの如き條件は露國をして永く怨恨の情を絕たしめざるの嫌あり且兩國海軍力の懸隔今日の如く甚しきに於ては日本は露國の競爭を恐るゝの謂なければ也

▲ボストン、ヘラルド　日本の條件は一般識者の豫想せし處のものに超過することなし償金のことは如此場合に於ける近世の慣例と全然其揆を一にするもの也露國にして軍旅の成効に依り今回の條件に優りたる條件を贏ち得るに非ざれは今日よりも甚しき條件を忍て受諾せざるを得ざるに至ることあるべし

其五　伊國

ウキッテ氏の取消説出てたるに拘はらず伊國新聞紙は日本講和條件の新聞紙上に表はれたるは露國側より漏らしたるが爲めなりと信じ居れり又主なる新聞紙は日本の條件は之を其性質より見るも又其効果より列ずるも過重なるべからずと論ぜり

▲トリビユナ　ウキッテ氏は露國は開戰を欲せざりしも日本の爲めに開戰せしめられたりと述べたりと云へり然れども之を各種の文書に徵すれば事實は其正反對なるを見るウキッテ氏が此説を唱へたるは論爭の範圍を打大せんと欲したるが爲めなりと云はざるべからず挑戰者の孰れなりしかは姑く措き日本が常に連戰連勝せしは何人も爭ふこと能はざる所なり又日本に露國を辱しめんとするの意なきは其償金の語に代ふるに軍費撈戻したる詞を用ゐなる事實に徵して明白なり樺太の讓與に至りては之を露領の裁斷と云はんよりは寧ろ日本領地の政治的改訂と云ふべきもの也、露國は財政上及び軍事上其勢力を蕩盡せりと云ふべからざるは疑なしと雖も其海軍は已に殲滅し其財政は彈性を失墜し其兵士は退くを知て進むを知らざるなりされば講和談判の破裂は確に露國の災を招くべし日本の財況は同國に久しく繼戰することを許さずとの説は眞實ならざるが如し之を軍事上より觀察するに露國は今後繼戰するも別段從前に勝りたる成蹟を擧ぐるの見込なきが如し國内の紛擾は鎭靜に歸するものと假定するも尙且然り



THE CZAR (to his subject)—"You furnished the men for my war, and now you must pay for not winning victory for me."
—Walker in the Cleveland *World*.

トルストイ伯の近狀

七月八日の「リテラリー、ダイゼスト誌」の傳ふる所によればトルストイ伯は元氣極めて旺盛にして、熱心に戰爭論、外交論等をなしたりと。殊に伯は新聞及び新聞を讀むことを非常に批難し、恰かも喫煙と等しく人間を劣等にし、下等にするもの

なりとせり、伯自身は決して新聞を讀まず、家族及び訪問者の談話によりて新らしき事實を知るのみ。彼の主要なる事業は彼の全哲理を遺漏なき程明確に發表し、之を實際問題に應用する方法を考ふるにあり、是れ極めて困難なる事業なり、之を成就せんには種々の方法を用ふべきが、其或者は美術的想像的形式を採りてあらはるべし。彼は其書の性質を明示せざれども、哲學的、社會的、美術的なる百科全書的のものを作り古今内外に通ずる最善最良の文學的標本を編纂するにあるが如し。彼の信ずる所によればかゝる著述は男女を問はずあらゆる人の指導として極めて須要のものにして、之がために無益なる時間を省き、劣等なる趣味を排し、眞に讀書より生ずる有益にして興味ある効果を收め得べしとするものゝ如し。

従軍美術家の東郷大將評

「モーニング、ポースト」

「我一生に於ける最も興味ある經驗なりし」これ有名なる美術家セッピングス、ライト氏が極東戰爭談をなすに當りて開口一番に發せる言葉なりき。

予はセッピングス、ライト氏が殆んど不可能と思はれしこと――東郷大將及び其艦隊と共に數月間戰地にあること――を成就して英國に歸りたることを聞き、如何にして彼が此不可能のことを成就せしか、將た又如何なる感慨を此珍奇なる經驗によりて得たるかを聞かんとて直ちに彼の宿を叩きたり。

センピングス、ライト氏は好意を以て予の好奇心を滿足せんことを承諾せり。彼予の問に答へて日く「軍人ならぬ外國人にして日本艦隊に從軍したるものは實に予一人の外なかりしは事實なり。予は從軍の特權を與へられたる五人の外國人中の一人なるが他の四人は皆英國の海軍武官なり、日本政府は他國の武官の艦隊に伴ふことを拒みたるも英國武官丈は其の特許を得たり、而して其武官は時々交迭せられたるを以て、從軍するの好運を得たるものは蓋し貴重なる教訓を得たるべきを信ず」

予問ふて「日本海軍に從軍せんことを目的とせる美術家及び新聞記者の數は數ふべからざる程夥しき中にありて君一人のみ如何にして其志望を遂するの好運を得られしや」といへしに「予は如何にもして從軍の目的を遂せんと心に誓ひたり、されど新聞社にては予を派遣するものなかるべしと思へり、且つ新聞社より從軍を願ひ出でたるものも少からずして種々の歎願方便を用ふるものありと雖も一も成功したるものなきを觀、予は親切の化身ともいふべきロイテル伯に歎願したるも、そは到底見込なかるべしといへぬ、予思へらく若し伯さへも力に及ばずとならば到底尋常の手段を以てなし能ふべき事にあらずと、大に熟慮を費したる末一の新らしき考案を見出したり、即ち馳せてアームストロング卿に行き、事情を開陳して卿の助力を仰ぎたきことを歎願し、終に日本海軍の多數の軍艦を造りたる大造船會社アームストロング、ホイットウオルスの代表者たる名義を以て東郷大將に從ふべく日本政府の許可を得たり。」と答へたり。

「然らば君の從軍の許可を得たるは美術家としてにはあらで、却て機術に於ける實際家としてならん」と予は問へるに、「勿論然り、予は已れの知れることについては充分其責任を盡したり、されどこは世間に向て發表すべきことにもあらず、又發表したりとて毫も興味なきことなり、」

「君はその責任を負ひたる部分に就て日本海軍が如何なる狀態にあるか

を感ぜられしなるべし。」

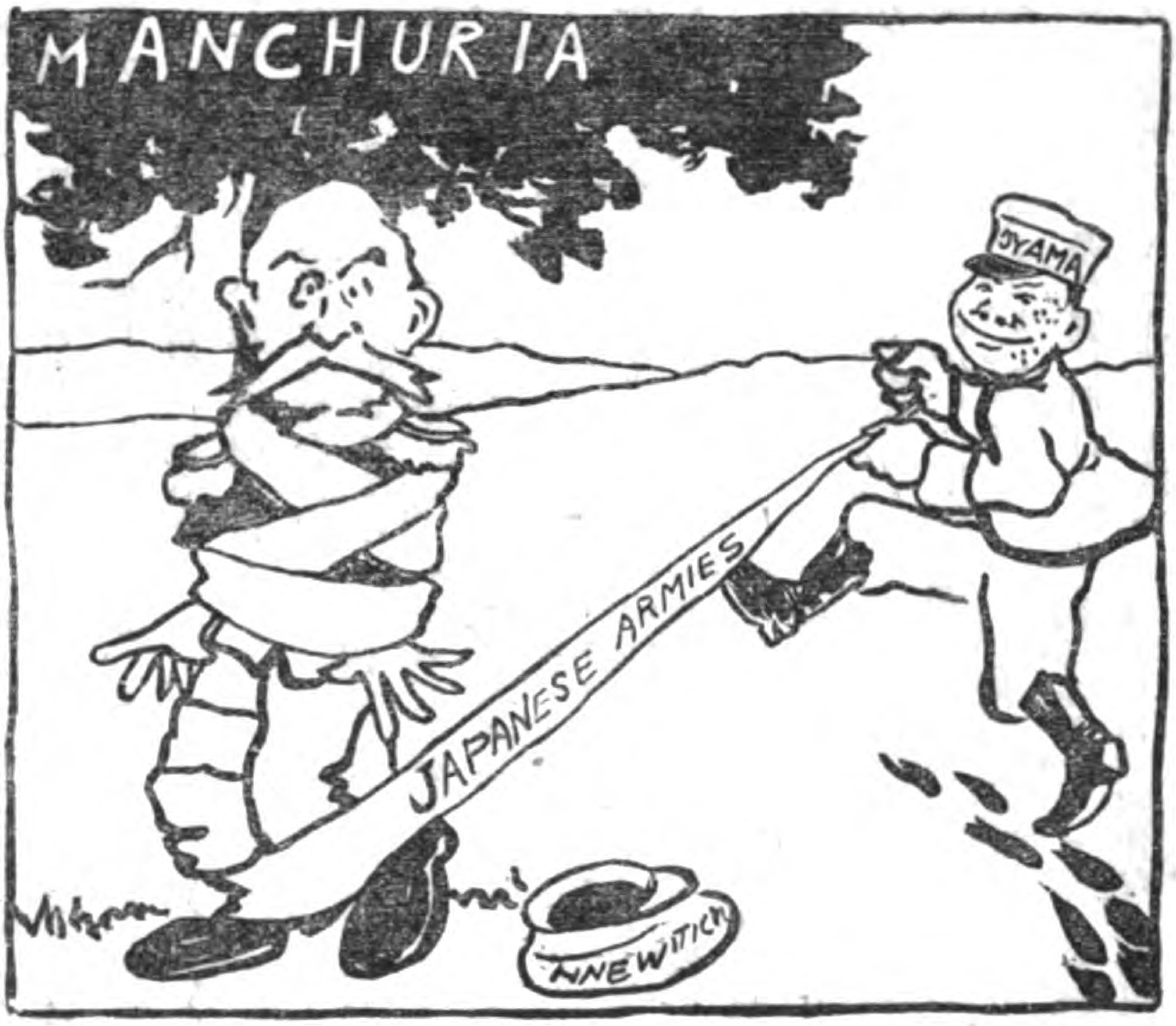
「こは人によりて各々其視る所を異にすべし、予の觀察を概括的にいへば二つの點に約することを得、第一日本人が海軍砲を製造するに於て殆んど歐洲の發明者に改良の餘地を殘さゞること、第二日本人が自ら其軍艦を造り、且つ自國に於て海軍に要する總ての軍器を製造し得るに至るは極めて近き將來にあるべきこと是れなり。」

「勿論日本人は君の何人たるかを知り、美術家にして通信員たることを悟りしならん」

「然り、予は決して自ら伴ふべき必要を感ぜざりき。然れども予は素より檢査官の手を經ずしては外界に一の通信をもなすことを許されざりき、されどこの制約は當然のことにして予に於いて些かの不平もなかりし、予は最初より最后まで終始隣遇と、限りなき寛大と、東郷大將以下其他の接觸したる總ての人より非常なる助力を得たり。」

「君は東郷大將に就て多く視ることを得たりしや」

「然り、予が最初に大將を視たるは日本政府が旅順陷落を見んとする多數の知名高貴の士及び外國通信員を載せたる滿洲丸の甲板上なり、然れども目的とする事件には時期未だ早かりしを以て一二ヶ月の後再び日本に歸りたれども、此行も亦極めて愉快にして且つ裨益したる所多かりし也。」



LINEVITCH HAS OYAMA ON THE RUN.
—Morris in the Spokane *Spokesman Review*.

「されど君が東郷艦隊に從軍することを得たるにより、有名なる大將に就て今一層詳しく觀察するの機會を得たりしなるべし、」

「然り、予は七ヶ月間艦隊と共にあり、その旗艦に於て屢々大將を見たり、日本人は其指の尖までも美術家たり、予は堪へずスケッチを取り、繪を書きつゝありしに大將は我作に向て大いなる興味を起されたり、予は大將の肖像を畫き、且つ彼の寫眞帳に多くのスケッチを書きたり。實に暫時にして予は彼の知遇を得、予は彼に逢はんことを望むときは何時にても申出づべきをいはれたり。」

「而して君の感じたる所によれば彼の人物は如何に見ゆるぞ」

「予は彼に就て知れる儘を告げん、彼の最も人を驚かす點は彼の沈着なるにあり、彼は予の嘗て見たる人物中の最も沈着なる人物なり、日本のネルソンは英國の模型の如き神經質

的活動の微をあらはさゞるなり、三笠が彼を載せて沈沒しつゝありとするも、恐らくは彼の一筋肉とも動かすを見ると能ざるべく、一瞬時と雖も彼の靜粛なる感情をも紊だすと能はざるべし、彼は徹頭徹尾靜粛なる人なり、而して小なる日本の煙管を持て身獨りにしてあるとを愛せり。

彼は最も統率の任に適したるものとして現地位に選任せられたり。」

「君は艦隊と共にありて七ヶ月間總て東郷大將と仝一の艦にありしや」

「否、予は堪へず一艦より他艦へと移され、戰鬪艦より水雷艇に至るまて殆ど總ての艦種の行動を觀察するを得たり、予は種々の驚心駭魄の出來事を目擊したるも未だ嘗て臺南丸の甲板に於ける程危險なる場合に遭遇したるとあらざりき、余は臺南丸に二ヶ月間居りしが、當時該船は青泥窪及び旅順の水雷火坑を掃除するの任務を帶びたりき、予が臺南丸を去らんとするとき船長は予に「さむらひ刀」を送り、會議に列することを得たり、予にとりてこれよりも榮譽あることとあらざるなり、予は之について大に滿足悅喜せり、其時以來刀の寄贈者と余とは恰かも兄弟の如く思はれたり、刀を余に渡さんとするとき曰く、我祖先の靈君の身を加護せんと。」

「日本人の性格について聞くことを得べきか」

「日本人は世界に於て最も驚くべき人民なり、彼等には殆んど例外なし、歐洲ノ政治家又は人民は未だ日本人の眞價について知らざるなり、日本人は實に世界將來の發展に於て最も重大なる役割を演ずべきものなり、

現今人は日本人の男氣又は大なる軍事的才能を賞す、是れ實に明白の事にして今更繰り返す要なし、日本の陸軍は世界何れのゝに比するも遙かに其上に超絕せり、海軍に關して如何なる賞讚の辭を呈するも決して過褒に陷ることなかるべし、然れども最も多く余を驚かしたるものは日本陸兵及水夫の勇敢、陸軍及び海軍の組織等にあらずして實に人民の性格——古代的素朴、騎士的禮讓、同情、親切、及び非襲擊的等の美なる性格を備ふることなり、彼等は決して征服の爲めに征服せんとの貪婪の心なし、彼等は自國の存立或は利益と相容れざるものにあらずんば決して戰ふことなく、戰ひては決して敗れたることなし。支那、朝鮮、而して今は露國を彼等は順々に之を拒み、之を斥け、今や世界の大勢力となれるが、今后の平和的發展に於て益〻見るべきものあるべしと考ふ。」(下略)

外人の見たる光琳畫

西洋畫は文藝復興期以來、漸次に裝飾と離れたり。今日にては裝飾と云へば純粹に摸樣を主として秋毫も自然的又は想像的分子を含有せざるものを意味するに至りぬ。日本にては繪畫と裝飾とは決して分離したると無し。繪畫上の想像的、自然的嗜好、いかに强大なりと雖も、恒に裝飾的動機が忘れさるは日本藝術也。而して又日本畫家は、應用藝術にても風景形像を論せず、恒に繪畫的たらむとを勉む。これ歐羅巴畫家の克くし能はざる所也。其の技術の巧妙なる、嗜好の堅實なる、均齊の原則を破ると共に、更に精緻なる均齊を意匠圖案の上に現はす。歐人にして之れを一見すれば、偶然の好結果と思惟せらるる程妙を極む。日本人の性質は、快活、優美、眞率なり。而して其の藝術上に此の性顯れたり。光琳は此の特性に加ふるに、無遠慮なる大膽、放逸なる華美、挑戰的調子を以つてせり。歐羅巴の裝飾家中、彼れに比すへきは、ドーミエルならむか。露骨なる表現をなし、其の表現したる物像は、一の大なる身振りとも見るへき程なるは、此の兩大家の一致する所なりと雖も、相似は玆に止る。光琳は花を描くに妙を得たり。是れは他の日本畫家の如く、其の生長、其自然に發達する線の姿態に趣味を發見したり。「タイムス」

雜録

消夏の一策

素人

有體に白狀すれば僕は生れてこれ迄避暑らしい避暑を遣つた覺えがない、書生時代に箱根と鹿野山に夏を送つたことはあるが、一度は自分が脚氣の爲め、一度は兄が同じ病に罹つた爲めて、轉地療養が眼目であるから、幾分避暑の目的を達したと云ひ得るかも知れぬが、飽くまで山水の間に放浪して俗腸を一洗すると云ふ樣な快味を誇り得る資格はない、唯一度獨逸に居た頃、シュワルツワルトと云ふ山に籠つて、同行十餘名至極暢氣に、至極無邪氣に暮したことがある、これが唯一の除外例で然も外國での出來事である、歸朝以來今年で足掛四年になるが、何時も夏は東京に居竦まりで、三伏の盛暑にも足都門を出でずと云ふ不健康な生活をして居る、併し決して暑氣にメゲぬと云ふ譯ではない、月十五圓と云ふと自分に取ては大枚の家賃であるが、家としては誠に狹苦しい。如何にもセ、コマしい、遠慮なく射し込む朝日と西日と、日盛りの照り返しに攻め立てられては、身を躱はす餘地がない、殊に夜の蚊と來たら猶更以て遣り切れない、アー來年からはドーカ此苦みを遁れたいものだと思はぬ年はないが、扨考へて見ると、自分が暑ければ人も暑い、一人り蚊のない涼しい土地へ行て、家族を沙埃りの中へ置き去りにするも見ジメなり、行く位なら一所に連れて行て喜ばして遣りたいと云ふ氣にもなる、ソーなると愈事が面倒だし家を疊んで出掛けるも大業なり、さればと云て適當の留守居は中々見當らず、止むを得ず今年も亦見合せと云ふ情ない結果に終る、

併し爰に何か工夫があり相なものだ、東京の地を離れずに離れたと同じ効能が得られ相なものだ、一年三百六十日吸ひ溜め飲み溜めた煤も埃もバクテリヤもバチルレンも一切吐き出し盡して、生れ代つた人間になる樣な衞生經濟兼備の名案がないものかしら、サンダウ式體力增進法も一年足らず試みたが、隨分骨の折れる仕事で、兎角怠り勝になる、用事でも立て込んで中止

するが最期、中々再興が六ヶしい、大川へ泳ぎの稽古にでも出掛け樣か、これも今年の樣な雨勝な涼しい夏では不得要領に終るらしい、謠ひの稽古も宜いが、餘所行の胴間聲を張り上げて夢中に爲てる間に、玄關からヌーッと這入て斷りなしに下駄箱等を擔ぎ出す不時の珍客もある、是れも甚物騷な道樂だ、矢張り散步位かな、一口に散步と云ふと平々凡々に聞えるが、少し風を變へて味を附けたら面白からう、聞說く某老碩儒は每朝四時頃から一時間位散步して、途中詩を一ッ宛作つて歸る、夫れが爲めに古稀の齡を遙かに超えて壯者も及ばぬ健康を保て居るとか、詩を作ると云ふのは素養のない我々風情では中々及びも附かぬが、名家の詩を讀む位の事なら譯はない、先頃墺太利の或雜誌を見たらグレゴリーと云ふ人が「西洋の詩集は年代の順序で詩人を配り同じ人の詩は其名の下に集めるから、春の詩の後へクリスマスの詩が出たり、戀歌の次に戰の詩が來たり、折角起り掛けた興が直ぐ毀れて仕舞ふ、これは矢張り作者は何人變つても、山なら山、海なら海と詩を分類して、同じ森の部でも入口から段々奧深く這入つて行く樣に選んだら、讀者は容易く詩人と同化して、親しく其境に在る想をするに違ないと云てる、歌人は居ながら名所を知ると云ふが、詩歌を味ふ人も同じ境に遊ぶことが出來る、海や山の詩を吟ずれば、ドンナ雜閙な巷に居ても、夏の暑を忘れる譯だ、それが出來なければ詩人が拙いか讀手が至らぬのだ、併しグレゴリー先生の論文に「抒情詩と云ふものはザット讀んで直ぐに妙味の分るものでない、幾度も繰り返して自然と眞情が乘り移つて來るのを待つ根氣がなければ駄目だ、世の中が繁雜になるに連れて抒情詩を愛讀する人が少くなるのも之が爲めだ」とある、シテ見ると我々が西洋の詩を味ふには、反復熟讀して一字一句諳んずる位の意氣込て懸らなければならぬ、これは一ッ拂曉の散步に西詩の玩味を調合して遣ることにしよう、これで今年の消夏策が出來上つた、

扨愈實行の段になる、早起きも辛い事は辛いが、休暇中の事だから、ドンナに早く寢ても明日の仕事に差障る氣遣はない、蚊に食はれながらボンヤリ起きて居るよりも、蚊帳の中へ這入て樂々と手足を伸した方が遙に優しだ、四時に起るとすると十時に寢れば六時間あるから澤山だが、始めての事でもあるから、寢過さない用心に一時間早く床に這入る、晩酌の勢で寢附くことは直ぐ寢附くが、頓て目が覺める、ハテナ、モー夜

明かしらと枕許の時計を見るとまだ十二時だ、大方近所で寢仕度をして雨戸を閉る音でも聞えたのであらう、間もなく復寢込む、今度は一時の時計に夢を破られる、二時が打つ、三時が打つ時計の鳴る都度目を覺ます、それも其筈で宅にはボン〱時計が二ッある、ソンナ狹い家で何故そんな贅澤な眞似をすると訝かる人もあらうが、實は一ッは細君が吳服屋の賣出しに籤引で當てたのだ、此奴新參の癖に故參の朋輩に引ケを取るものかと云ふ權幕で、ケタヽマシイ音をさせる、故參の方も負けずにワメく、それも不斷は慣れて居るから此騷ぎの中でも穩かに夢を結ばれるのだが、今朝は早く起き樣、起き樣と思ふ念が執念く祟りをして居るものらしい、其内に鷄の聲が段々聞える、雀もチヲチヲ鳴き始める、時分は好しと起き出てヽ衣物を着換へ、机の上に出して置いた詩集を手にするが早いか顏も洗はず表へ飛び出す。

二足三足步き出すと植物園の森で蜩の聲が聞える、扨は彼奴寢惚けて居るなとも思つたが、ナニ、ソーじやない、これは日暮しと云ふ名が惡いのだ、日暮ても夜明でもほの暗い時分に鳴くのが此蟬の生來なのだ、之を日暮蟬と云ふ事が出來るなら曙蟬と云ても毫も差支はない、併し「曙日暮蟬」と云ふのも可笑しいから、矢張りカナカナゼミの方が當り障りがなくて宜い、それに響きもよし詩的だ、此名に限る、朝起のお蔭で飛んだ新知識を得たと本人大に得意に爲る、

足は段々林町の方へ向て行く、一町許り先きの方は霧がボーッと懸つて居る、木も草も露でみづ〱して居る、時々新聞配達やら牛乳配達の顏が霧の中からヒョコリと現はれる、岩村邸の前まで來ると右手で山羊の聲が聞える、巢鴨の方面に當つて牛の聲が微かに聞える、見る物聞く物すべて珍しい樣な氣がして嬉しくて堪らない、次第々々に薄れ行く霧の中から段々姿を現して來る森の景色に見惚れて、手に在る詩卷を忘れて居た、フト氣が附いて開けて見ると、これもグレゴリー先生の注文通りに出來て居ない、自然で選り分けを爲なければならぬ、目錄を繰て居る内にメリケの「徒步旅」と云ふ題が目に留まる、これは妙だと讀み始める、此詩人はヘルデルリンやドロステーヒュルスホフ等と同じく、外國人には迚も十分に味へまいとライプチヒの某敎授が云つた樣に記憶して居る、成る程此詩も何だかボンヤリした所がある、森の茂味で小鳥が歌つたり旭の初日影で黃金色の葡萄の房が快美の露を嗅ぎ出す其

通り我が懷かしいアダムも春秋の氣を感ずるとあつて樂園の快美の初物と云ふ樣な句が書いてあるアダムの昔に溯つて其心持を陳べて居るのかと思へばまだアダムが今の世に生き殘て居る樣な文句も見える、詩人がアダムか、アダムが詩人か一寸判然し兼るけれども、朝の景ど情を歌つた所が何かなしに無性に氣に入つた、先づ手初めに此詩を暗誦することゝ極める、

何處からか頰白の囀る聲が聞える、嗚呼好い音だと顏を擧げて見ると、何時の間にか宍戸邸の側へ來て居る、此邸へは一昔も前に紅葉見物に來て、東京にもコンナ所があるかと思つた、今はドンナ工合かしらと近寄て見ると、「當邸に用事なきもの出入相斷候事」と書いてある、門は朽ち果てゝ扉が半分斜に開いてる、這入つても苦しくないと云ひた相な鹽梅式だ、通り拔無用と斷つてある所なら必ず通り拔の出來るもの位は、東京へ出てから二十五年來の經驗でチャンと心得て居る、併し何だか薄氣味が惡い、片足踏み込んで見てまた止め樣かとも思つたが、儘よ見咎められたら夫れ迄だと、度胸を据えて終に邸内の人と爲つた、成るべく下駄の響を立てない樣に紅葉のトンネルを通て行く、五六歩先てヒョコリと跳び上る物がある、ギョットして眼を据えて見ると、能くもこんなに肥え太つたと思ふ樣な蝦蟇がシャに構へて居る、此番兵の權幕に恐れて右の方へ途を避けて通り過る、洞中之天と石に切り附けた額の下を潜つて、ダラ〳〵下りの坂を折れ曲つて、石楠花やら秋の七草やら左右に生ひ茂つた中を行き盡すと、今度は檜林がある、譲葉の並木もある、坂を降り切つた所にまた門がある、多分之が表門だらう、潜戸が開てる、それを潜つて外へ出た、振り返つて見ると此所にも張札がある、「車馬之通行無用」とあつた樣だシテ見ると此門からなら人間の通行は差支ないらしい、そんならモ一度逆戻りだと再び邸内の人となる、以前の坂を上つて行くと、洞門の左手に見事な松の大木が聳えて居る、其松の葉越しに丁度朝日が上り掛けた、其景色と云たら何ともかとも形容の辭に窮する、アット云つて其儘立往生の姿となつた、暫らく過て漸く正氣に立ち返つた、洞中之天に差し掛つて向を見渡すと腰掛が二臺並んでる、雨曝に成つて大分汚れては居るが、倔強の休息所とドッカと尻を落ち着ける、そこで詩集を取り出して暗誦に懸る、チクリと足の方が痛む、ハット思て見ると、割合から云たら最前の蝦蟇殿に優るとも劣るまじき大きな藪蚊が四五匹足にたか

つてる、覗ひすまして其中の一匹を首尾よく退治は退治たが、此守備隊の襲撃に驚いてツコ〳〵に邸内を出て歸途に就いた、

家に歸てから水浴を濟して朝飯の膳に對ふ、其甘さと云たら近頃にない味だ、それから誰でも對手構はず早朝散歩の能書を陳べ立てる、スルト妻も行く子も行く妹も行くと云ひ出して段々同勢が殖える、詩の暗誦には少々都合が惡いがナニ家族同伴で避暑に出掛ける目的は十分に遂げられる、風が吹いても出る、雨が降ても出る體は益健かになる、食は益進む、此位即効のある妙法は恐らく他にあるまい、から信じ切て居たから、或る發句の席で「涼」と云ふ題に朝涼みの句を出した、所が大層捻つたとか、氣取つたとか評が出て、中に鍋燒饂飩てゝもあるだらうと云ふ聲も聞えた、自分は發句の質が惡い上に不熱心だから更に進境が見えない、俳號の素人は看板に毛頭僞りのない所だ、だから年に一度位俳句の席に列なつても、片隅の方に小さくなつて先輩諸士の高談淸話を拜聽して居る許りだ、此時も朝涼みに鍋燒饂飩と云ふのは何か謂はれのある事かしらと考へた、併し敢て質問する勇氣もない、夫から朝涼に出る度に注意して見た、巣鴨の田舍道では迚も此研究は覺束ないと思たから、日本橋へ出張して魚河岸の朝景色も見た、雜司ヶ谷の鬼子母神へも朝詣りをした、早稻田方面へも出掛けた、其道々能々氣を附けて見たが、納豆賣にこそ出遇へ、鍋燒饂飩屋には運り會はない、扨てはあの先輩先生納豆賣と鍋燒屋と混同したのではあるまいか、或は先生存外の朝寢坊で納豆賣の聲さへ聞いた事がないかも知れない、先輩と云ても一々其言葉を信じられるものでないと悟つた、これも朝起の一得でがなあらう、

僕が今年の消夏法は大略右の通りだ、之を讀んで虚だと思ふなら遣つて見給へ屹度効能がある、これは僕が堅く保證する、(明治三十八年八月二十一日)

世界眼に映じたる 松尾芭蕉

野口米次郎

綠陰滴る處は涼風掬す可し(先たのむ椎の木もあり夏木立は名句である)京坂の周遊二週日を終へて歸京してからは家の園庭の樹間にハンモックを吊つて暑き午後の二時三時といふのを蕉翁の句集を讀みつゝあるの

である、芭蕉翁！大なりといふ、然り大なる芭蕉！余の郷里から一里斗りなる佐屋に水鷄なくと人の云へばや佐谷(屋)泊りといふ石碑が立つて居るので幼少より其人の大なるを慕ふては居たが、實際の意味に於て芭蕉の句集を讀むだのは今日が初めてゞあるといふのである、然り余は其句集を讀むだ、再讀したのであつた、余は彼が文學者（彼は日本の大詩人と許されて居るのである）として後世に殘した作品の餘りに少量なるに驚かざるを得なかつたのである、思ふに其れは彼が文學的生活否な詩人的生活に重きを置いて、文字其物は唯だ申譯け位の積で居たからであろふが、今其句集を讀むと中々修辭上の苦心や十七字といふ小區域内に於て文字上の完全を試めた跡が歷々として見へるのである、余は若し彼にして大文學者であつたならば何故に斯る小區域内に滿足することが出來たであろふと疑ふのである、余は彼は大文學者たる可き資格を充分に供へて居ながら世界的の意味に於て大文學者（所謂グレートト、ヲーサー）に成り得なかつたものと云はねばならぬ、彼は大文學者たるには餘りに我が儘で社會と離れて、好むで孤獨と寂寞とを愛慕したのであつた、彼は文學者的のエナジーと主張とを缺いて居たのであつた、彼は四疊半の茶席で茶を煮る茶の宗匠の如くて、十七字といふ茶席で自分が詩人的趣味を獨りで滿足せしめむとしたのであつた、彼は（若し余をしていふを許さば）小なる大詩人とでもいふのであろふと思ふ、

彼は余をして近世佛國の詩人マラミー（Stéphane Mallarmé）を想起させるのである、マラミーも芭蕉の如く極めて少量なる作品を殘したのであつたが、彼が詩人（小なる大詩人）と許されて居るのは芭蕉の如く其人格の高く美なる點である、

往年余が英京倫敦にあつた時一夕シモンス氏（英文界に於ける歐文學の輸入者の大なるもの）をマイダ、ベールの寓に訪ふたことがあつた、氏は半ば狂人で半ば詩神なる高尙なる放浪者なるバーレーンの親友であり、親しくマラミーを識る所の人、談話が佛國詩文の潮流に及むでマラミーの問題と成つた、氏はいふ、

「沈默にして雄辯なる彼、無爲にして人を同化せしむる詩的勢力ある彼、人來らば直に子弟たるを欲せしむる大なる品格を供へたる彼、マラミー今や無し、だが彼が佛國の詩界に投げた溫厚で優美なる影は永遠に滅せないであろふ、彼は餘り詩を愛し詩的生活を欲したので文筆を握るに遲々であつた、女を深く大に愛するも

のは口に愛戀談をせない樣なものである、彼は青年を愛し常に自分の周圍に集るを欲した、其は自分が詩的秘密を握つて居るのを敎へむが爲めてあつたが其秘密なるものを無言の中に敎へむとしたのてあつた、彼は百千の子弟を有して居た、然し自分は彼等に對する先生てあるといふ事を自覺して居らなむだのてある、人一度彼の家――詩の風と美術の呼吸を以て滿てる彼が巴里の家に入ると、平靜なる平和と優高なる美術の何物たるを覺ゆるのてある、如何に人爭ふて彼を火曜日に見むとしたる！每週火曜日は彼が人を見るの日てあつた、又彼を見るを許されて居たものは少數てあつた、其少數の人は品格を先にして詩章を後にする詩人てなくてはならなかつたのである、家には和蘭製の飾裝品なり、コネーやウヰラーの繪畫なり、酒飮む可し烟草喫す可してあつた、高尙なる自由の風室内に滿ちて居るのである、彼マラミーは人が來ると十年一日の如く愛して座するといふ大なる安樂椅子から立つて握手するのである、彼は人の談話を聞くを快とする（能く聞く所の人は能く語る所の人であるのである）のである、離れても彼に接すると如何に自分の小なるを悟るのである、彼は不思議に大なる無言の勢力を有して居るのてある、彼の家て談する所の詩は生命ある詩の論てあつた、一冊の本として出版せられ可き詩の議論て無かつた、美術を見る宗敎を見るが如してあつた、血あり呼吸して居る生きて居る文學の談話てあつた、彼は時に微笑して時に烟草を紙に卷き乍ら「嗚呼詩的生活なる哉」と獨語するのてあつた、嗚呼忘る可からざる火曜日！今は無し！』

余はマラミーを思ふと芭蕉翁を想起するのてある、蕉翁にして巴里に産れしめたならマラミーてあるてあろふ、マラミーも日本にあらしめたら十七字詩に隱れる君子の詩人てあるてあろふと思ふのてある、

光琳の模樣畫（デザイン）を見ると日本の園庭と同趣味同美術を其中に認めるのてある、（日本の藝術は有らゆる方面に於て同一の軌道、即ち模樣式て進步發達して來たのてある）今芭蕉の句集を見ると光琳の模樣畫を其句中に見るの感があるのてある、即ち園庭に於ける趣味と美術とを認めるのてある、彼は自然（ネーチュア）を愛し又敬した、其自然を光琳が模樣畫に於けるが如くに發句の上に於て模樣化したのてあつた、西洋の詩人は西洋の畫家の如く自然其物の描寫に試めるけれど、彼は生きた自然を捕へて來て一幅の模樣を發句の上に作つたのてあつた、

彼は十七字といふ小範圍を自覺して單純で大なる材料を最も適當に用ゐたのであつた、彼は日本在來の畫家が最も自然に近き小數の繪の具や其他少數の材料の精擇に力むる如く、十七字の上に於ける修辭に盡力したのであつた、彼は大なる自然より出てゝ理想中に自分の小自然を造つたのであつた、彼の發句即ち彼の詩は自然より來れる自家獨得の園庭を十七字の上に造つたのであつた、奈良七重七堂伽藍八重櫻、花の山二町上れば大悲閣、五月雨の降り殘してや光堂、金屏の松のふるびや冬籠等の句が如何に光淋の模樣畫に類似して居るぞや、模樣畫は獨立のものではあるけれど大なる意味に於ける繪畫で無いが如く、芭蕉の詩(發句)も世界の眼より見ると大なる詩でないと云はねばならぬ、勿論詩の要素たる可きものではあるけれど蕉翁の十七字其物は大なる價値ありとは思はぬのである、

雲雀が詩人の好問題たるは古今東西(米國を除いて)を問はぬのである、芭蕉も數多の句を雲雀に有するが彼は、

Hail to thee, blithe spirit!
Bird thou never wert,
That from heaven or near it
Pourest thy full heart
In profuse strains of unpremeditated art.

と歌へるシエレーの如く雲雀を between heaven and earth, abstraction, dreamland, symbolism に浮動して居る幻像とせずワトソンの如く、

Sing, as thou drinkest of heaven thy fill,
All hope, all wonder, all desire—
Creation's ancient canticle
To which the worlds conspire!

とて雲雀に依りて宇宙のミステリーに結合させぬのである、彼は雲雀に於けるのみならず他の鳥又如何なる問題に於ても見へざる或る物を想像し依つて以て不思議を了解せぬのである、彼は天は語らずといふ孔子の如してあつた、彼は自然其儘を見て以て滿足したのであつた、故に其詩なるものは頗る小規模たるを免かれぬのである、然れども中には大なるものありて或る西洋人が廣重の畫を評して『小なる大幅面』といへる如く、小なる大詩あるを發見するのである、雲霧の暫し百景を盡しけり、五月雨をあつめて早し最上川、荒海や佐渡に横たふ天の川等の句に至りては十百の行を連ねるも此上には出づるヿ能はぬのである、否な僅々十

七字の間に大なる寫實的意味を含蓄させたのである、

芭蕉是に至りて大なりといふ可きである、

然し彼が世界の詩界に於ける價値を定めむには之を外國語(余は茲では英語を意味するのである)又飜譯して外國の讀者をして大なる詩たるや否を認めるやを問はねばならぬ、今彼の句集を讀むと十中の七八まで飜譯するの價無きを發見せりと云はねばならぬ(余は甚だ殘念に思ふのである)アストン氏が日本文學史の中で發句(芭蕉の發句でさへ)に重きを置かなかつたのは自然の理であると云はねばならぬ、今嘗て芭蕉の句四五譯して英文界に問ふたことが餘りに反響を動かさなかつたのであつた、所が日露戰爭以來余の譯した發句も復活して英京チー、ピー、ウヰクリー其他の紙上に轉載せられたることがあつた、今甚だ滑稽と思ふのは彼の句にさびしさや花のあたりのあすなろうといふ句あるを聞いて其前書も見ずに、明日は花が散つて櫻の邊りも寂寞なるであろふといふ句意なりと思つて余は

Ah, lonely, lonely,
Shall this Flower's Neighbors be
When Tomorrow Comes!

と譯した近頃其解釋を其筋のものに聞いてヲヤとは思つたが余の了解した方で寧ろ詩としては增つて居りはせぬかとも思ふのである花の雲鐘は上野か淺草か、四方より花吹入れて鳰の海、馬に寐て殘夢月遠し茶の煙、等十句斗りを除いては譯して以て詩と認められるものが少いのである、彼のある發句に至ると譯して見ると唯一のフレースに止まるのもあるし、又一の形容詞たるに止まるのもあるのである、必竟芭蕉の人格があつて初めて芭蕉の句が光を發するので、彼の句自身に至りては詩としての大なる價値を世界の詩界に認めさせぬのであると斷言するに躊躇しないのである、

土俗雜話(三)

理學博士　坪井正五郎

○アイヌは赤兒を切れに包むが歩るける樣な子供は間々裸體で置く。十歳前後にも成れば一般に着物を着せる事に成つて居、大人に至つては男女共肌を露出するのを甚しい不作法として有る。此點に於ては中々內地人の比で有りません。小兒に乳汁を與へる時でも母が不必要に胸を廣く開ける事は無く、勞働する男子と雖

も常に脚半を以て脛を覆つて居ります。水に入る要の有る時女子は着物を着た儘でジャブジャブ遣つて出てから濡れた物を火で乾かすと云ふ事さへ有るのです。

○一體肌を隱すと云ふのは行儀の好い事には相違有りませんが、ヨーロッパ人は肌を出すのを忌む、ヲーストラリヤ土人は丸裸を常とすると云ふ樣な極端の例から割り出して肌を露出する度と開化の度とは反比例をなす抔と考へては大間違ひで有ります。アイヌは內地人よりも肌を出しませんが其割り合ひでアイヌの方が內地人よりも開けて居るとは誰も思はないで有りませう。アフリカの未開人中にも嚴密に肌を覆ふ者が有ります。之に反しヨーロッパでは婦人が禮裝をするに際し胸と背の部分を出すし、又古い事を云へばエジプトでは半身裸體、ギリシャでは運動に際して全身裸體さへ行はれた。斯かる次第で開化と衣服と常に相伴ふと定つて居る譯でも有りませんから、アイヌの肌を隱すに付いて注意深いのは格別珍しい除外例と云ふ程の事では無いのです。

○アイヌの衣服は半天の丈を長くした樣なもので、特別の袴と云ふものは付けて有りません。これで前を合はせ樣とするのですから、左右の重なり方が淺く、且つは裾が脛の半ばにしか屆かないのでどうしても脛が出る樣に成る。之を避ける爲め、既に申しました通り男女に限らず皆脚半を用ゐます。衣服の袖は何れも斜めに裁いて有つて、所謂鰯コイの半天の袖と同じ形であります。男女共クッと呼ぶ細い帶を締める。

○內地人でも船頭とか漁夫とかの中には直接或は間接にアイヌの衣服を得てアイヌがする通りに着又は外套として和服の上に重ねて居る者が有りますから北海道へ行かずとも此服は屢ば見掛けられます。此服の事を內地人は通常アツシと稱へ時とすると厚司抔と云ふ文字を當てますが實を云ふと布地がアッツシで衣服はアミップと云ふべきもので有ります。

○衣服の原料はニレノキの皮を割いて簡單な機で織り上げた布で、アイヌ語で之をアッツシと云ひます。衣服の事を誤つて斯く呼ぶのは原料と製品とを混じたに依るのです。アイヌ語ではニレノキの皮を指してアットと云ひ織の事をッシと云ひますので、アッツシとは詰まりニレ織りと云ふ事に當たるので有ります。

○ニレの皮は元來麻の樣な色をして居るので有りますが時とすると植物の根から取つた汁で褐色に染める事も有ります。又往々內地人から得た紺の木綿絲を交ぜ

て堅の縞柄を織り出す事も有ります。是等の他布を染めるとか模様を織り出すとか云ふ事は一切有りません。

○衣服を縫ふ針は内地人から得たものを用ゐるので絲も矢張り内地人から得た木綿絲で有ります。時とすると全く装飾の無いのも有りますが、通則としては男女共衣服に縫ひ模様を施すのです。其爲めには紺木綿を幅狭く切つて袖口や背中や裾に幾段にも當て其上を紺茶或は白の木綿絲でうねつた形に縫ふのです。模様の爲めに添へる布には往々白を用ゐる事も有ります。又婦人の美服の中には内地人から得た様々の切れを用ゐ、装飾として白紺及び紅色の細布を添へる事も有ります。

○機を織り裁ち縫ひをするのは女の仕事ですが、縫ひ模様も無論同様で、一々多少の別有る是等装飾の案を立てるが如きは互に他に向つて誇る傾きが有るのです。複雑なものに至つては一枚の衣服の縫ひの仕上げに數年掛つたと云ふ事さへ有るのです。寧ろ數年經つ迄出來上がりと見做さなかつたと云ふ方が正當で有りませう。

○寒暑に依つて布の質に相違は有りません。寒ければ毛皮の袖無しの如きものを普通の衣服の上或は下に重ねるのです。婦人中には筒袖で裾の長い木綿服を下着にする者が有ります。此服をモールともフクロとも申します。

○古風で云ふと衣服は左前に合はせたのですが現今では區々で先づ右前の方が多數を占めて居ります。琉球でも下級の生活をして居る者は襟の合はせ方に定まりが有りません。内地でも昔左袵の風の有つた事は歴史に依つて人の知つて居る所で有りますが之を禁ずる令は琉球の方へは勿論北方へも久しく及ばなかつたので有りませう。アイヌの間に今尚ほ左前の風の失せずに居るのは一方から見ると唯彼等の習慣を示す丈で有りますが他方から見ると我が邦の古代の有様を想像する據とも成るので有ります。

○女子の中にはアッシ製で縫ひの施して有る前垂れを掛ける者が有ります。其稱へをマンダリと云ふ所から思ふと内地人から傳へた風と考へられます。

○夫を亡つた婦人は三年の喪中黑色の頭巾を被る風が有ります。寒い時にも手袋を用ゐると云ふ事は無く、通則としては平常足に履物を穿く事は有りません。雪の中を歩く時にはケリと云つて鮭の皮で作つた靴を用

ゐますが其時の足袋は木の皮を剝いて編んだものてす。又カンジキを着ける事も有ります。

○禮裝の時に男子はアッシ服の上に內地人から得た陣羽織を着用します。此場には前々回に述べましたサバウンベを戴き右の肩から太刀下げを掛けて左の腰の邊に太刀を横たへるので有ります、太刀は云ふ迄も無く內地製ですが多くはアイヌ風の飾りが添へて有ります。

○携帶品は男子に在つては煙草入れと小刀、女子に在つては小刀のみ。煙草入れをタンバコヲップと云ひ小刀をマキリと云ふ。小刀の中身は內地人の製作、其柄と鞘及び煙草入れは總て木細工てアイヌの手に成つたもの。煙管には內地人から得た普通のものとアイヌ固有の木製のものとの二類が有つて、他所へ持ち歩くのは主として內地のものて之を一種の箆様の木片に添へて帶に差す。此木片は丁度內地の煙管筒の用を爲すもので煙草入れも之に結び着けて置くのてす。

○男女の身の周りの品は先づ此位な所て有ります。次に他の事項に移つて御話し致しませう。

棚橋絢子女史を訪ふ

（女子と精神教育）

茅原ふじ子

先達愛國婦人會から戰時の女子教育に就て、何か話をしてくれと云はれましたが、私は戰時だからと云ふて女子教育の方針が變るものではなかろうと存じます、平時だ、戰時だと申して其方針の變る筈のものではなかろうと存じて居ります、只之から將來の女子を教育するには、如何にして能きやは一つの問題てあろうと存じます、二十才未滿の女子に戰時てあるから斯うせいと申したとて望む方が無理てはなかろうかと思ふのてす、平時に是等の用意しておく必要があろうと存じます、今の女子は多く理論の方に傾いてゐて、實際に疎い様てす、教育は决して理屈の女子を造るのが主意てはなかろうと存じます、家庭と相待つて圓滿な人を造るのてあろうと思ひます、左様すれば學校にのみ一任して置くことの出來ないものてあります、世の父兄たるものは、玆に注意して貰ひたいのてす、試に女子に夏季休業中は如何に消光するかを尋れますと、皆歸省して父母の手助をすると申します、夫れは誠に好い心掛けてはあるが、口先ばかりので實踐は致して居ないのてす、久振りの歸省てすから先づ骨休めと云ふ風て暮す、其父兄も夫れを見逃してゐて世話を燒かぬと云ふ風てあります、其處が兒女を教育する所の父母の注意をせねばならぬ處てあります、諺にも可愛い兒に旅をさせろと云ふて居ります、五六十日を爲すこともなく消費して仕舞ふと云ふのは、實に無駄な話なのてあります、女子は他日家庭の一員として、主婦者となつて家政を經營して行くものてありますから、斯ういふ時を利用して教育して貰ひ度と存じます、私の知人に一人娘がありましたが、可愛い〱て嫉のものを縱に

もさせない樣にして居りましたものですから、十八九才になりましても解きもの一つ出來ないのです、之れでは將來何うするであらうと思つて、宅に引取つて世話をしたこともありました、些細な樣なことでありますが、之れが即ち用意周到の習性を造る基礎となるのです、家庭では前申した樣な仕末でありますし、學校では何であるかと申しますと、矢張此邊に注意を拂つてない樣です、物を致しますに、秩序が立つて居なければ、夫れは亂れる基なのです、教授者はこの順序と云ふことに注意をして、生徒を教導して貰ひたいものです、この秩序と云ふことは大層時間の經濟になるものです、時間の經濟と云ふことは、或意味から申すと、多くの仕事が出來ると云ふことになります、然して秩序が立つて居りますと、必ず整頓すると云ふことになります、

先達或る人に申したことがありました、一つの物を座敷の中央に擴げておいて、歩く時には夫を片寄せ、又元に直すと云ふ樣では、假りに起たり、居たり一日中する時には、其物を片寄せたり、引寄せたりして幾度しても之で好いと云ふ時がありませんから、先づ物は一定の場所に整頓しておく必要があると申しました、左樣すれば其勞と時間とを省くことが出來るのです、物を亂雜に仕付ましたら限りのないものです、故に私は此の秩序と云ふことは八ヶ間敷申して居ります、初は面倒かも知れませんが、何も習慣ですから、其習性を養いさへすれば必ず出來るのであります、然し如何云ふものですか、何事も能く理解して居られる立派な方で移序の立つて居ない方がありますが、如何う云ふものであらうと私は不思議に堪えられんことがあります、父兄に斯う云ふ父兄があり、萬一教員に斯う云ふ方があるとすれば、其の習性を造ることは望まれないのです、人を導くには決して口先ばかりで出來るものではありません、實踐躬行と云ふのは斯う云ふことであらうと存じます、此の習性のあると、無いとか人の精神の那邊まで影響するかと云ふに大したものであろうと存じます、

女子教育に就て大分非難を受けて居る樣でありますが、夫れは種々の方面からでせうが、一つは女子が徒らに理論にのみ走せて、實際に役に立たないと云ふことゝ一つは精神的教育の欠けて居る點であらうと存じます、過日女學校の第一學年生に人は萬物の靈長たる所以を問ひますと、人間は二手と二足をもつて居て、歩行く時に眞直に立つものであります、他の動物は、身躰に毛を生じ、四肢を有し、歩行する時には、此の四肢を動かすと答へました、如何して斯う判らないであろう、靈妙なる精神と知識とを有することを悟ることが出來ないのです、之れは只一例でありますが斯な有樣です、慥かに科學の方に一進歩は致して居りますが、人間の人間である德育に於ては未だ幼稚なものであります、一般の人の爲る所を見ますと、人前の好いことばかりをして決してこれは他人に如何な影響があるかを考へるものはありません、凡て事を爲すに永遠の考へがない樣では困ります、ですから「河深かければ水の流るゝこと靜かなり」と云ふ風の奥床しい點が如何にも欠けて居ります、精神の修養、即ち精神教育をするには、確固たる信仰をもたせると云ふことが大の必要であらうと存じます、古人の書を讀むも好かろうし、宗教に依るも好かろうと存じます、宗教は儒教にしろ、佛教にしろ、何れでも好かろうと存じます、彼是申す方もありますが、其善惡は、孔子以上の人、釋伽以上の人が出なければ判斷することは出來ないのであります、西教も決して惡いことはありませんが、此儘では日本の國體に協はない點があります、今一層日本化したら好かろうと存じます、女子教育の欠點は、精神教育が欠けて居ると申しましたが、其教職に在るもので固き信念を持つて已れの信ずる處を施すと云ふ人があるであろうか、否無いと申しても

好いのです。
近刊の新佛教に諸名士の未來説がありましたが、名士の方達て甘く逃げてゐる方がありましたが、實に不深切であろうと存じました、己れの信ずる所を説くのですもの、其取捨は讀者にあるのですもの、充分に答へて頂きたいものであると存じました、私は私の信ずる處を以て人を導いて居ります、一切空であることを信じますが、女子ですからさう强くも申されませんから。未來は過去のある限りはあると申しました、然し人間生れる時に何てあるかを知らないのですもの、死を知る譯はありません、されば、孔子も未知生、焉知死と申されました、之を以て若きものを教ゆると間違いが生じますから方便を以て導きます、だん／＼女子の知識が進むと共に、德育を進め、圓滿なる女子を造りたいと存じて居ります。

明治闇黑史（九）

有磯逸郎

○自由黨組織後の一年間

『いよ／＼政黨時代の本舞臺に入つて來た、我輩等は、淺草の井生村樓で、自由黨組織の大會を開いたのは、明治十四年の十月――左樣ぢや、國會開設の大詔か出た、その翌月であつたのぢや。間もなく、嚶鳴社の沼間守一や、議政會の矢野文雄等か、大隈重信を總理に擔いで、改進黨を組織した。慥か之は十五年の春であつたやうに覺えとるが、それと知つた當時の政府は、井上山田の二人が眞先に驅いて、日報社の福地に内命を傳へ、丸山作樂、古莊嘉門、羽田恭輔といつたやうな、明治の初年に謀叛を企てた有造無造を搔い集めて、一夜の中に、帝政黨といふ瓢簞鯰のやうな政黨を製へた。此時今の大勳位伊藤殿は如何してゐたと聞くのかい、左樣さ、我輩は官權黨の内幕など詳しくは知らぬが、なんでも官權黨の製造には、正直な山田迄相棒に語らつて、井上は一番熱心であつたやうに聞いて居る。初めて帝政黨組織の下に相談を遣つたのは、山田の屋敷であつたさうぢやが、主義綱領に多く嘴を入れたのは、井上であつたさうぢや。然かも自由黨が起つて僅に一年、十五年の十二月に至りて、早くも東北の野に怪煙漲り、河野等の國事犯事件が持ち上つたのであるから、考へて見ると我國の政黨史も、多事多忙どいふべきであつたわい』

『今の青年輩は、當時の模樣は知るまいと思ふから、河野等の陰謀事件に入る前に、ちよツぴり自由黨組織當時の狀況を話さう、ナニ、早く陰謀談に入つたら良からう。まア氣を焦らずに、辛抱して聞き玉へ……自由黨の大會を開いた場所は、前に言つたやうに、淺草の井生村樓。當時委員の意氣込は、一寸可笑しかつたのぢや、二十三年に開かるゝといふ國會を目前にしたやう、我輩等を初め、何れも國會に列席する代議員てあるかのやうな氣位て、ずんと反身になつて、大會に列席したのよ。や、どうも凄らしい景氣てあつた、てあるから、會議に列した委員は、皆んな有志の中ても、幅の利いた連中てあつたのよ。フ、フン、今から思ふと、體裁の良い夢を見てゐたのぢや』

『議員の席次は、一番より九十八番迄なり、議長は後藤象次郎、副議長は馬場辰猪てあつたが、此日後藤は缺席したのて、馬場は議長の席に着いて、議事を開いた。議員の顏觸はと見ると、各縣の重なる有志は、大低出てをる、後に改進黨に移り、今は鑛毒問題に騷いて居る田中正造は、當時も矢張黑木綿の羽織て、無細工に二番の席に就いて居るとその頃二三百の子分を輩下にして、聲名高かつた名古屋の庄林一正は、十番の席に控へてゐた、十二番の席に、中島信行が居ると、十六番に宮部襄が見えてゐた、三十三番は馬場辰猪、三十四番は越後の山際七司、四十一番に福島事件の田野秀顯、二番離れて四十四番に、大阪事件の磯山淸兵衞。五十五番の席に今は進步黨の領袖ぢやが、當時は板垣の股肱を以て知られた大石正巳が、例の不得要領な顏を出して居ると、五十八番の席には、當時河野廣中と並び稱せられた内藤魯一は、悠然と控へてゐた』

『思ひ出すと、種々な人物が出て居たのが、今にあり〱と眼に遺つて居る、當時朝野新聞て、少年の身て、健筆を以て知られた淺野乾も出て居れば、雪中梅の著者末廣鐵膓も出て居た。後に壇の浦の名を博した今の高知縣知事宗像政も居れば、ジヨンライトを以て稱せられた西村玄道も居た、加波山事件の首謀富松正安も出て居れば、飯田事件の村松愛藏も出てゐた、河

野廣中も、六十五番の席に落ちつき拂つて居た、美少年の松澤求策も出て居れば、千葉縣の彼の櫻井靜も、九十一番の席に就いて居る。常に社會黨の組織を心掛け、遂に贋札事件で身を過つた兒島稔も見ゆれば、大阪事件の參謀小林樟雄も出て居た。その他土佐からは竹内綱、山田平左衞門、植木枝盛、林包明等。關東からは、齊藤壬生雄、鹽田奧造、堀越寛助、長坂八郎、關信之助、中村克昌、森隆介。九州からは、柏田正文、宗像政の外に、近事評論の主筆であつた肥後の林正明が出て居れば、東北からは、仙臺の村松亀一郎、岩手の鈴木舍定等が出て居る。北陸より杉田定一、稻垣示、八木原繁祉等が出て居ると、中國よりは、岡山の加藤平四郎、出雲の園山勇が出てゐた、此の兩人は、揃ひに揃ふて、後には知事に爲つたのも妙ぢや。中國といへば、中外通信の倉長恕も、此席に出て居たから、面白い、彼の男は、何時も若い顏してゐるが、あれで隨分古いのぢや』

『九十八名の地方議員は、づらりと席に駢んだのは、美觀て、特に我國開闢以來、初めて起つた政黨組織の大會議であつたから、列席してゐながら、我輩等は、何んだか斯う一種の感慨が、胸に充ちた。會議は、十八日より三十日迄、十日以上續いたが、漸やくにして、左の如き盟約は出來上つた。

一　我黨は自由を擴充し、權理を保全し、幸福を增進し、社會の改良を圖るべし、

一　我黨は善美なる立憲政體を確立することを希望するものとす

『之は盟約で、自由黨の理想を表白したものぢや、自由！、權理！、幸福！、社會の改良！、當時血性男兒の集つた自由黨の面目が、躍然として居るではないか。ナニ、漠然とし居る？當時は、斯う漠然と、權利とか幸福とかいつて居ると、それで良かつたのよ、方針とか、政策とか、其樣な細かい、面倒臭い事は、頭で有志の頭腦には無かつた。自由黨は、政策を行ふ政黨でなく、列席者の精神を叩くと、純然たる革命結社であつたのぢや』

『何んだか談話は理屈に落ちたが、總理は無論板垣退助で、常議員には大井憲太郎、竹内綱、北田正董、林和一、島本仲道の五名で、宮部襄と、林包明は幹事に撰ばれた、何れも、自由黨有志の間に、錚々の名を博した連中で、特に島本仲道の如きは、年を老つてゐた故でもあるが、其頃は、板垣、後藤に次いで、陰然重きを爲してゐた、林和一か、先頃田口卯吉の補缺として代議士と爲つた林謙三の親父よ、中江篤介等と並び稱せられた佛蘭西學者で、氣風の變つた、面白い人物ぢやつた、北田正董かい、之も自由黨内の有力家で、板垣と後藤との間に挾り、調和の任に當つてゐた溫厚な君子人さ、餘の大井や、竹内は、君等も知つてをるやうな人物。常議員の顏觸は、先づ當時自由黨中の粹を拔いたものといつて、良いぢやらう。土佐人の多かつたのは、之は已むを得ない』

『右のやうな顏觸で、いよ〳〵自由黨は出來上つた、凛として、民間有志の足並は揃つて來た、爾うして黨勢擴張の第一策として、新聞紙の發行と、地方遊說に力を注いだ、それと見た當時の政府は、百萬の敵を前にしたやうに氣を腐らし、干渉の手を強ふして、民權黨の頭上に、壓制を加へた、自由黨で。自由新聞を出だすと、政府も負けず劣らず、丸山作樂や、岡本武雄等を指嗾して、官權新聞を出だす、その中に、前に言つたやうに帝政黨といふものが出來る。我輩は水野寅次郎や、藤田一郎のやうな人物が、福地などと肩を列べてゐたので、政府も面白い芝居を打つものぢやと、大笑に笑つてゐたのぢやが、その人物の顏觸は兎も角も、金力と官力とを後楯に控へてゐたので、一時は侮る可らざる勢力であつた』

『味方はといふに、最初は舞臺面は隨分立派であつた、先づ一例として、自由新聞社内の仕組を言ふと、社說記者には、板垣退助、馬場辰猪、中江篤介、田口卯吉、末廣重恭といふ役者を駢べ、別に社内に調査掛と演說掛といふのが、設けられてあつた。調査掛には板垣の秘藏ッ見植木枝盛と、奧宮健之。演說掛には栗原亮一といふ役割、雜報記者には吉田已春等が控へて

ゐた、爾うして、廣告掛には、あの野崎左文が交つてゐたやうに覺えとる、ふと見ると、筆陣堂々としてゐたが、實際をいふと、斯う大看板を張つて、役割を振つたほど立派ではなかつたのぢや、が、記者自身の抱負は大なるものであつた、特に社説記者の如きは、何れも帝國の師を以て任じ、一辭一句と雖も、容易に筆を下さなかつた、その議論や、何かは或は今の若い奴等の方は、良いかは知らぬが、その抱負に至つては、とても〳〵』

『爾うして、その頃は大抵漢文調の文章であつたが、中には今の言文一致のやうな文章も見えたわい、

一寸御免を蒙りまして、日本のお百姓樣、御商人樣、御醫者樣、船頭樣、馬方樣、獵師樣、飴賣樣、お乳母樣、新平民樣共、御一統に申上ます、さてあなた方は、皆々御同樣に一つの大きなる寶をお持ちて御座る、この大きなる寶とは何てあるか、打出の小鎚か、錢のなる木か、珊瑚か、だいやもんどか、但しは別品の女房をいふか、才智勝れた見子の事か、いや〳〵そんなものでない、また是等よりも、一層貴い一の寶でござる、それが自由の權と申すものぢや…………

『之は植木枝盛の書いた民權自由論の緒言の一節、その論調、筆致、隨分奇拔に出てをるではないか。斯んな調子で、自由論を鼓吹したのであるから、靡然として、天下は自由黨に赴いた。が、民間に自由論が喧しくなるに隨ふて、政府はます〳〵壓制の手を擴ろげ、びし〳〵迫害を加へ、後には過激の言論を遣る論客と見れば、片ッ端から監獄にぶつ込んだから驚くではないか。ぢやから、後には監獄の飯を食はない者は、民權家でないやうな、妙な時代になつたのぢや』

『宮崎夢柳が、鬼啾々といふ小説を書いて、監獄に入つたのも丁度此の時ぢや、鬼啾々とは、如何な小説ぢやといふのか、なんでも虚無黨の運動を意匠としたもので、虚無黨員の口を假りて、壓制政府の暴惡を罵つたものぢやつたやうに覺えとる。櫻田百花園が、西海血汐殖家を繪入自由新聞に掲げたのも、矢張政府の干

渉が甚しく、眞正面に議論文を出すとが出來ないからて、餘憤を小説に洩らしたもの、小室屈山が夢戀々を出したのも、矢張同じ動機よ。彼の汗血千里駒を書いて、坂本龍馬を世間に紹介した坂崎紫瀾も、當時土佐に居つて、南海血潮曙か何かを書いてゐたやうに聞いてゐた。まだ小説に筆を染めた文士は、幾人も居たやうぢやッたが、一寸胸に浮ばぬ……政府の壓迫は、政治小説を起こすの機運となつたのぢや。矢野の經國美談や、末廣の雪中梅は、之より遥然と後の事』

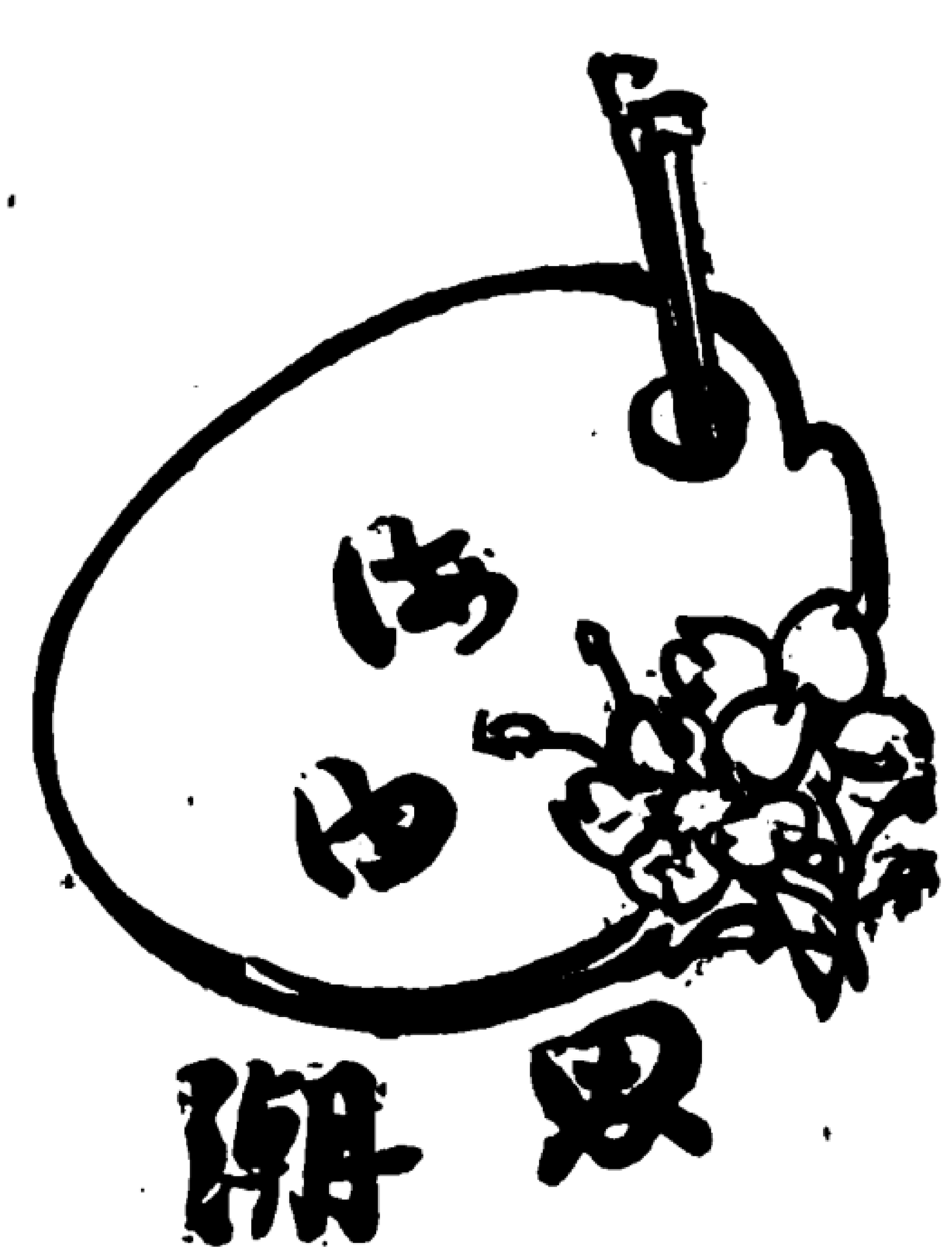
『政府は右のやうに文章に壓迫を加へたばかりてなく、演説に對しては、尙一層甚しかつたわい。演壇に立つて、一言、自由の言葉を口にすると、中止を食ふ者があれば、帝政黨を攻撃して、解散になつた者もあり、後には政府自身も、その煩に堪へなかつたもの歟、常に目指してゐた演説者に對し、年月を限り、全く政談演説を遣るとを禁じ初めた。斯うなつては、民權論者も、その儘指を啣いてへこたれて居らない。學術演説といふ名義を用ひ、外國の歷史を假つて、政府の壓制を攻撃し初めた。外國の歷史といへば、佛蘭西の革命談、ロベスピール、ダントン、マラー等の名は、當時有志者の間には、日々のやうに繰り返へされてゐたのぢや、此の學術演説も、矢張政談に渉るといふので、中止に會ひ、解散を食ふ。其處て、誰か率先者てあつたか今は忘れたが、寄席の主人を語らつて、講釋師と化けるとが流行り初めた。栗原亮一は、先憂亭後樂の名を以て、寄席に出れば、奥宮健之は先醒堂覺明といふ賣卜者のやうな名て、寄席に現はれ、坂崎紫瀾も、馬鹿林鈍翁とか呼んて、寄席に出る、一時は大流行りに流行つたが、之も政府は、片ッ端から禁止したので、遂には糞焼半分、恐るべき計畫を企てるやうになつたのぢや』

『地方はと見ると、東京より一層甚しく、特に自由の本家本元の土佐の如きは最も甚しく、新聞紙の如きは、一ヶ月に三度も五度も發行停止を受け、停止の都度に、記者は監獄にぶち込まれる。西森拙三とかいふ男の如きは、なんても八九ヶ月の間に、六回か縲絏の苦を嘗

めたさうぢや。後には停止で滿足せず、發行禁止の嚴罰を以て、新聞紙に對つたから、新聞社も面當て半分、新聞紙の葬式といふ事を遣つた。新聞紙の葬式―、世界孰れの國にても、恐らく新聞紙の葬式を行つた國はあるまい。政府の方針は、斯んな風であつたから、民間の反抗は、ます／＼甚しくなるばかり、特に過激分子の多かつた關東派の如きは、切齒して、憤り、何時となく、形のない一種の革命結社は、結合されたのぢや」（禁轉載）

▲各國戰時公債比較

	發行額	實收額
日清戰爭	九〇、〇〇〇、〇〇〇圓	八七、七〇三、四八三圓
英杜戰爭	一、三三三、三一七、〇〇〇	一、四八八、〇三七、七四五
獨佛戰爭（獨）	三一〇、七一五、三三三	二八八、一七七、三三三
同上（佛）	六一〇、三六〇、九四七	三八九、三三三、〇三〇
同上償金	二、六三〇、八九三、六五三	二、二一五、四七五、八七一
クリミヤ戰爭（英）	二九五、四七八、四一四	二八四、一二七、〇〇〇
英佛戰爭（英）	八、六〇六、二二六、四五三	五、五三七、四一五、八〇三



日英攻守同盟の利害

矢野龍溪

『戰時畫報』

（上畧）尙ほ上記の所說を明白に概括すれば、現同盟を、攻守同盟に改めたる爲め、日英の海軍を以て、東洋の海上權を把握し、是れが爲め日本帝國の本國は不可侵の者となり、其の安全は盤石の堅きに比すべし、是れ第一の大利なり。

日英兩國が東洋に於て同時に開戰を與にするが爲め、他の敵國は、容易に日英に向て敵對の隙を生ぜず、戰爭を未前に防止するを得べし、是れ第二の大利なり。

此の二箇の大利益を得る爲めの交換として印度方面に事あるの時、我は若干の兵を出して英國を救ふの義務を負ふ事となるべし。

上記二箇の大利益を得る爲め、若干の兵を印度に出だすの一事は、計算上に於て差引き日本に取り、損なるか得なるか、是を判斷するを要す、而して吾々より是を見れば、決して損失にあらず、何となれば日本帝國

本國の獨立安全を盤石の安きに置くの價は、何物にも代へ難きものなればなり、況んや日英二國が開戰を與にする上は、何れの國も容易に、ウカと是に對敵する者なかる可ければなり、然らんには實際に兵を印度に出だすに及ばずして事なきを得るの見込多ければなり。

假に露國が南のかた、印度方面を侵すと相像せよ、彼は此方面に於ても、勇悍なる日兵に防止せらるゝのみならず、他の方面に於て日兵の爲め浦鹽及びシベリヤを侵され、兩面に敵を破るの危險あり、彼れをして常識あらしめば十の八九は自ら求めて此の危險を冒すの愚を爲さゞるべし。

我が國人は、呉々も深思熟考を要す、東洋の海上權を把握するは、何物にも換へ難き至大の價なることを。

現今の同盟條約は、未だ決して日本の安全を保證するに足らず、何となれば第三國は戰に加らざるも、我が對敵の國が露國よりも海軍力に富む者ならんには、我は海上權を喪失する不幸の場合にも、尙ほ同盟英國は是を援助し得ずして、傍觀するの外なければなり、是れ現同盟條約が未だ深く賴むに足らざるの點なり、從て又將來、我は他國と開戰の危險を免れざるなり。

吾々は現同盟を進めて攻守同盟と爲すも、尙ほ一切開戰の危險なしと云はず、然れども現同盟に比すれば、其の危險を減ずること、事理に於て何人も爭ふ能はざる所なるべし。

現同盟にして尙ほ危險ありとすれば、我は單獨にて他國に當るに足るべき多大なる艦船の設備を營まざる可らず、已に多く國力を糜耗せし日露の戰後に於て、又更に此の多大の軍備に當らんとせば、我が國力の或は負荷に勝へざらんことを恐る、因ては其の力を養ふ可き、五年十年の間、攻守同盟に因て、民力を蘇息するを得ば、是れ亦た機宜に適するの策たらずんばあらず。

凡そ天下の事、是を急にすれば蹶き、是を緩にすれば成る、財政に於ては特に然りとす、均しく我が海軍を充實するも、是を一朝一夕に急にするときは、一國の財力は其の重荷に堪へざるも、是を五年十年に成すときは、左迄の苦みなくして國力を消耗するに至らず、然るに現同盟の儘なるときは、何時開戰の危險あるも知れず、須臾も油斷し難きが故に、其設備は、是を一朝一夕の急に求めざるを得ず、其の民力蘇息を害する、實に言ふ可らざるものあらんとす、是れ亦た現同盟を改更すべき所以の一なり。

既往の事例を案ずるに、海軍の設備の巨費を要するは常に陸軍に幾倍せり、況や島帝國は海上の權力に重きを置かざるを得ざるの形勢あるや、印度方面に陸兵を出すに備ふるの費は、海上權を把握するの費に比すれば甚大を要せざる可し、是亦た熟考すべき所なり。

然れども、只玆に思考を要するの一事あり、英國が有事の日に於て、我を助く可き艦數と、印度に於て我が彼れを助くべき陸兵との權衡を得せしむること緊要なり、此の一事に於て、彼少なく、我多きときは、其利、彼に厚くして、我に薄きの恐れあり、攻守締盟の各條件が發表せらるゝにあらざれば、吾々は未だ其詳細を知るに由しなし、然れども吾々は二國の當局者が、必然兩者をして平衡を得しむる者たるを信ぜんと欲するなり。

同盟の利害は實に懸て上記の一點に存ず、如何に攻守同盟を攻擊する論者ありとも、假に我は印度に、一師團以下の兵を送れば濟むとし、我は英國より一等戰艦、二十餘隻、三十萬噸以上の助を受るの條約なりと云はゞ、之に不贊成を表する者は、一人もあらざるべし、又之に反し我は二三軍團を送るに、英の我を助るは僅に、三四隻の戰艦に止まるの條

約ならんには、如何なる攻守同盟主張者と雖も、之に反對せざる者なからん。

故に未だ詳細の條件を審にせずして之を批議するは、實は大早計たるを免れず、今や吾々は此點に就き、雙方の救援出兵は平衡を得る者と假定して、以て此論を爲し、苟も平衡を得る者ならんには、其の我國に利する所、甚大なるべきの理を概說するに止むるのみ。

支那研究

青柳篤恒

『早稻田學報』

一體支那人といふものは、一度初じめて遇つて其時に輕蔑される心を招いたら最後、モウ迚も挽回することは出來ないと覺悟しなければならない、能く日本人が西洋の文明を餘りに偏重する所からして、支那の文明である所の儒教なるものは役に立たぬ、迂濶なるものである、腐敗して居るものであると斯樣に說く人がある、けれども支那人の方では何と言つて居るかと云ふと、隨分皮肉な事を言つて居るものである、日本の文明とは抑も何の謂だ、昔しの日本の文明は支那から貰つたものではないか、又今日の日本の文明は歐米から貰つたものではないか、さうすれば結局日本固有の文明なるもの何くにかあると、斯樣に論じて居る、成程一寸理屈が立つ、日本人は支那人のことをチャン〳〵と惡口を言ふが、夫れと同じやうに支那人は西洋人のことをヤンコイと言ふて居る、ヤンコイとは洋鬼と書くのだ、其處で日本人のことを何と言ふかと云ふと、之は支那音でチャコイと言ふて居る、字に書くと假鬼、假とは贋と云ふことだ、ニセ鬼、西洋人の眞似をして居ると云ふことで、此思想は中々支那人には失せない。

第一支那貿易に關係して居る日本の實業家の中には、往々にして支那人のテーストをも研究して居ない人がある、澤山の商品を支那へ輸入して居る、けれども其中のどの商品が賣れて居るのだか、どれが支那へ向いて居るのだか、又何の爲に支那人は之を使つて居るのだか、そんな事は一向頓着しない、或る日本の石鹼業者が支那に澤山石鹼を輸入した、何ういふものか大當りて非常に賣れた、支那人は此石鹼を何に使つたかと云ふと、其石鹼の香ひが誠に穢い、夫れて茶腕や何かを洗ふに適するといふので使つたのだ、そんな事に使はれやうと日本人の氣の附かないのは無理はないが、兎に角大變賣れたものだから得意になつて、之はうまい、何とか新工夫をして、モット賣れるやうにしたいものだ、どしたら宜からうといふ所から、成程之は香ひが少し足りない、香ひのプン〳〵するやうにしてやつたら倍ほ賣れるだらうと思つて、今度は澤山香料を入れて支那へ送つた所が、アベコベに販路はピッタリと止まつて仕舞つた、之は全く日本商人の研究不足の適例であると思ふ、又卷煙草なども矢張りさうである、支那人の間に用ひられる日本の紙卷煙草は必らず吸口の付かないものに限つて居る、吸口の付いて居る卷煙草は支那人は決して使用しない、なぜ使用しないかと云ふと、紙卷煙草の吸口は敷島とか大和とか云ふやうに何か文字が書いてある、煙草を吸ふ時分に吹口まて吸つて仕舞う人はありませぬから、煙草だけ吸つて仕舞へば吸口は棄てるに違ひない、道路に棄たれば誰が踏むか分らない、人が踏むか犬が踏むか馬が踏むか分らない、其踏まれた文字は如何なる文字であるかと云ふと、支那人に言はせると是は孔子樣や孟子樣の文字である、孔子樣や孟子樣の文字を大道の眞ッ只中へ打棄てゝ犬や馬に踏ませると云ふにりつては、我中國五千年の人倫も地に落ちたるかなと言つて嘆く、だか

ら吸口のある卷煙草と云ふものは決して支那人は使用しない、其處でヒーコック、ピンヘッドのやうな吸口のないものが行はれて居る、天狗などゝとなると又行はれない、之は外に理由がある、則ち名の付け方が惡い、商標が惡い、天狗と云ふものは支那人は大嫌ひだ、是等は大いに研究しなければならぬ、即ち支那人は龜の子が大嫌ひ、兎が大嫌ひ、小便無用と書かうと思へば、白壁へ龜の子が四ッん這ひになつた處を書いてさへ置けば、人が小便をしないと云ふ位。

まだ〳〵實業家仲間の外の研究の不足を申上げたら中々多いのであるが、第一支那の貨幣制度にすら通達して居らぬ、支那の貨幣は頗る複雜なるものであるけれども、此貨幣の價格かどう云ふ風に變化して居るか、何處でどう云ふ金が通用するか、其事すら研究して居らぬ人がある、支那で一弗といへば、亞米利加と間違へて話をする人さへある、之は大間違である、支那の弗は我國の一圓にも足りない、けれども弗で話をすると亞米利加の弗と思つて大變澤山のやうに思ふ人があるのを幾度も耳にする、又銀貨と銅錢の關係等は少しも分らない、十錢の銀貨を持つて往つて銅錢と取換へて買へば、矢張り銅錢で十錢吳れるものと思つて居る、夫れらがまるで支那の事情に通じて居らない證據だ、我々のやうな金の無い素寒貧なら夫れでも宜いけれども、苟くも實業家で金を溜めたい一方の人なれば、さう云ふ金の勘定をすら知らないで居つては仕方がない、十錢の銀貨で銅錢十錢は決して吳れない、先づ普通十錢の銀貨を持つて往けば、七八錢しか銅錢は吳れない、さう云ふ風に始終相場と云ふものは變つて往く、例へば支那の各開港場に日本の郵便局が設置されてあるのは、諸君も御承知であらうが、そこで賣出す日本の郵便切手には「支那」と云ふ二字が特に印刷してある、なぜ支那と云ふ二字が印刷してあるかと云ふと、日本の內地では其切手を使ふことが出來ない樣にしたものだ、支那は銀の相場が始終變る、切手一枚に對してでも同じことだ、我々が手紙を出す時分に切手を一枚下さいと云ふやうに、一枚〳〵買つて居るならば、大したことはないけれども、銀の相場が下つた時分を見込んで、何萬枚と云ふ澤山な印紙を支那で安く買入んで、それを日本へ持つて來て使へるとなつたならば、大變儲かる、即ち空買賣が行はれる、これも一種の投機事業であつて、善良なる風俗を害することになる、故に支那にある我國の郵便局で賣る郵便切手には、支那と云ふ二字を印刷して、日本で使へないやうにしてあるが、併し日本で買つた印紙は支那で使へる、是等も矢張り注目すべき事である、其他支那へ往つて居る日本の商人の有樣を見ると、支那へ行く以上は支那人が御得意先に相違ないのに、其御得意先の支那人の前に立つて威張つて居る、威張つて高く賣ると云ふことは、大分虫の宜い話だ、御買ひ下さいと云ふのではない買うなら賣つてやらうと云ふ位な意氣組だ、是では仕方がない。

ボーイの使ひ方などがまるで支那向きでない、即ち日本の給仕を使ふのと同じやうな使ひ方をして居る、例へば此所に三人なら三人、四人なら四人のボーイが居るとすると、日本ならばこつちのボーイがおさんどんで、男のおさんどんと云ふのも可笑しいが、兎に角臺所の事をする、そうしてこつちのボーイが仲働きをする、然るに一方の臺所が忙しければ、仲働きに命じて手傳はせる、斯く云ふことは日本では普通であるが、支那ではいけない、支那のボーイは皆分業的で、自分のする職務はちやんと極つて居るから、自分の朋輩が如何に忙しくつて目が廻るやうであつても、自分の職務以外の事には決して手を出さない、晝寢をして居つても、朋輩の忙しいのを構はぬと云ふ位に分業的に出來て居る、斯の如く凡て日常の事にまで研究の不足と云ふことが現はれて居るやうに私は認めて來た。

滿州處分

法學博士 岡田朝太郎

『大日本』

帝國は啻に自衛上滿州に戰ふの止むを得ざるのみならず、其一半は却つて清國の爲に戰ひつゝあり、某國の領土の一部他の某國に併有さるゝも、其某國にして誠意人文の開發に任じ利益の増進を謀りて漸次世界の幸福に資せんとする、夫の米國がフィリッピンを併有したるが如くならしめば、其事縱令帝國の附近に行はれたればとて、帝國は之を喜ぶとも斷じて之を咎むことなし、然れども、露國に至りては其征服地を開發する能力を有せず、否之を開發する能力を有せざるに非らず、自ら好んで開發に力めず、暴力を以て屈服し、壓制を以て膏血を吸るを方針となし、陽に列國に開放して陰に他國の利權を妨げ、而も獲る所は少數貴族榮華の資に供せらるゝに過ぎざること、火を見るより明なり、渠がハルビンの開拓に費したる資金、旅順大連に放下したる資金、決して尠少なりと云はず、茫々たる原野に一大都市を現出し、片々たる漁村に莊嚴なる港灣を築造したるを見るときは、渠亦力を開發に盡くす好個の先進國たるの觀ありと雖、斯の如きは實は將來大に其の爪牙を張らんとする一階段に過ぎざるなり、亞大陸富源の一たる滿州を策源地とすれば、旅順の咽喉を扼して直ちに蒙古より老大國の背を打つべく、東に瀕死の韓國を一蹴すれば新進有爲の日出國遂に亦裸々無防の地位に陷るべし、斯くの如くなれば東亞の事一に渠の欲する所に任すべく、之を知ること亦一朝一夕の故にならざるを以て、ハルビンに將た旅順に大連に暫く資金を放下して以て將來の地歩を堅めんとしたるのみ、其の開發は何ぞ渠の心ならんや、清國之を覺らず、覺るも如何ともする能はず、之を知り之を處するに足るべき帝國の奮然起つて戰ふもの、一半は實に清國の爲にあらずして何ぞや。

帝國が自衛及び清國保全の爲め、露の惡戲を粉碎するの必要は開戰の以前より、上下之を認めて疑はざりし所なり、戰鬪の目的も媾和の條件も一に東洋永遠の平和の爲に外ならず、此間清國の情勢に如何なる變化ありしか、財政の經過如何、教育及び軍備の實況如何、直ちに滿州無條件の還附を受けて、何人か露國の捲土重來を防ぐ、爲に其効を奏して露國藥籠中のものに化せんとする蒙古は何人が其の安全を保障するか、帝國が再三再四一國の存亡を賭する大戰を繰返すの愚を爲す能はざる以上は、滿州の開發に力めて日清兩國の安全を保つの權利及び義務を有す、一時割讓せしむるも可なり、條約を以て單に統治を委任するも可なり、要は清國に自衛の實力あるを認むるに至るまで、暫く帝國をして滿州開發の事に當らしめ以て日清兩國の墻壁を築造するの策に出でしめざる可らず、徒らに迂路の傳ふる如き謬見を抱きて自ら強うするが如き事あらば、兩親善國の不幸實に之より大なるはなし。

一億のスラヴ人あるを忘るる勿れ

姉崎正治

『時代思潮』

同胞よ、戰場の勝を以て時局の終結とする勿れ、平和の克復を以て枕を高うする勿れ、戰艦は擊滅すべし、敵國の官僚政治亦恐くは戰敗によりて一大頓挫を來たさん、而かもその背後には尚一億のスラヴ人あるを忘るる勿れ。

戰敗の結果敵國の官僚政治がその勢力を失墜するは、一月廿二日首府職工の一揆以來、一度鎭靜に歸するも、鎭靜の後に又爆發あり、壓抑に對して反抗あり、一變毎にその程度と規模を大にして來れる一事に明かなり。一波一瀾、寄する毎にその强さを增し來るロシヤ一億の人民の勢力は恐くは弱點を暴露したる官僚政府の終に抑壓し得る處にあらざらん。姑息ながらも皇帝が政治上の自由に一步を讓り、信敎の自由に保證を與へんとしたるが如き、皆人民の勢力と政府の威信との消長を示さゞるなし。此の如くにして政府の弱點は人民要求の力を强め、反亂、抑壓、反動、反抗幾多の波瀾は此に次て襲ひ來るべし。而かも一事の睽として明かなるは、その結果終に閥族的惡政府の代はりにスラヴ一億の人民の自治を得べき事なり。その形式は或は立憲政治とならん、或は又分裂したる聯邦ともなる事あらん、何れにしてもその終局は頭大虛飾の閥族政治を倒して、眞正に人民を基礎としたるスラヴ民族の一國を東歐の天地に現出するにあらん。事此に至ればそのロシヤは今日のロシヤに非ず、今日のロシヤを打擊し得たる者必しも今後のロシヤを破り得じ。

由來スラヴ民族は忍耐の氣象に富めり、外面鈍なるが如くにして中に熱烈の情緖を具え、その情火一度び爆裂するや、隱忍は轉じて獰猛となりて如何の力を現はすや測り難き者あり。今迄壓制政府の下に苦められては、この力は組織統一を以て發表せざりしも、そが個人、特に文人志士、音樂者、學者に現はれたる一斑を見ても、スラヴ民族の方は忍受と熱烈とに於て驚くべき者あり。且つ彼等が政治的組織力に至りては、シベリア、蒙古、北海の岸等到る處彼等の流人が組織せる自治村落に於てその一端を示せり。

此の如き人民がその頭上の壓抑を排し、自由にその政治を組織し、國民的團結を成し、その文物を開發するの日は、卽ち彼等が數百年來辛慘の中に養ひ來りし忍と勇との發揮し來る時ならざるべからず。而して若しスラヴ民族今後の歷史に此の如き日來りしならんには、彼等をしてその官僚政治の束縛を排するを得せしめたる大恩人の少くとも一人は我等日本人なり。然らば今日の政府としては我等の敵たるロシヤ國民も、その人民より見れば、我等と彼等と互に良友たらん、少くとも東歐と東亞とに有望の將來を有する儔侶たるを失はざるべし。

ロシヤの軍隊を破り、ロシヤの政府を打擊したるの故を以て直にその人民を敵視し或は輕蔑するは誤れり。スラヴ民族は數百年の歷史によりてその忍受の力量を示せり、而して今や營火の國民的運動の中より、燦然文明の中に異彩を放つ準備時代にある人民なり。ロシヤの將來を考ふる者は、その政治軍備のみの打算を以て萬事を律すべからず。表面に現はれたる彼等の國政以外、更に一億の有力なるスラヴ族の衆民あるを忘るる勿れ。

新渡韓者に警告す

在仁川　天春又三郎

失敗者の歸國續出す

『實業之日本』

日露開戰以來邦人の新に渡韓せるもの船便毎に其數二三百を下らず、各多少の緣故に依りて、釜山に仁川に鎭南浦に上陸し汲乎として其職を求めつゝあり。之を開戰以前の各居留地人口の統計に徵するに戰前と戰後の今日とは何處も二倍乃至四倍の增加を示すと云ふに至りては實に一驚を喫せざるを得ず。畢竟内地の不景氣なる反對に、朝鮮の景氣が頓に殷んなるに由りて有無相通ずる自然の歸趨上、俄かに如此渡韓者の增加

を見たる所以なるべしと雖ども、冷に這般の狀勢を觀察せば如何にも輕擧妄動に失するの嫌あるを發見するを得べし。果然是等渡韓者の多數は豫期の十一をも遂行するを得ず、遂に其困憊の境遇に堪切れずして空しく怏々として逆戻りの已むを得ざるに出づるもの、頃者過た每船便百名乃至二百名を以て數ふるに至る。初め脫兎の如く終り處女の如しとは此輩の如きを稱するならむ、其愚一見笑ふに堪へたりと雖ども、彼等が挺身以て玄海の波濤を凌ぎ艱難を意とせず、終局の勝利を收めんとするに當りては、內に妻子の飢餓に叫ぶもあるべく、外に債鬼襲來の退引ならぬもあるべし、其程度こそ違へ、孰れも必ず迫害の身に降りかゝりたるを物ともせず、敢爲進取の勇氣を鼓して郷關を出發したるに於ては等しく撰む所あらざるべし。然るに不幸にして事、志と違ひ遂に「ナゲナシ」の金さへ蕩盡して不面目と知りつゝ空しく歸國せざるを得ざる其の心事の術なさは察するに餘りありと云ふ可し。然かも猶斯の如く兎も角も歸朝し得るものは失敗者中の寧ろ上乘なるものにして、甚きに至りては居るに居られず歸るに旅費なく着のみ着のまゝにて流離顚沛の悲境に役々たるものの幾許なるを知らず、憐々の狀轉た惻怛に忍びざるものあり。

固より是等失敗者は堅忍の志操に欠く所もあり、所世上の智識に乏しき爲め遂に生存競爭の場裡に敗北したる弱虫連にして、多くの渡韓者中には又之に反し美事に在來の居留民を凌駕し、着々として成功を收めつゝあるものありて必ずしも一樣に評す可らずと雖も、自體韓國と云ふ土地が日露戰爭の有無に依りて俄に生產の增減する筈もなければ、隨て多數の新來者をして裕に生活せしめ得る餘地の生じたる譯もあらず、勿論近時軍事費及び鐵道敷設費の放下せられたる金額は莫大たりと雖ども、之に依りて生ずる利益は舊來の在留民に於て收得せられて、土地慣れざる新來者の掌中に入るとは至難のことに屬す、畢竟蒔かぬ種は生へざる道理にして如何に未開なる朝鮮と雖ども一朝一夕に成功せし例は之れ有らざるなり。殊に軍事費落下の如き一時的の現象は既往の事に屬して、今後の朝鮮は最早着實なる常業の外何等施す道あるなし。

清國開發の根本問題

法學博士　高田早苗

『向上主義』

（上略）試に之を教育的方面より觀察せん乎。我國の識者は清國教育界の現狀を見て、遂に我國の發達に及ばずとなし、往々にして其前途を悲觀する者あり。然りと雖余が南京、武昌、保定府に於て視察したる所を以て、之を余が學生時代に經驗せし廿餘年前の大學東校等の狀態に比較せば、悲觀論者の甚しく早計に失するなきやを疑はずんばあらず。若我國にして專心銳意、彼の教育を進步せしむべき後援の勞を辭せずんば、其隆昌の運に向ふや期して俟つべき也。且夫れ清國の文運今尙幼稚の狀に在れば、必ずや海外の文明を移植して、其開明を俟たざるべからず。然り而して其種子を英米に仰がん乎、獨佛に求めん乎。將た我日本に之を要請せん乎。英米の文化、獨佛の學藝、清國に取りては固より大牢の美味なきに非ずと雖、言語相異り人情相反し、東西文明の性質全く同からず。且土地遼隔にして往來自由を缺くの不便あり。然るに日本は維新開國以來、夙に歐米の文化を輸入し、短を捨て長を取りて其精粹を咀嚼し。既に之を日本化して餘す所なきに至れり。若清國にして文明の範を直に我に求めん乎。歐米の文化を直接に吸收するに比すれば其勞力の多寡、蓋し天淵も啻ならざるものあらん。況んや日清兩國、人種、風俗、人情、文字を均しふするの至便あるに於てをや。

是れ未だ清國の利益を觀察するに過ぎずと雖、清國の誘導開發は、又我國に多大の利益あるを忘るべからず。夫れ金錢物質は他に之を與ふれば、我之を失ふの不利ありと雖、獨り精神的智力に至りては然らず、我國が朝に清國に敎ふるに歐米の學術を以てし、夕に之に授くるに日本的文化を以てすと雖、我に於て果して何の失ふ所ぞ。然るに我國は却て同情てふ無形の報酬を贏ち得るの利あり。余が過去の經驗の敎ふる所によれば、凡そ歐米の學術を原書によりて研鑽するや、英語に依るものは英米を尊崇し、佛語に依るものは佛國を歎美し、獨逸語による者は獨逸を敬愛するの念、不識不知の間に學生の頭腦に萠生す。人として我鄕土を眷戀し、祖國を親愛するは、固より論を俟たずと雖、之に次ぎて或一國の言語を通じ文章を介して、其國民の人情、好尙、思想、感情を熟知するに至らば、誰か其國を見るに同情親愛の念を生ぜざらんや。若我國にして、清國の誘導開發の任に當り、我文章言語を以て之を敎化せば、彼の我を見ること第二の祖國に對するが如く、又我を仰ぐこと師表を崇敬するが如くなるべきや必せり。斯くの如くにして冥々の間、彼我の感情相融和せば、政治上、經濟上、我帝國の利權を伸張するに於て、其便益蓋し測り知るべからざる也。

清國の領土保全、誘導開發は、我國の正に採らざるべからざる國是也。然り而して清國を根本的に覺醒せしめ、開明富强、敢て歐米列强に遜色なからしめむとせば、制度の更改、法律の制定等、區々たる政治上の小刀細工を以て遂行すべからず。先づ清國人民をして、國民的自覺と民族的結合を全ふせしめざるべからず。而して之に施すの策は、只敎育を振興するの一途あるのみ。清國の現狀を以て我國に比較せば、恰も維新前の狀態に髣髴たり。我國は維新前後、邁往進取、歐米の文物を輸入して、敎育の普及振興に勉めたるが爲に、遂に富强歐米を凌駕するの隆運を見たり。普魯西は奈翁の馬蹄に蹂躙せられて、困頓起つ能はざるの悲境に沈淪せりと雖、スタイン、フンボルの徒、全力を傾注して敎育を振興したるが爲に、他日竟に獨乙帝國統一の基礎を作れり。然らば則ち清國も亦敎育全般に普及せば、漸次國民の覺醒を促して、發奮激勵、遂に開明富强の域に達するの日なからむや。而して之が開發指導の任に當るは實に我敎育家の重大責務也。

戰後實業靑年の發展策

井上辰九郎

『活動の日本』

戰後實業靑年は、如何なる方面に向つて發展すべきかと云ふに、其者の智識の程度や周圍の事情等によつて、自から發展方針が異る、また其從事する處の職業の種類によつても、各々相違の點があるから一樣にこれを論ずることは出來ないけれども、大抵の上に就いてこれを云へば、戰後內地に於ての仕事も必ず出來るに違ひないが、或る動機に乘じて靑年の大に驥足を伸ぶべき舞臺は、淸韓兩國內にあると云はればならぬ、併しながら淸韓地方へまで遠征に出懸けるのには、無論一家を經營すべき責任があるものでは一寸踏み出し悼い、唯だ別段繫累もなく、身體一つで何處へ飛出して行つても、敢て差閊のない身分の者であつたなら、此方面に向つて發展の途を求むべきである。

而して若し遠征を企てるとすれば、如何なる方法に依つたが可いかと云ふに、成程事業を爲るには資本もなければならないけれども、退いて考へると、比較的社會の事情に精しくない靑年者が、資本を以つて仕事を遣るのは隨分危險な話ぢやないかと氣遣はれる、それも一層大資本を

有つて懸るのなら未だしも失敗が少ないかも知れぬが、さもなくて愆じの資本を有つて事業を始めた處て、これが氣めに父祖から讓られた資産を傾け盡して、失敗に了らればならぬ、而して其失敗たるや單に一人だけの不幸に止まらず、後進者が發展の上に於ても頗る妨げをなすものであつて、これ程詰らぬ話はないのだ。

然れども小資本を有つて、行商などを遣つて行くのは、これはまた却つて宜いかも知れない。けれども所謂發展と云ふことに至つては、果して能く目的を達し得らるゝや否やは、甚だ覺束ないだらうと考へられる。

若し夫れ以上の方法に依らずに、發展すべき途を求めるならば、宜しく語學をもつて發展の緒を開くのが最も捷路だらうと思ふ、由來青年は兎角卑近なことを嫌つて、高尚なことばかりを望む風習があるが、發展策の第一着として先づ此風習からして打破しなければならぬ、何でも實業界に身を投じて金儲けをしやうとするには、普通學科は只だ用を便ずれば、それで可いとして置いて、一方に於て語學を學ぶべき必要があると思ふ。

それであるが、清韓地方へ渡航した曉は獨立して事業を經營すべきか、將た人に使はれて徐々と立脚地を作つて行く方針を採るべきかと云へば、一攫千金と一躍して、風雲に乘じやうと云ふ、大抱負を有つて居るのは甚だ結構てはあるけれども、自已の力とか境遇などを顧みずに、空中樓閣を描く的の空想を抱いて仕事を遣るのは、これまた危險千萬の譯てある。

先づ獨立して事業を起すとした處て、無論勞力ばかりては事業の成立つものてないから、是非資本家を得なければならぬ、けれども此資本家たるものは容易に得られるものてないのだから青年としては、先づ最初は人に使はれるやうなことにする方が可からう、獨立すると人に使はれるとは其名聞の上に於いて、獨立と云へば什麼にも立派そうに聞えるし、人に使はれるとなると、何うやら依賴心のあるやうに解釋されるかも知れないが、青年が發展の順序としては、最初は會社を始めとして、總て組織立つた處に使はれ、そして其中獨立の基礎を作つて行く方が得策であらうと思ふ。

清韓地方に於て從業者となつて働らくとすれば、第一に必要なのは語學である、それで之とても、別段六つ個敷事を知らなくとも可いが、日常取引上の談話や手紙が認められゝば充分だ、兎に角深くは知らなくとも一寸語學も出來るし、帳簿の整理や日々の雜務を執れると云ふのが、一番實業家の從業者として向き口が多い、てあるから最初は這麼風に重寶な人間として使はれて居れば、其内追々土地の事情にも通じて來る、そうなれば儲け仕事も見付からぬとは限らず、隨つて資本家も得られて、大發展を爲すべき動機を得られるかも知れぬ。

左れば實業青年は、今少し卑近なる處に着眼して、資本に代ゆるに、語學なる武器を以てし、徒手空拳を振つて清韓地方に發展の途を求むるのも殊に可からうと思ふのである。



帝國文學

第十一巻第八目次

◉懸賞脚本募集 締切十二月末

定價 壹册金十五錢郵税金一錢 六册前金郵税共金九十錢 十二册前金郵税共金壹圓六十五錢

丁酉倫理會 倫理講演集

第三十五輯目次

講演

雜錄

定價 壹册金十貳錢郵税金一錢 六册前金郵税共金七十二錢 十二册前金郵税共金一圓參十二錢

發行所 東京銀座一丁目 大坂北久太郎町 大日本圖書株式會社

泉鏡花著

續風流線

此の續編に於て、各位は、水滸の旗亭に會して、書中の哲士美人とゝもに、親く晩餐し給ふべし。時恰も可芙蓉水清く、月白山に在焉

▲實價六十錢　郵税八錢

風流線

定價六十錢　郵税八錢



春陽堂

圖書目錄

往復葉書にて御申越次第進呈

新小說

第拾年第九卷●九月一日發行

▲小說▼

藻の花……中村春雨

遠潮……鈴木秋風

脚本 太田道灌……久保田米僊

▲戰後の文壇▼

戰後の文壇に就て……上田萬年

戰後の文壇に對する希望……山路愛山

戰後の文壇……上田敏

非常な人……三宅雄次郎

牛のよだれ……坪内逍遥

有聲無聲……昇曙夢

梅川忠兵衛の傳說……關根默庵

新講談に就て……後藤宙外

朧化の力……同

ソネト二篇……岩野泡鳴

繪師……薄田泣菫

談叢▲藝苑▲社會等内容豐富

▲實價廿五錢　郵税二錢

發兌元　東京日本橋通四丁目角　春陽堂

詞藻

（禁轉載）

一夜

夏目漱石

『美くしき多くの人の、美くしき多くの夢を……』と髯ある人が二たび三たび微吟して、あとは思案の體である。灯に寫る床柱にもたれたる直き脊の、此時少しく前にかゞんで、兩手に抱く膝頭に險しき山が出來る。佳句を得て佳句を續ぎ能はざるを恨みてか、黑くゆるやかに引ける眉の下より安からぬ眼の色が光る。

『描けども成らず、描けども成らず』と椽に端居して天下晴れて胡坐かけるが繰り返す。兼ねて覺えたる禪語にて即興なれば間に合はす積りか。剛き髮を五分に刈りて髯貯へぬ丸顏を傾けて『描けども、描けども、夢なれば、描けども、成りがたし』と高らかに誦し了つて、から〳〵と笑ひながら、室の中なる女を顧みる。

竹籠に熱き光りを避けて、微かにともすランプを隔てゝ、右手に違ひ棚、前は緑り深き庭に向へるが女である。

「書家ならば絵にもしましよ。女ならば絹を枠に張つて、縫ひにとりましよ」と云ひながら、白地の浴衣に片足をそと崩せば、小豆皮の座布團を白き甲が滑り落ちて、なまめかしからぬ程は艶なる居ずまひとなる。

「美しき多くの人の、美しき多くの夢を……」と膝抱く男が再び吟じ出すあとにつけて「縫ひにやとらん。縫ひとらば誰に贈らん。贈らん誰に」と女は態とらしからぬ様ながら一寸笑ふ。やがて朱塗の團扇の柄にて、亂れかゝる頬の黒髪をうるさしと許り拂へば、柄の先につけたる紫のふさが波を打つて、緑り濃き香油の薫りの中に躍り入る。

「我に贈れ」と髯なき人が、すぐ言ひ添へて又から〱と笑ふ。女の頬には乳色の底から捕へ難き笑の渦が浮き上つて、瞼にはさつと薄き紅を溶く。

「縫へば如何な色で」と髯あるは眞面目にきく。

「絹買へば白き絹、糸買へば銀の糸、金の糸、消えなんとする虹の糸、夜と晝との界なる夕暮の糸、戀の色、恨みの色は無論ありましよ」と女は眼をあげて床柱の方を見る。愁を溶いて錬り上げし珠の、烈しき火には堪へぬ程に涼しい。愁の色は昔しから黒である。

隣へ通ふ路次を境に植え付けたる四五本の檜に雲を呼んで、今やんだ五月雨が又ふり出す。丸顔の人

はいつか布團を捨てゝ椽より雨足をぶら下げて居る。『あの木立は枝を卸した事がないと見える。梅雨も大分續いた。よう飽きもせずに降るの』と獨り言の樣に言ひながら、ふと思ひ出した體にて、吾が膝頭を丁々と平手をたてに切つて敲く。『脚氣かな、脚氣かな』

殘る二人は夢の詩か、詩の夢か、ちよと解し難き話しの緒をたぐる。

『女の夢は男の夢よりも美くしかろ』と男が云へば『せめて夢にでも美くしき國へ行かねば』と此世は汚れたりと云へる顏付である。『世の中が古くなつて、よごれたか』と聞けば『よごれました』と紈扇に輕く玉肌を吹く。『古き壺には古き酒がある筈、味ひ給へ』と男も鵞鳥の翼を疊んで紫檀の柄をつけたる羽團扇で膝のあたりを拂ふ。『古き世に醉へるものなら嬉しかろ』と女はどこ迄もすねた體である。

此時『脚氣かな、脚氣かな』と頻りにわが足を玩べる人、急に膝頭をうつ手を擧げて、叱と二人を制する。三人の聲が一度に途切れる間をクヽーと鋭き鳥が、檜の上枝を掠めて裏の禪寺の方へ拔ける。クヽー。

『あの聲がほとゝぎすか』と羽團扇を棄てゝ是も椽側へ這ひ出す。見上げる軒端を斜めに黑い雨が顏にあたる。脚氣を氣にする男は、指を立てゝ坤の方をさして『あちらだ』と云ふ。鐵牛寺の本堂の上あたりてクヽー、クヽー。

『一聲でほとゝぎすだと覺る。二聲で好い聲だと思ふた』と再び床柱に倚りながら嬉しさうに云ふ。此髯男は杜鵑を生れて始めて聞いたと見える。『ひと目見てすぐ惚れるのも、そんな事でしよか』と女が

問をかける。別に恥づかしと云ふ氣色も見えぬ。五分刈は向き直つて『あの聲は胸がすくよだが、惚れたら胸は痞へるだろ。惚れぬ事。惚れぬ事……。どうも脚氣らしい』と拇指で向脛へ力穴をあけて見る。『九仭の上に一簣を加へる。加へぬと足らぬ、加へると危うい。思ふ人には逢はぬがましだろ』と羽團扇が又動く。『然し鐵片が磁石に逢ふたら?』『はじめて逢ふても會釋はなかろ』と拇指の穴を逆に撫でゝ濟まして居る。

『見た事も聞いた事もないに、是だなと認識するのが不思議だ』と仔細らしく髯を撚る。『わしは歌麿のかいた美人を認識したが、なんと書を活かす工夫はなかろか』と又女の方を向く。『私には――認識した御本人でなくては』と團扇のふさを纎い指に卷きつける。『夢にすれば、すぐに活きる』と例の髯が無造作に答へる。『どうして?』『わしのは斯うぢや』と語り出さうとする時、蚊遣火が消えて、暗きに潜めるがつと出てゝ頸筋のあたりをちくと刺す。

『灰が濕つて居るのか知らん』と女が蚊遣筒を引き寄せて蓋をとると、赤い絹糸で括りつけた蚊遣灰が燻りながらふら〳〵と搖れる。東隣で琴と尺八を合せる音が紫陽花の茂みを洩れて手にとる樣に聞え出す。すかして見ると明け放ちたる座敷の灯さへちら〳〵見える。『どうかな』と一人が云ふと『人並ぢや』と一人が答へる。女許りは默つて居る。

『わしのは斯うぢや』と話しが又元へ返る。火をつけ直した蚊遣の烟が、筒に穿てる三つの穴を洩れて三つの烟となる。『今度はつきました』と女が云ふ。三つの烟りが蓋の上に塊まつて茶色の球が出來ると

思ふと、雨を帶びた風が颯と來て吹き散らす。塊まらぬ間に吹かるゝときには三つの烟りが三つの輪を描いて、黑塗に蒔繪を散らした筒の周圍を遶る。あるものは緩く、あるものは疾く遶る。またある時は輪さへ描く隙なきに亂れて仕舞ふ。『茶毘だ、茶毘だ』と丸顏の男は急に燒場の光景を思ひ出す。『蚊の世界も樂ぢやなかろ』と女は人間を蚊に比較する。元へ戻りかけた話しも蚊遣火と共に吹き散らされて仕舞ふた。話しかけた男は別に語りつゞけ樣ともせぬ。世の中は凡て是だと疾うから知つて居る。

『御夢の物語りは』とやゝありて女が聞く。男は傍らにある羊皮の表紙に朱で書名を入れた詩集をとりあげて膝の上に置く。讀みさした所に象牙を薄く削つた紙小刀が挾んである。卷に餘つて長く外へ食み出した所丈は細かい汗をかいて居る。指の尖で觸ると、ぬらりとあやしい字が出來る。『かう濕氣てはたまらん』と眉をひそめる。女も『じめ〳〵する事』と片手に袂の先を握つて見て、香でも焚きましよかと立つ。夢の話しは又延びる。

宣德の香爐に紫檀の蓋があつて、紫檀の蓋の眞中には猿を彫んだ靑玉のつまみ手がついて居る。女の手が此蓋にかゝつたとき『あら蜘蛛が』と云ふて長い袖が橫に靡く、二人の男は共に床の方を見る。香爐に隣る白磁の瓶には蓮の花がさしてある。昨日の雨を蓑着て剪りし人の情けを床に眺むる莟は一輪、卷葉は二つ。其葉を去る三寸許りの上に、天井から白金の糸を長く引いて一匹の蜘蛛が――頗る雅だ。

『蓮の葉に蜘蛛下りけり香を焚く』と吟じながら女一度に數瓣を攫んで香爐の裏になげ込む。『蠨蛸懸不搖、篆烟遶竹梁』と誦して髯ある男も、見て居る儘で拂はんともせぬ、蜘蛛も動かぬ。只風吹く每に少

しくゆれるのみてある。

『夢の話しを蜘蛛もきゝに來たのだろ』と丸い男が笑ふと、『さうぢや夢に書を活かす話しぢや。きゝたくば蜘蛛も聞け』と膝の上なる詩集を讀む氣もなしに開く。眼は文字の上に落れども瞳裏に映ずるも詩の國の事か、夢の國の事か。

『百二十間の廻廊があつて、百二十個の燈籠をつける。百二十間の廻廊に春の潮が寄せて、百二十個の燈籠が春風にまたゝく、朧の中、海の中には大きな華表が浮かばれぬ巨人の化物の如くに立つ。……………』

折から烈しき戸鈴の響がして何者か門口をあける。話し手はばたと話をやめる。殘るはちよと居ずまひを直す。誰も這入つて來た景色はない。『隣だ』と髯なしが云ふ。やがて澁蛇の目を開く音がして『又明晩』と若い女の聲がする。『必ず』と答へたのは男らしい。三人は無言の儘顔を見合せて微かに笑ふ。『あれは畫ぢやない、活きて居る』『あれを平面につゝめれば矢張り畫だ』『然しあの聲は？』『女は藤紫』『男は？』『さうさ』と判じかねて髯が女の方を向く。女は『緋』と賤しむ如く答へる。

『百二十間の廻廊に二百三十五枚の額が懸つて、其二百三十二枚目の額に書いてある美人の……』

『聲は黄色ですか茶色ですか』と女がきく。

『そんな單調な聲ぢやない。色には直せぬ聲ぢや。强いて云へば、ま、あなたの樣な聲かな』

『難有う』と云ふ女の眼の中には憂をこめて笑の光が漲ぎる。

此時いづくよりか二疋の蟻が這ひ出して一疋は女の膝の上に攀ぢ上る。恐らくは戸迷ひをしたものであらう、上がり詰めた上には獲物もなくて下り路をすら失ふた。女は驚ろいた様もなく、うろ〳〵する黒きものを、そと白き指で輕く拂ひ落す。落されたる拍手に、はたと他の一疋と高麗縁の上で出逢ふ。しばらくは首と首を合せて何かさゝやき合へる様であつたが、此度は女の方へは向はず、古伊萬里の菓子皿の端迄同行して、こゝで右と左へ分れる。三人の眼は期せずして二疋の蟻の上に落つる。髯なき男がやがて云ふ。

『八疊の座敷があつて、三人の客が坐はる。一人の女の膝へ一疋の蟻が上る。一疋の蟻が上つた美人の手は…………』

『白い、蟻は黑い』と髯がつける。三人が齊しく笑ふ。一疋の蟻は灰吹を上りつめて絶頂で何か思案して居る。殘るは運よく菓子器の中で葛餅に邂逅して嬉しさの餘りか、まご〳〵して居る氣合だ。

『其書にかいた美人が?』と女が又話を戻す。

『波さへ音もなき朧月夜に、ふと影がさしたと思へばいつの間にか動き出す。長く連なる廻廊を飛ぶにもあらず、踏むにもあらず、只影の儘にて動く。』

『顏は』と髯なしが尋ねる時、再び東隣りの合奏が聞え出す。一曲は疾くにやんで新たなる一曲を始めたと見える。餘り旨くはない。

『蜜を含んで針を吹く』と一人が評すると

『ビステキの化石を食はせるぞ』と一人が云ふ。

『造り花なら蘭麝でも焚き込めねばなるまい』是は女の申し分だ。三人が三樣の解釋をしたが、三樣共頗る解しにくい。

『珊瑚の枝は海の底、藥を飮んで毒を吐く輕薄の兒』と言ひかけて吾に歸りたる髯が『それ〳〵。合奏より夢の續きが肝心ぢや。――畫から拔けだした女の顏は……』と許りで口ごもる。

『描けども成らず、描けども成らず』と丸き男は調子をとりて輕く銀椀を叩く。葛餅を獲たる蟻は此響きに度を失して菓子椀の中を右左りへ馳け廻る。

『蟻の夢が醒めました』と女は夢を語る人に向つて云ふ。

『蟻の夢は葛餅か』と相手は高からぬ程に笑ふ。

『拔け出ぬか、拔け出ぬか』と頻りに菓子器を叩くは丸い男である。

『畫から女が拔け出るより、あなたが畫になる方が、やさしう御座んしよ』と女は又髯にきく。

『それは氣がつかなんだ、今度からは、こちが畫になりましよ』と男は平氣で答へる。

『蟻も葛餅にさへなれば、こんなに狼狽へんでも濟む事を』と丸い男は椀をうつ事をやめて、いつの間にやら葉卷を鷹揚にふかして居る。

五月雨に四尺伸びたる女竹の、手水鉢の上に蔽ひ重なりて、餘れる一二本は高く軒に逼れば、風誘ふたびに戸袋をすつて椽の上にもはら〳〵と所擇ばず緑りを滴らす。『あすこに畫がある』と葉卷の烟をぶ

つとそなたへ吹きやる。

床柱に懸けたる拂子の先には焚き殘る香の烟りが染み込んで、軸は若冲の蘆雁と見える。雁の數は七十三羽、蘆は固より數へ難い。籠ランプの灯を淺く受けて、深さ三尺の床なれば、古き畵のそれと見分けの付かぬ所に、あからさまならぬ趣がある。『こゝにも畵が出來る』と柱に靠れる人が振り向きながら眺める。

女は洗へる儘の黑髮を肩に流して、丸張りの絹團扇を輕く搖がせば、折々は鬢のあたりに、そよと亂るゝ雲の影、收まれば淡き眉の常よりは猶晴れやかに見える。櫻の花を碎いて織り込める頰の色に、春の夜の星を宿せる眼を涼しく見張りて『私も畵になりましようか』と云ふ。はきと分らねど白地に葛の葉を一面に崩して染め拔きたる浴衣の襟をこゝぞと正せば、暖かき大理石にて刻める如き頸筋が際立ちて男の心を惹く。

『其儘、其儘、其儘が名畵ぢやと』一人が云ふと

『動くと畵が崩れます』と一人が注意する。

『畵になるのも矢張り骨が折れます』と女は二人の眼を嬉しがらせうともせず、膝に乘せた右手をいきなり後ろへ廻はして體をどうと斜めに反らす。丈長き黑髮がきらりと灯を受けて、さら〳〵と靑疊に障る音さへ聞える。

『南無三、好事魔多し』と髯ある人が輕く膝頭を打つ。『刹那に千金を惜まず』と髯なき人が葉卷の飮み

殼を庭先へ拋きつける。隣りの合奏はいつしかやんで、樋を傳ふ雨點の音のみが高く響く。蚊遣火はいつの間にやら消えた。

『夜も大分更けた』

『ほとゝぎすも鳴かぬ』

『寐ましよか』

夢の話しはつい中途で流れた。三人は思ひ〳〵に臥床に入る。

三十分の後彼等は美くしき多くの人の……と云ふ句も忘れた。ク、ーと云ふ聲も忘れた。嵡を含んで針を吹く隣りの合奏も忘れた、蟻の灰吹を攀ぢ上つた事も、蓮の葉に下りた蜘蛛の事も忘れた。彼等は漸く太平に入る。

凡てを忘れ盡したる後女はわがうつくしき眼と、うつくしき髮の主である事を忘れた。一人の男は髯のある事を忘れた。他の一人は髯のない事を忘れた。彼等は益々太平である。

昔し阿修羅が帝釋天と戰つて敗れたときは、八萬四千の眷屬を領して藕絲孔中に入つて藏れたとある。維摩が方丈の室に法を聽ける大衆は千か萬か其數を忘れた。胡桃の裏に潜んで、われを盡大千世界の王とも思はんとはハムレットの述懷と記憶する。粟粒芥顆のうちに蒼天もある、大地もある。一生師に問ふて云ふ、分子は箸でつまめるものですかと。分子は暫く措く。天下は箸の端にかゝるのみならず、一たび掛け得れば、いつでも胃の中に收まるべきものである。

又思ふ百年は一年の如く、一年は一刻の如し。一刻を知れば正に人生を知る。日は東より出でゝ必ず西に入る。月は盈つればかくる。徒らに指を屈して白頭に到るものは、徒らに茫々たる時に身神を限らるゝを恨むに過ぎぬ。日月は欺くとも已れを欺くは智者とは云はれまい。一刻に一刻を加ふれば二刻と殖えるのみぢや。蜀川十様の錦、花を添へて、いくばくの色をか變ぜん。

八疊の座敷に髯のある人と、髯のない人と、涼しき眼の女が會して、斯の如く一夜を過した。彼等の一夜を描いたのは彼等の生涯を描いたのである。

何故三人が落ち合つた？　それは知らぬ。三人は如何なる身分と素性と性格を有する？　それも分らぬ。三人の言語動作を通じて一貫した事件が發展せぬ？　人生を書いたので小説をかいたのでないから仕方がない。なぜ三人とも一時に寐た？　三人とも一時に眠くなつたからである。

（三十八年七月二十六日）

滿州軍に寄す

丘山生

茲に滿州の大野を横切つて
大和民族の精髓百萬の士の動く
を見ずや

西暦一千九百五年の夏盛り

雄なれや壯なれや
人勇みて四馬躍り
砲車轣轆として幽谷に轟く
雲爲めに動いては四周に風を巻
き
塵雲天を衝いて紅霓起る
百里二百里たゞ見る冲天の旭日
旗
實にや斯る勇士を戴いて地も亦
誇とせん
戰ひては逐ひ逐ひては進む
皇軍向ふところ巨人虚空を拂ふ
がごと
バイカルの東又スラブの隻影な
からむ

魚は陸に上らず極の熊は白雪の
境を限る
スラブは當に烏拉耳の西に就く
可く
秀麗東亞の山河これ神州民族偉
靈の配するところ

今松花の流れ哈爾賓の野は近う
我を迎へて地人共に喜色あり
いで黑龍江に飲はん時はいざ
かの浦港の鐵塞又それ一蹴せん
のみ

戀草

正富汪洋

新井はつ
はつ〳〵に萌えてし草のたをや

かさ
青き髪やはき袖
やさまみに一め見られて
われそゝろ
戀の文そと寄せしに
これはいじらし
小さき手もて袖を振るかな
うす月夜師にはべりて
木犀の間に扇づかひしつゝ
このことをきこえまつれば
にこやかに笑ひたまひて
バイロンの憾無き子よ
ゲーテに似たる歌もうたへな

歌

尾上柴舟選

○　秋田華溪

あゝ夏は涼しきものと草にねて星をあふぎてまたも笑みつる

相寄るにすこしはせまき絹傘やたどり行く野の青あらしよき

なにとなく貴きかげの墓はれてたどりても入る夕ぐれの森

人の子の妻をいたはり地圖になき島の十年をさすらひたりき

○　長谷白眠

やま風や筧の水の音すみて月はながれぬ寫經のひとに

淡紅の睡蓮咲きし池のあさをむれて下り來る森の彩鳥

早船の日よけもりくる山鳥の啼くねにあぶぐ岩のうへの雲

武藏行く水の一筋草に消えてむらさき榮ゆる夕

日の筑波

○ 高瀬淡嶺

星のかげ波にをのゝく江のほとり憂ある身に鳴きよれよ鳥

足早の人よと呼びて闇の町おくれさきだつ姉いもとかな

○ 鷲尾美雲

わが村は松山負ひて海にそひて風のよき夜を螢おほき村

○ 佐久間霧江

斗酒辭せず劍また辭せず死をも辭せず男の子廿年は力ある年

心すむ夜半の濱邊のさまよひに砂と汐とのわび語り聞く

○ 丸茂天靈

老杉の雲にまじりて露にぬれてうぐひす啼くよ山八月を

○ 鹽谷芳谿

宵月の若葉をわたる青あらし山の一夜はゆめおほかりき

○ 岡田鯨洋

長き夜を小石抱きて暖くむれど雛ともならぬ秋のさびしさ

君におくる珊瑚みがきて日ねもすを戀唄うたふ島少女かな

○ 田中靜湖

露ながらひな罌粟添へて百合添へてまゐらす歌に答へませ君

うす月夜波なき磯に得し小貝ふれば神話をさゝやくごとし

花賣少女が鈴ふる聲にゆめさめて窓の芭蕉の露を見るかな

○ 塚田夕波

戀といはじ慕はしければなにとなう逢うても見たき夕月夜かな

君去にし後の思にこれや似る葉かげに小さき朝がほのはな（高木孤影兄に）

鐘の音に黄昏はやき秋の月や戀する人にうれひは長き

○ 西宮白菊

朝顔のしぼり床しみすだれまく袖におもたき青葉の風や

蚊遣火ののこり香もるゝ竹の窓ひとり經讀むはつ夏の人

光ある君がかひなに抱かれて青葉いくとせわがこひごろも

○　林漁村

月の夜は秋のやうなる風も吹きて里居の夏も十日となりぬ

わか鮎に撫子そへて籠さげて河原づたひに行くや伯母がり

鄙人と乳母が住所に歌まねて桃割結びてあらむ世なりし

ふるさとは笛吹川のかはしもの河原の月に蛇籠あむ里

繪扇に片頰を打ちてことぶらにやさしう叱る人をおもふかな

○

ふたゝびは歸らぬわれとほく〳〵蜩なく野友はいく里を

風の聲夕野の霧に消えゆきて月ほのじろう森の端出でぬ

○　中澤鼎介

團扇背に御山詣のつどひ行く夏野にあかき雲のみねかな

ひくう鳴る鐘に小鳥の歌やみて秋野の花に日はたそがるゝ

月の夜やひとり句思ふあみ竹の椽に糸瓜のかげながら曳く

○　村田愛美

しばしとて人に放ちし白鳩の歌はなれどもまだ歸り來ぬ

感じなば意氣には立たむ男の子なり歌はよめども人は戀ふれども

野の石に君と二人の夢さめてくらき灯(ともし)にたゞ泣かれぬる

朧夜を磯に笛ふく海士の子が興さながらの波のひゞきや

五年を師とも友とも呼ばしめてわれ笑ましめし村よ林よ　（故郷に別れむとして）

野分

漱石選

村十戸皆な鎖したる野分哉　黄村
野分やんで灯ともる家や山麓　同
野分する宵を早寝の隣かな　五選
野分やんで見れば南瓜の恙なき　同
野分やんで梟鳴くなり寺の森　浦亭
里の子は椎を拾ひに野分かな　同
貧僧の嚔して行く野分かな　葩人
覆面の馬上の人や朝野分　同
虎吼ゆる動物園の野分かな　泥雛
旅僧に宿乞はれたる野分かな　美雲
野分して屋根の南瓜のころげけり　天籟
どこ迄も銀杏散り行く野分かな　霞翠
戸をとぢて藁打つてきく野分哉　信一
石室に三日居とまる野分かな　四緑
國よりのたより事なき野分哉　白江
門に出て野分の後や語り合ふ　青龍
御手植の松をいたはる野分哉　英子
天窓や野分の雲のたゞならぬ　圓外
敵陣の騒きこゆる野分かな　翠藹

明星の飛びそに見ゆる野分哉　五習
野分して皆な地に伏す芒かな　蘆風
山門へ馬場の上吹く野分かな　三溪
松かさの雨戸をたゝく野分かな　可七
吹きつのる野分や鐘のたゞならぬ　簷月
畠番の屋根とばされし野分哉　亭雄生
野分して西瓜のあたまあらはなる　破蕉
立こめて野分の家の烟るなり　石羊生
發車する氣笛するどき野分哉　同
種瓜の落ちて割れたる野分哉　同
菰垂れを吹くや野分の渡船小屋　初聲
人媚る里正の門や野分跡　同
鷄犬の聲閑かさや野分晴　同

選者吟

寺借りて移り住む夜の野分哉
竹たてゝ芒を括る野分かな
馬曳いて裾野へかゝる野分哉
境内は杉の落葉の野分かな
飛ばされて案山子驚く野分哉
野分して惜しき熟柿の落ちてけり
轟々と野分の原の五本松

野分やんて蟬の諸聲夕ぐるゝ
出征の夫(ツマ)たよりなき野分哉
野分やんで裏の柿の木月かゝる

十　月分課題　蓼の花　九月廿八日限
十一月分課題　百舌鳥　十月十八日限
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事

夏窓句屑

中澤天籟

清水汲む登山の群や村の茶屋
浮草の淋しき花に小雨かな
玻璃皿に瓜むき出す女房哉
竹の葉のばさつく窓や夏の月
榛名山赤城の山や雲の峯
葭簾の軒にさがれる南瓜かな
鮒鮓や句會催す川の宿
風鈴や流に臨む料理店
日低き祠の鈴や閑古鳥
帆の影や雲流れ行く夏の海
三百の牧馬を吹くや夏の風
尼寺の鐘なりやみて閑古鳥
夏艸に赤牛ひとつかくれけり
大湖に一日うごかぬ雲の峯



評論

我全權亦侮るべからず

欅陰生

我國は最早や虚名に恐悦して實利を忘却する程初心(うぶ)なること能はず。露國は未だ實利を拋棄するも虚名を維持するの必要を感ずること切也。餘事は兎も角、此間の消息を悟了して巧みに樽俎に折衝する我全權の手腕亦決して侮るべからざる也。償金(インデムニテー)の語に代ふるに辨濟(レイムバースメント)の語を以てせるの一事已に吾人の言の誣ひざるを見るべきにあらずや。マルテンス博士をして其好むが儘に名稱を附せしめよ、ウヰッテ氏をして其意に從て大言せしめよ、我國は征服者(コンクエラー)にあらずして勝利者(ビクトール)

なりといはれ、露國は被征服者(コンクワード)にあらずして戰敗者(ヴァンキッシュド)なりと辨ぜしむるも、我主張にして貫徹し、彼の權利にして削減せられなば、畢竟我に於て痛痒何の關する所ぞ。我はたゞ實際に於て我主張を充分に貫徹し、彼の權利を充分に削減する能はざるを以て憂とすべき也。

今や媾和條件の大部分は已に議了せられ、殘す所僅かに二三の難問題のみ。此難問の解決の遲延するや、遂に米大統領ルーズヴエルトの出現を見る。ルーズヴエルトの出現は如何に最小の意味を以てするも所謂「温和なる干渉」に外ならざる也。世或は之を以て我全權の手倥(ぬかり)となし、戰勝國たる名譽を毀損するものなりと論ずるものあり。然れども吾人の見る所は之に反す。是れ露國の實利を拋棄するも虚名を維持せんとするの弱點に乘じ、我國の虚名を顧慮せすして實利を收拾せんとする目的を達する我全權の策畧に外ならずと信ずる也。

そもルーズヴエルトの人物と彼か日露兩國に對する態度の如何は今更に之を絮說するを須ゐず、ウキッテとの初會見に於て「足下は戰敗國の全權たるを忘るべからず」の一語を發したるを以て已に明知することを得べきなり。露國は前きに償金と土地割讓とを以て決して承諾すべからざる條件なりと傲語せり。故に今日の如き場合に於ても、直ちに日本の提議に屈從せんは、一は先きの傲語に對し、一は大露西亞國の國威を損ずべしといふ馬鹿らしき虚名心を毀損するの恐あり。夫れ故に彼は熱心に第三者の出現を待ちつゝありし也。第三者の爲めに止むを得ずといひて彼は其虚名を維持せんとする也。ルーズヴエルトの出現は彼の最も望みたる所たるに相違なし。是れ論者がルーズヴエルトの出現を以て露國の術中に陷れるものとする所以なるべし。然れども我全權がルーズヴエルトをして出現せしめたる決して露國の術中に陷りたるにあらず、實は露國の弱點の見え透きたれば、却て其裏を行きたる也。ルーズヴエルトの出現すると否とは決して我戰勝國たる名譽を損せずして、而かも一方には之が爲めに我主張を速かに貫徹し、或は破裂せんとする談判を危險な

く收了するの實利あること明々白々たり。是れ我全權も心窃かにルーズヴェルトの出現を希望したるべしと推せらるゝ所以なり。

吾人は素より我全權を以て一點の批難なきものとする程の雅量を有せず。然れども露國が飽くまでも虚名を維持せんとする弱點を利用し、及ぶべき丈け多く我實利を收拾せんとする一段に至つては、我全權の手腕亦決して侮るべからざるを見る也。

戸水博士の休職

本日(八月二十五日)の新聞紙の傳ふる所によれば、法學博士戸水寛人氏は、文官分限令第十一條第一項第四號によりて、東京帝國大學法科大學教授を休職せられたりといふ。其名の籍る所は如何なるにもせよ、博士休職の原因は恐らく、博士が文部省の訓令ありしに拘らず、時局に關する論説を公にするを憚らざりしによるなるべし。

吾人は博士がよく世界の大勢に明かにして其邦家を熱愛するの至誠、當局の屑々たる小政治に滿足する能はず、常に眼を宇内の大局に注ぎて邦家永遠の繁榮を來たすべき大規模の外交を推奬し、或は日露開戰を主唱し、或は媾和尚早を絶叫したるの態度が、無氣力にして學問の奴となり、無主義にして政府の僕となる今の多數の學者連と甚だ異る者あるを偉としたりし也。

夫れ小池は大魚の住するに適せず、博士が今の官省のために容れられざる偶々以て博士の偉大なるを證するに足るものあり、吾人は我帝國大學が學識該博にして心志高邁なる一教授を失へたるを深く悲むものなりと雖も、法學博士戸水寛人其人にありては、大學教授の肩書の有無の如き、素より一笑に附する價値だになかるべきを信ずるものなり。

然れども翻て思ふ。戸水博士を容るゝ能はざる我當局者の狹量寧ろ憫殺すべきにあらずや。

紛々録

美中天

○

人の思想智識は常に進歩すべきものだと思ふは非也、誠に最近に於ける政府當局者が爲す處を見れば、實に驚くばかり馬鹿らしき事のみ多し、曩に外務省が寺尾博士が時局に就いて論談したとか七博士等と會合したとかと云つて其官を罷めしむるや、今度は文部省で同じやうな下らない事由の下に戶水博士に休職を命じたり、而して一方警視廳では蚤取眼を以つて新聞雜誌の記事や繪畫に就いて、其道學先生的見解に依つて頻りに發行停止發賣禁止を命じつゝあり、かくては今後數年の後、我々は頭にチヨン髷を結ふべく命ぜらるゝに至らんことを恐る

○

東郷大將の令孃が流行の衣服を購ひたりとて、新聞紙は之を攻擊非難したり、我等その非難の何の理由に因つてなるやを知るに苦む、流行の衣服を纏へるもの豈に獨り大將の孃のみならんや、それを彼れ是れと云ひ給ふ足下等も亦常に首の廻らぬハイカラを以つて自ら任ずる底の人に非ずや、若し足下等をして政府當局の人たらしめば、多分絹布法度令を布き給ふべし、常に政府の狹量なのを責めつゝある人、知らず〳〵自ら矛盾に陷れるなり、また滑稽なりといふべし

○

傳ふ大山大將が書を政府に致して云く、若し償金十億圓以下ならば、我等は斷じて休戰の命を奉ぜずと、事の眞僞は知らねども、滿洲の曠野に晒されて、つぶさに艱苦を嘗めつゝある將士、誰か此思ひなからん。大山大將眞に此書を致したとせば、政府は大將に辭職を勸告するの勇氣ありや否や

○

媾和漸く成らんとす、或は云ふ償金十二億と、國民が豫望した半にも達せず、これて露國が愚圖〳〵云へば國民はよろしく大山大將の覺悟なかる可らず、我國

の戰爭に費したるものと之が爲めに損害を蒙りしものと豈に十二億や十五億ならんや、由來涙もろいは日本人のつねとは云ひながら、宋襄の仁の代りに日本の仁といふ古事を作らざらんとを要す

○

土用は全つぶれ、而して霖雨又霖雨、蠶業の不成績と米穀の不作と、之れを金にして平年より一億圓を減ずといふ、償金は値切られ、產物は取れず、よく〳〵今年は厄年と見えたり、而も國民の驕奢は日々に增長す、何が何だか我等には薩張り解し得られぬ也

○

女學生は可哀さうなり、今の世、二言目には女學生の墮落をいふ、道路式部さへ見れば墮落生といふ、恁うなつて見ると我等は女學生に多大の同情を寄するを禁ずる能はず、身を汚された上に惡く云はれる、女學生だつて堪つたものに非ず、知らず果に女學生が惡いか、或は之を誘ふ男學生等が惡いか、或は又之を敎育する敎育者が惡いか？

雜誌評判記（二）

△血來山人
○楞陰迂人

▲新小說と文藝倶樂部

△讀者の多いのと賣れ行のいゝのは文藝倶樂部に一步を讓らればならぬが、而も小說界のオーソリチーとしては新小說を推さればならぬ、文藝倶樂部か下町の方に賣れゝば、新小說は山の手に讀者を有するといつたやうなものだ、兎に角此兩雜誌は新作小說の重なるものを網羅するので、此兩雜誌の振不振は直に文壇の振不振を示すものといつて可いのだ、此頃兩雜誌とも餘り佳作を掲げないが、それは此兩雜誌の罪ではなくて、一體に文士の沈滯を意味するのだ、さて兩雜誌の品評をして見ると、新小說の小說はいつも流行を追ふといふかたちで、常時評判の佳い作家を捕へるとに努めて居る、文藝倶樂部の小說は此點に於て常に新小說に先んじられて居る、時文の如きは新小說の宙外、文藝倶樂部の桂月、いづれをそれと善惡の定めがつかぬが、讀むで多少面白味のあるのは桂月で、面白くはないが多少內容に實のあるのは宙外だ、桂月のは平凡な代り難がない、宙外は時々一議論を持ち出して文壇を賑はす代り味噌もつける、但し近來兩者とも甚だ振はぬ、桂月の振はないのは今に始めぬ事で、彼れは大に振つたためしもなければ又衰へたといふ事もない、いつも同じ筆で同じやうな事を書いて居る、宙外は昨今大に時文にだれ氣味を呈して來たといつて可い、其理由は彼が小說と時文とを竝べ書くのはどちらへも都合が惡いと思ひ出し、そして彼は小說の方に重さを置くやうになつたので自然時文の方がお留守になつたのであらう、最

少し文壇を騒がすやうにして貰ひたい、此頃の淋しさは又一入だ、それから雜錄では文藝倶樂部の方が面白く出來て居る、新小說は昨今深川が毎號のやうに書くのと泣菫が書くのとで多少活氣があるが、大塚甲山先生の新躰詩は撤回して欲しいものだ。次に新小說が懸賞小說のお株を文藝倶樂部の方に讓つたのは、これは文藝倶樂部の一進歩で新小說の失策であつた。尙兩雜誌に就いて每度感ずるのは、彼の雜錄以下が兩方ともいらぬ事だ、數十頁の紙をあんな下らぬ事に使用するは惜しいものだ、其代りに文藝の批評でもするか、又はそれだけ頁を減して安價くした方が可い

○一時は非常に熱心に小說雜誌を讀んだもんだが、此一二年は所謂俗物にでもなつた譯か、餘り讀みたいとも思はぬ、それでも時々讀まうかしらなど〻殊勝にも開き出して見ることもあるが、興が乘るのが少いので眼つぶしのやうな氣がしてならぬ、で我輩は餘程評判のよいものでなければ讀まぬことに極めて居る、所が一向評判のよいものが出て來ないのには少々弱る、止むを得ず新らしいのを讀んで見ると矢張り面白くない、で古い有名な作などを讀むが却て其方に面白いのがある。傑作はいつも〳〵出るものでもあるまいが近來の如く一つも出ない樣では情けないことである。新小說の卷頭に芝居の寫眞が掲げられるのと、文藝倶樂部の卷頭に美人の寫眞を載せて居るのを見ても此兩雜誌の特色が見ゆる、新小說には俗にしたくはないが俗にせねば賣れぬしといふ煩悶の影が見え、文藝倶樂部は悟つたもので大に俗になつて大に沽らうとする趣が見ゆる。吾輩は半俗でも大俗でもそんなことは頓着せぬけれども（頓着しても仕方がないから）兎に角せめて佳作といふべき程のものを一篇位づ〻見せて貰ひたいものだ、我輩兩雜誌に望む所只是れのみである。

▲新人

○基督教界の名士海老名彈正氏を主筆とするもので、宗教雜誌中の錚々たるものである。然し海老名氏其人の思想が漸々變化して來た故か雜誌全體の調子も餘程違つて來た樣に思ふ。海老名氏其人の思想の變化については或は御下賜金に感激した結果だともいひ、又或は世と共に移るに敏だからだともいふが、海老名氏ともいはる〻人がさう輕々しく思想を變化させる譯はあるまい、それには確かに氏の根抵たる人生觀に搖ぐべからざる自然の變化を生じて來たからであらうと思ふ、併し其理由は兎に角主筆其人の言論、雜誌全體の調子の變つて來たこと丈けは事實である。僕は氏の唱へて居る國家的若くは國民的とでも稱すべき基督教が果して基督教の本旨に協ふたものや否やを疑ふもの〻一人であるが、然し今は之を論ずるの場所でないから見合せる。又一方から考へて見ると基督教徒だからというて悉く基督の教へた通りに信じなければならぬといふ筈もあるまいし、又仝じ十二使徒でも自然其趨向に異同を生ずるのは止むを得ないのである、クロムウエルはクロムウエルの見を以て基督教徒たりトルストイはトルストイの見を以て基督教徒たりて基督教徒中必ずしも仝一の思想を有することが出來ぬのは殆んど怪しむを要しない。であるから海老名氏が國家的國民的といふ冠辭を有する信仰を有して居るからというて格別異とするに足らぬ如くも感ぜらる。只僕は徹頭徹尾眞摯にして自己の眞思想眞主義を發表する人を好み、曖昧模稜として其眞意の那邊にあるかを知られざる如くするものを憎むものである。海老名氏其人の思想が變化したなら、變化した思想を大膽に露骨に告白せよ、僕は寧ろ海老名氏に今少し明確なる告白をなさんことを希望するものである、主筆以外の手に成れる材料も多く新思想を鼓吹するもので、僅に宗教雜誌中の白眉を以て目すべきである。

△これは海老名氏が獨壇場で、此雜誌を買ふものは海老名氏を崇拜す

るもののやうだ、面白いからと云つて讀むものもなければ、新智識を得やうと思つて買ふものもない、只主筆其人を信じ其人の說敎を聞かんと思ふものが買つて讀むのだ、故に僕は此點に於て此雜誌を評する資格のないものといつて可い、ただ氏の論が餘り牛の涎的にたらく〳〵と引延ばされて、引緊まつた處がなく、一言にして盡くす處を數百言を費やし、人をして宗敎的信仰、天來的靈火を感ぜしめないのを惜しむばかりだ。

▲日本美術と光風

△美術院派と白馬會派との相違て、兩雜誌とも殆んど同じやうなものだ、日本美術の菊版形と、光風の四六二倍形の外に強いて相異つた點を擧ぐれば、日本美術の方は畵を見せるのを主とし、光風の方は聊か講義錄的である、從つて日本美術の寫眞版は他に比類なき鮮明を以つて誇り、光風は新進畵家や西洋畵家の論評等を面白く讀ませるのを以つて主として居る、尙兩雜誌の欠點を擧ぐれば、其編輯の體裁が雜然として居ることて、兩方とも引締まつた姿のない ことてある、古いだけに日本美術の方がいさゝか整つたやうに見ゆるが、光風の如きは編輯者が無經驗を露出してるやうに見える。

○日本美術と光風との比較は直ちに舊美術と新美術、舊思想と新思想との比較てある。直截にいへば繪畵界に於ける舊と新との比較てある。若し之を音樂界に譬ふれば尺八とヴアイオリン、笛とオルガンとの比較てある。若し之を小說界に比すれば露伴と蘆花、柳浪と尙江（木下）との比較てある。前者は長き〳〵歷史を其儘に相襲した趣があつて、後者には何か新しき者を求むる姿がある、前者の美は整うて靜かなるにある、後者の美は亂れて動いて居るにある、前者の弊は動もすれば陳滯腐爛に陷り、後者の弊は時とすると放縱亂脈に流るゝにある。前者は四十位の大人て後者は二十位の若者てある、前者は思慮周密てあるが少しく老衰しかけて居る、後者は疎大氣を負ふの弊はあるが發達の見込がある。彼には彼の長あり、此には此の長ありてあるから、僕は以上の概括的批評を加ふるのみに留めて、其の取捨選擇は一に讀者に委する、但し印刷の美麗にして鮮明なることは實に日本美術の特色て到底光風の及ぶ所にあらずてある。我輩は此點に於て實は日本美術の方を愛して居るものてある。

▲ほとゝぎすと卯杖

○ほとゝぎすと卯杖とを比較すると吾輩は矢張り光風と日本美術とを比較したと同一の結論に達するのてある。然しながらほとゝぎすと卯杖とは餘程段が違ふ、ほとゝぎすは遙かによき意味に於ての光風て、卯杖は遙かに惡しき意味に於ての日本美術てある。て光風と日本美術の比較は國見と浣岩の角力てあるが、このほとゝぎすと卯杖ては最早や常陸と太刀よりももつと段違ひて一寸角力になり兼れる樣に思ふ。然しほとゝぎすも子規が死んてから大分弱つたらしかつたが近來漱石といふ大力が入つたので再び非常の元氣に[illegible]ば[illegible]しい。兎に角兩者は瀟洒たる俳味を鼓吹する雜誌として讀書界になくてならぬものてある。

△ほとゝぎすは一時大に衰へんとする傾かあつた、之を挽回して、却つて其以前よりも盛んにしたのは漱石の文による、漱石の名が隆々として昇ると共に、ほとゝぎすの名も偏く人の注意を惹くやうになつた、而して漱石は俳人といふ資格よりは小說家といふ資格、否天才を有して居る人て、從つて其俳句はほとゝぎす派中ても有名のものてない、たゞたゞ其の俳味のある文章が、他に比類のない、我文壇に一新機軸を出したものてあるといふのてあるから、元來からいへばほとゝぎす派中の人てあつてほとゝぎすのものてない、そこてほとゝぎすは漱石をほとゝぎす

のものとなすべく、其躰裁等を一變して、在來の俳句專門を俳文專門とした、僕の如きは此改革には至つて贊成であるが、俳句專門の讀者は大に不平なのだ、尤もほとゝぎすの改革のやり方は餘り偏り過ぎて、在來主であつた俳句は、居候的に小隅の方に縮んで居る、讀者に不平の多いのも無理はない、そこへ暫らく休刊して居た卯杖といふのが再び起つて、俳句と俳文とを半々位に調和して俳句專門の人をも喜ばせ、又一方一般純文學の人の氣にも入るやうにした、尤も執筆者が重に純文學の小說美文にだづさはつて居る人々であるから、俳句專門にしたくても出來ぬ傾もあらうが、兎に角俳句を虐待せぬやうに出來て居る、今ほとゝぎすと卯杖とを比べて見ると、表紙を除くの外は誰でも卯杖の方へ手を出しさうに見える、卯杖の方が面白さうに出來て居るのだ、けれども新店であるばかりでなく、ほとゝぎすの漱石に對すべきものが卯杖にはない、よしんばあつてもあれ程人の注意を惹くものがない、つまり客を引く一枚看板なるものがない、でどうしてもほとゝぎすには及ぶ事が出來ぬ、確にほとゝぎすは今漱石一人によりて名聲を有して居るのだ、文士の勢力も亦恐ろしい哉ではないか。

▲活動之日本と實業之日本

○實業家と實業家たらんとする人を讀者にして居ることは兩者共に一てある。又捉へて居る問題の實際的なることや、身を立て產を造るの方法を敎ふることや、長い文にはチョイ／＼と見出しをつけて讀み易くすること等總て實際的に出來て居るのも兩者共に一である。で其筆者の名を見せず、其の表裝の色を示さず、內容ばかりで讀ませたら一寸兩者の區別がわかるまいと思はるゝ程よく似寄つて居る。將來の日本は實に益ゝ實業をして隆盛ならしめざるべからざる運命を有して居る、我輩は我國民をして實利實益の外に眼のなき人間たらしむることは望まぬのであるが、さりとて實業を蔑み虛業にのみ走るの徒は尙更らに之を排する。て我輩は此兩者の如きを大に擴張して出來得べくんばたゞ立身出世の外に人格思想等の修養をも進め、以て完全なる國民を送るやうにしたいものと思ふ。

△世の中は漸々賢くなつて來た、他の長所を取つて己れの短所を補ふといふ古い格言をそのまゝ實行したのが活動の日本だ、實業の日本も之れには青くなつたらう、何しろ己れの長所は全部活動の日本取にられて了つたのだ、こんな例は他に幾許もある、活動の日本ばかりを責める可からず、世にはこれ以上の惡戱をする雜誌がある、併も實業の日本の方が古いだけに整つても居るし、名も知れて居るから實業の日本それ自身には活動の日本の爲めに餘り痛痒も感ぜぬだらう、けれども活動の日本はまだ編輯の具合などが亂雜ではあるが大に活氣に富んで、以後益ゝ新機軸を出して活動しやうといふ風が見えるが、實業の日本は舊態を墨守して敢て今日以上を望まぬとふかたちだ、これは實業の日本の爲めに惜しまざるを得ない。

○豫告

山路愛山氏
樋口龍峽氏
三上參次氏

右三氏は次號の誌上に寄稿の約あり。

文藝時觀

天才出づべし 傑作出づべし

美中天

（一）

△大天才は何故出ないたらう？ 大傑作は何故出來ないだらう？ とは、明治文壇に對して多くの人の言ふ處である、思ふ處である、感ずる處である、歎す處である。

△それは無理はない、抑も日本に文學なるものがあつて以來、明治今日の時代程文學の盛んな事はないのである、回顧すれば明治の文學（玆には重に小説）の漸く盛んに赴きかけたのは、明治二十年以後の事で、爾來年を閲みすること僅々二十年であるが、而も此僅々二十年間に輩出した作家は名あるものだけでも數十人、其公にされた作物は數百に上つて居る、かくの如き短歳月の間に於て、かくの如き多數の作家と作物とを出したのは、實に我國に於て空前であるばかりでなく、泰西に於てすらも甚だ稀有の事である。

△然り、實に數の上から云へば、世界の文壇に對しても決して耻しくない、立派なものだといふに憚らない、而も此無慮數十の作家の中、數百の作物の中に果して大文豪と稱すべきものがあるであらうか、果して大傑作と稱すべきものがあるであらうか、對比を泰西に取るは餘りに饒山過ぎる、單に之を我國の文學史に見ても、果して源氏物語と優劣を爭ふに足るべきものの、近松の世話淨瑠璃と並べ稱する程の文學上の價値あるものが出たであらうか、何人も此等の間に對して否と答ふるに躊躇せぬであらう、まして世界の文壇に押し出し得られるものに至つては、敢て絕無といつて可からうと思ふ。

△勿論大作だの傑作だのといふべきものが、さう矢鱈に出る筈のものでない、百年に一つも或は覺束ないとは東西を通じて相場が定つて居る、而も日本に文

學あつて以來の盛時といはれたる今日にして、一つや二つ際立つて秀れた作が出ない筈はない、之を東西の文學史に就いて見ても、其盛んであるといはれた時代には必ず一二の大天才大傑作が出て居る、英國文學の花といはれたエリサベス朝にはスペンセルあり、シエークスピアあり、ミルトンあり、我國でも元祿以後近松あり、西鶴あり、馬琴ありて、兎に角下らないものがあつたと共に、今日迄尚其の天才たり傑作たる點に於て傳へられて居るものが出て居つた、然るに、數十の作家を有し、數百の作物を有する明治文壇に、これぞと云ふ傑作を出さないのは、甚だ心得ぬ事である、明治文壇に傑作がないといつて人々の慨歎して居るのも茲のことで、それに吾輩の無理からぬと雷同するのも茲のことである。

（二）

△併しながら翻つて吾輩は大に考へた、考へた揚句(あげく)二條の光明を認めた、今まで明治文壇に向つて失望して居た吾輩は、こゝに樂觀説を唱へるやうになつた、文壇は悲觀すべきものでない！或人は今の作家を怠弱だと罵り、老衰したと憤るが、決してさうでない、今傑作が出ないからと云つて、さうけなしたものぢやないのである。

△恁うだ、第一西洋の小説を讀み、西洋の新智識を得、それに啓發されて、今の新形(しんがた)の小説が作られるやうになつたといふのは事實である、それから後漸く二十年しか經つて居ない、日本在來の思想、形式と、舶來の思想形式とを調和して、新たなる小説をかたちづくるには非常の研究を要する、到底短歲月の間に一人や二人の腕で出來上るものでないのである、云はゞ明治二十年から今日迄は其研究時代である、紅葉でも逍遙でも、露伴でも柳浪でも、皆これが研究をした、現にしつゝあるのである、大工が大建築をする時には必らず雛形を作る、明治文壇は今雛形を作りつゝあるので、大作傑作の現はれるのは今日以後でなければならぬ、今の所謂大家と呼ばれて居る作家の手に依つてそれが見られるか、或は新たに天才の出現があつて今

日までに出來た雛形を土臺として大傑作を出すか、何れにしても二十年來の研究の大結果があるに相違ないと信ずる、日本文學史空前の盛况を呈して居る明治文壇は、今は近き將來の大作傑作の豫備をして居るのて、作家が增し、作物が殖へて來るのは、やがて研究の大結果が近づきつゝあるのだと考へる、而してその傾向は現在あると信ずる。

（三）

△以上は吾輩の樂觀說の第一條である、第二條は恁うだ、そも〳〵現今大家と稱へられて居る文士の年輩は幾歲位だと思ふか？　露伴、逍遙、柳浪の諸氏が最も年長者の部に屬して居るのに、未た四十の上を越すや越さず、降つて天外鏡花宙外春雨蘆花風葉等の如きに至つては、たつた此頃まで小供であつた人々である、然らは則ち我明治文壇の齡の甚だ若きと共に、其文士も亦至つて若年である。

△此頃さる雜誌に浮田和民氏の青年の理想といふ論があつた、其論中に青年といふものゝ年齡に定義を下して、三十歲より五十歲を青年と見るとあつた、吾輩も此定義には同感である、十七八より二十三四歲までを青年と心得て居た日本人には異樣な感がするであらう、けれども生理上及び社會上の地位からいへば、三十や四十ではまだ青年たるを免れないのである。

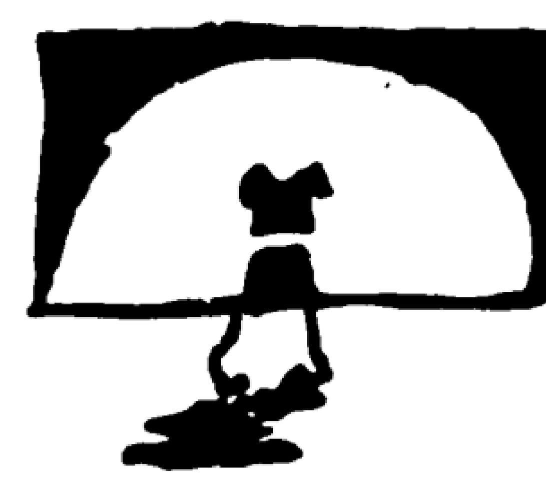
△されは今の大家と呼はるゝ文士も、其年齡から云へは青年時代にある人て、從つて其の活動すべき時代も今日以後である、人間四十に達せざれは學問上の智識も社會上の經驗も完く出來るものでないとは古い論であるか、吾輩は古の天才の作を讀むで常に此感を新らしくする、先づ手早い處がシエーキスピアでも、彼の四大悲劇は多く四十以後に成つた、而して四十以後に於て彼の天才は益々發輝されて居る、近松でもさうである、彼が世話物の傑作を書いたのは四十以後で、四十以前の作では殆んど見るに至るべきものはないのである、觀察の深刻なる、結構の巧妙なる、筆致の神通自在なるとは沙翁でも巢林子でも四十以後である、其他（詩人及び一二の除外例は別として）古來の作家は

多くは四十以後に於て傑作を書いて居る、されは文士の眞の技倆を表はすのは四十歳以後であるといふ、事は之を通則と見て可からうと思ふ。

△だけれども人は云つた、紅葉でも一葉でも、彼等は若くして故人となつたのは寧ろ倖である、彼等が若し五十六十を長生したら、終には味噌を附けて了ふだらう、と吾輩は決してさうは思はぬ、吾輩は彼等が眞の技倆を現はさないで空しくなつたのを千古の恨とする。

△即ち明治の文士はまだ若年である、青年である此點に於て吾輩は多大の望を彼等作家の前途に屬して可い、特に、その上吾輩の意を強うするのは、明治作家のこれまでの成蹟が極めて好良であつたといふ事である、取り立て丶傑作といふ程のものはないにしろ、四十未滿の作家の筆として、其の作物と古來の天才が四十以前の作とを比較して、毫も遜色のないといふ事である。誠に近松の時代物と、紅葉なり露伴なり、或は一葉なり柳浪なりの作と比較して見るに、吾輩は後者の方が優つて居ても劣りはせぬと思ふ、時代といふ事を度外に置いて、單に文學上の價値のみに就いて論じた日には近松が四十以前の作は遙に明治現代の作物の或物に劣つて居る、即ち明治の文士は若年の割合には發達して居る、此勢を以つて進んだなら、彼等が今後出さんとする大作傑作は恐らく古今を通して第一等に位すべきものであらう、よしんばそれ程にはなくとも、少くも傑作と稱すべきものでなくてはならぬ。

△要するに明治文壇は日尙淺き割合には發達して居る、而して其文士は尙青年である割合には上達して居る、然らば即ち我明治文壇の前途は實に多望なものでいし、又今日の作家が其圓熟の筆を揮つて大傑作を著すのも甚だ遠からぬ事であると信ずる、吾輩はかゝる樂觀說を持して、我文壇に謳歌し靜かに時の至るを待つて居やう。



漫評

現今 基督教界の人物

(一) 内村鑑三

八面生

基督教も明治の初年よりは非常の大變遷をなして、洒脱の日本人は最早執念くこの教徒を迫害するを止めるのみか、寧ろ尊敬するに至り、又信者の方でも次第に西洋臭味を離れ、日本の風習に適すそやうに勉めて、今では大抵の教徒が他の未信者と伍して、際立つた差異を認め難くなつた。二三十年前には頑として社會の風潮に抵抗し、竹槍や鐵拳の雨なす中に自若として神の福音を説き、そゞろに西洋の殉者の高風を忍ばしめた教界の先覺連も、移り氣の日本人氣質を先天的に受けたればか寄る年波に勇氣も失せたか、續々現世的になりつゝある。リバイバルを説いた金森通倫氏が相場師になつたり、同志社の勇將市原盛宏氏が横濱市長になつたり、當年花岡山の聖徒が金儲や地位に汲々として昔ながらの信仰を持つてゐる人は少い。或はこれを以て其の人の思想の進歩と見るべきかは知らねど、執拗を以て特色とせる基督教氣質とは非常に異つてゐるのは事實だ。而して玆に注目すべきは關西と關東とによりて、信者の態度に差異あることで、關西の人は多く變節し或は教理の解釋を變じ、關東の人の多くは終始一貫してゐることだ、新神學に移つたりユニテリアンになるのは關西の方が多い、植村正久、内村鑑三、本多庸一等舊式の教徒は關東人である。

西洋で峻嚴壯重の文學は多く基督教の思潮から生じてゐる。舊約の諸篇、ダンテの聖劇、ミルトンの失樂園、ブラウニングの諸詩篇等古今の大作は純然たる基督教の產物で、其の他の大文學も幾分はこの教に負う所がある、然し日本には未だ一篇の基督教的大詩篇がないのみならず、詩人らしい人も少い。中に其の傾向のある人は先覺中では植村内村兩氏のみであらう。内村鑑三氏は氏自身に愛讀せるダンテカーライル等も同類の詩的天才のある日本文壇にも例なき特色を有つてゐる。感情の銳敏にして、想像力の豐富なる主我の念

強き凡てを具象的に觀るの力ある。吾人は彼れに接する毎にダンデはこんな人であつたらうかと思ふ。氏はダンテの地獄の卷三十四篇を讀んで、恐懼措く能はず、三十四夜眠らなかつたと話してゐたが、幾分か誇張的であらうが、全く虛言ではあるまい。ダンテの鋭敏なる神經は幻影をあり〳〵と見て書いたから、あれ程具象的に描かれ意志一方のミルトンの失樂園の惡魔が抽象的なると異なつてゐるのであるが、內村氏も植村氏などゝ異なつて、かゝる幻影を見る丈けの神經がある。他の牧師などの敎理を說くのは抽象的で漠然としてゐるが、內村氏の地理を說き、歷史を講じ、聖書古物學を演じ、時事問題を論ずるや、基督敎の威力が手に執る如く浮て現はれ、さながら人間の血管の如く万物に生命を與へてゐるやうに見へる。かゝる印象を與ふる技能は日本全國この人一人といつてもよい。只氏不幸にして日本文學に通せず、又文學よりも科學を專攻したるを以て、大詩篇が出來ぬのだ、若し氏にして、中世の伊太利に生まれヴアジルやシセロに精通し、詩歌の思想發表の唯一の機關たるを知らば、優にデビナコメデアを物し得たのである。吾人氏の雜著「基督敎徒の慰め」「求安錄」「小なる日本」等を讀む每に、不完全なる日本語の智識にてよくもかくパワーのある文章を書いたかと驚かれる。一事物に對し自巳一箇の考へにて、其の奥の底まで觀破して、具象的に說明をなし得る人を天才とすれば、內村氏は日本稀有の天才である。世人或は氏をダンテに比するを不倫となすかも知れぬが、それは昔を尙び今を卑しむ人間通有の弊から起るので、吾人は內村氏の行爲言論について、厭やな感をし、滑稽的に思ふことがあるかダンテとてもカーライルとても同樣であらう。ダンテの如き天才を放逐したのを國人の罪に歸すれども、彼れが常に苦虫かみ潰したやうな顏をして、會ふ人每に不快の感を抱かされたのは事實だ。猶太思潮に浸染した天才は、偏狹で厭ふべき點が多いので、舊約の豫言者を始め、皆さうである。內村氏は日本人種だけにまだしも一面に快活の氣質がある。而して氏も歲と共に又蓄財の增すにつれて、次第に溫和になりつゝあり、日淸戰爭の時は大にこれを推稱しながら、露西亞との戰爭は絕對的にこれを非難する如くダンテ的特色も日に減じつゝあり。洒脫なる日本人はとても信仰の人を迫害して漂浪貧賤の中に一生を送らしめ得ないのである。獨立雜誌以前に地獄の苦を味ひ、「聖書の硏究」時代にて淨罪界を經「新希

望」にて樂園に達したりとすれば、あまりに淺薄なれとこれ時世と國風の然らしむる所で、却て天才內村氏の爲には幸福であらう。

道德家といひ宗敎家といひ、冷靜にこれを觀察すれは、隨分馬鹿らしい點が多いが、內村氏などは殊にこの種の逸話に富む。或は旅行して宿屋へ茶代をやらないで冷遇されて、癇癪を起したり、部下の者と金錢上の悶着より分裂したり、寛宥の精神を稱へながら實弟と喧嘩をしたり、自分と少しでも意見の異る者は惡魔の如く罵り、世間では其れ程にも思はぬを、非常に迫害されたつもりで戰慄したり、自己を尊敬して手紙でも送らうなら、直ちにそれを誠實の人間と思ひ込み、自己の考則ち神の思召なりと確信するなど、人間通有の事とはいひながら天才たる氏には其れが一層際立つて、あまりに正直過ぎるのに可笑しくなる。しかし是鑑三氏たる所以、植村氏の意志の强固を以て勝てるに對し、氏は情のインテンシチーを以て勝るその偏狹なるは揆を一にす。

鬼面魔語

醉美生

○媾和問題はもう片がつきさうになつて來たから、今更ら彼れ此れ論じても餘り益があるまい。で今后に論壇に花を咲かすべきものは日英攻守同盟問題であらうと思ふ。

○今日まで該問題を論じた中で最も注目すべきものは「二六」の同盟問題（日南）と「戰時畫報」の日英攻守同盟の利害（龍溪）とであらう。日南氏は極力之を非とし、龍溪氏は熱心に之を是として居る。此二つは先づ此問題を是非したる代表的のものである。心ある人の一讀を望みたい。

○日英攻守同盟といふのは穩當でないから日英防守同盟としたなど丶書いた新聞もあつたが、無論未だ締結せられた譯ではあるまい。國家の運命を左右する箇樣な大問題を國民の輿論——少くとも聰明なる者の論議も省みず、政府の獨斷で默々の間に極めてはたまつたものでない。あれは防守とした方がよからうといふ意味であつたらうと思ふ。

○扨日本が假りに英國と攻守同盟を締結して、印度方面に事あるときは十万の陸兵を出すことゝすれば、其れを印度まで送る費用は實に莫大なさうだ、先づ二千噸の汽船で僅かに五百人の兵隊と其使用品としか送れないさうだから十万の兵士を送るには四十万噸の汽船が入る譯だ、然るに日本には汽船の噸數が增大した今日でも三十何万噸しかない。夫れに必らず之を保護する軍艦も行かねばならぬ、日本はどうして今日そんなことが出來るものかといふた人があつた。

○又或人はそんなことは心配する必要はない。日本から兵士を送るこ

とさへ承諾すれば英國の汽船や軍艦が來てドン〳〵之を運んで行くといふた。

○假りに攻守同盟を締結したとすれば、其内容――即ち互に補助する艦數や兵數――を局外者に洩らしては餘り益がない譯だ。ぢやというて知らせなければ國民の怨みを買ふ。政府も從分厄介ぢやらうと思ふ。

○今后日本と英國と孰れが早く他國と開戰するぢやらう、是れが先づ第一に研究すべき問題ではあるまいか。

○我輩はどうも英國の方が先きに開戰する――否開戰せざるべからずと思ふ。即ち我國が第一に英國の爲めに骨を折る役目に當らればなるまいかと思ふ。

○併しながら龍溪の論にあつた如く、若し我國が英國を助けぬ爲めに露國が印度をとつて印度洋に出て、支那の三方を後より席捲して來るべき將來を考へると、今日損をしても明日の儲けを待たればならぬやうな氣もする。兎に角我輩は世界の大勢に明かな人がドシ〳〵此問題を論議して、國家百年の繁榮を計られんことを希望する。

○或る英國人が大山大將に向ていふには日本はどうも感心だ、梅干と握飯で戰爭をするから荷物も經費も不足で敏捷に働くことが出來る、我英國などは到底其眞似は出來ぬとひどく日本を賞讃したさうぢや。竹越三叉氏此事を評して、日本は梅干と握飯とでも戰爭の出來るのはエライに相違ない、然し之は決して戰爭の理想、我國の理想ではない。我輩はシャンペンを飲んでビスケットを食うて、さうして立派な戰爭が出來る程の位置に進まねばならぬと思ふといはれたが最もの議論と思ふ。

○福本日南氏の話に我國の人は倫敦タイムスといへばバイブルの如く、ラムスダウン卿の演説といへば天啓の如く思うて居るには困るといはれた。

○同氏又曰く、露國は醉人の元氣よいやうなもので餘り恐るゝに足らぬが、眞に恐るべきは米國である、彼は澤山滋養分を食うて自然に肥つて來る青年のやうなものだ。

○ものゝ餘りよくわからぬ人に本などを讀み聞かせると、一番の六つかしい所をウムヽヽというてさも〳〵感服したやうな振りをするものぢや。

○たヾ中正というても、極端と極端とを考へてから得たる中正でなければ平凡取るに足らぬものぢや。

○餘り好きでない異性のものに惚れられても、まんざら惡い心持のせぬのは、人間がどうしても種族繼承を思ひ切れぬが爲めである。即ち自分が好きな異性と添うことが出來ぬ時には餘り好きでないものとでも種族を繼承させねばならぬからである。

○若し世界にたヾ二人の男女よりなければ如何に醜男醜女たるを問はず、遂に睦ましくなるものたるを知れ。

○物心がついて來た頃の男女が、若し或異性の人の噂をするとを好む風が見えたなら、其噂の善惡たるに拘らず其人に思召があるものと知れ。

○心平かならざるとき、男は多く仰ぎ、女は多く俯く。

○心中を以て四圍の事情に壓迫せられて止むを得ざるに出てたものゝみと思ふのは非である。熱烈なる戀愛の理想は身も魂も永遠に結合して熔けて一體となつて離れざるにある。性交の如き、夫婦の如き未だ熱烈なる戀愛の理想を實現するの力がない。是れ普通人が見て以て何の不足もあるまいとする程の兩性でも時として心中せんかとの氣を起す所以である。

○戀愛の極致は性交にありとするものは未だ共に心中の眞味を語ること能はずと思ふ。

社會

都市雜觀

夢蝶庵主

研究して趣味の多いのは、人間と、社會。そして社會の中でも、趣味の多いのは、その組み立てが複雜してゐる丈け其れ丈け、都會の方が面白ろ味が多いやうに思はれる。イデ日本の都會は、如何な風に爲つてゐるか、雨の降る徒然の儘、少しく調べて見やう。

一　大都市の勢力集注

大きい者は、ます〱大きく爲るといふ事は、人間も、都市も、變つたとが無い。人間の大きく爲るといふのは、富力の增大を言つたのであるが、都市に於ても、その人々と、事業と、富力とは、矢張大きい都市は、年一年と、增大して參ゐる。我國に於ては、大阪市が先づ最も著しい例證。

試に、日清戰役當時の大阪市と、今日の大阪市との戶數及人口の增加を見るに、二十七年には、戶數九萬四千二百四十四、人口、四十八萬二千三百〇八、であつたのに、一昨三十六年には、戶數は二十三萬千四百九十五、約三倍の增加を示し、人口は九十八萬八千七百二十八、即ち二倍强の增加を現はしてゐる。之は未見の事、大阪朝日新聞記者三宅盤氏が、僕の依囑に應じて報じ來りしものであるから、信ずべき數字であらうと思ふが、戶數の增加と、人口の增加と伴つて居らぬのは、なんだか妙にも思はれる。案ずるに、之は市役所の戶籍簿に據つた者で、他より大阪に入り込み來りし人數は、數字の上に現はれて居らぬのであらう。て、實際の人口增加は、此の數字以上で、比例を取れば、寧ろ戶數の增加よりも多からうと僕は考へて居る。

理屈は兎も角も、此の大阪市の膨脹を見て、僕は其の半面に、政治的都市の衰滅しゆく模樣が、あり〱と眼に映つて參るのが不思議である。大阪市の膨脹は、正面より見れば、無論、商工業の發達を示してゐるのであるが、右の如く戶數及人口の增加してゐるのは、大阪市其れ自身の自然的發達といふよりは、寧ろ他より移住し來つた社會的原因に基ひたものであらうではないか。

二　政治的都市の衰滅

明治二年頃の徳川武鑑を見ると、百二萬二千七百石を領してゐた金澤藩を筆頭として、大略二百五十餘の城下であつた。今、四十萬以上の大藩を擧ぐれば、

金澤――鹿兒島――仙臺――名古屋――和歌山――熊本――福岡――廣島

といふ順に從つてゐる。單に石高に依りて、その繁否を定むるのは輕躁であらうが、全體から言へば、まア石高の多い處は、人口も、戸數も多かつたやうである。が、今日、都市としての位置は、果して此の順序で、繁華を致してゐるであらうかと言へば、何人も其樣であると答ふるとはできまい。今日年々進歩を示してゐるのは、名古屋と福岡と、それに廣島で、他は金澤を初め、鹿兒島でも、仙臺でも、和歌山でも、熊本でも、遲々として、著しき進歩を示さぬ。否、金澤市の如き、他の商工的都市が、年々人口を加へてゐるにも拘らず、仙臺市の如きは、往日に比ぶると、却て其の人口は減じてゐる。

四十萬以下の中藩に至ると、尚、續々と著しい例證が出て參ゐる。左に讀者の參考迄に、十萬石以上の中藩を擧ぐると、

萩、佐賀、水戸、鳥取、津、福井、岡山、徳島、彥根、高知、久留米、秋田、米澤、松江、前橋、松山、郡山、小倉、高田、姫路、高松、柳河、小田原、佐倉、福山、小濱、淀、二本松、宇和島、弘前、富山、大聖寺、大垣、松代、忍、津山、新發田、中津、棚倉、

等であるが、此中、往日の面目を留めてゐるのは、ほんの四五ケ所。他は悉く衰滅に就いてゐる。中村樂天(二六新聞記者)といふ男は、徒歩旅行の途、萩に到りて、旨い觀察を試みた、曰く『木槿や、枳殼の破垣と、傾いた半ば毀れた家が殘つて居るばかり、荒廢を極めて亡國の感を生ずる、里を離れし草の屋に二人の外は虫の聲……有明の消へて嬉しい窓の月、と萩の宿屋で吹いてゐたのを聞いたが、草の屋に蟲の聲、幽靈でも出さうなのが、今日の萩である』と、樂天の柄に似合はず、旨いシャレを言つた。今日、旅行を試みて、往日の城下に足を停むるものは、何人といへども、樂天と感を同ふするであらう。

そして此の中都市で、今日繁榮を續けてゐるのは、福井、岡山、久留米、米澤、前橋、松山、小倉、姫路、高松、弘前、富山位のものであるが、それも姫路の如

き、弘前の如きは、師團の在るので、漸やくにして景氣を續いてゐるのだ。否、その他の繁榮を致してゐる都市でも、矢張縣廳だの何だのといふ官廳的建築物あるが爲に、繁榮を續けてゐるのが多い、前橋の如き、松山の如きも、正に大に此の氣味はあり。

三　優勝の都市は那處

曩日の城下――政治的原因よりして人口を集めてゐた都會は、右の如く大抵衰頽に就いてゐる。然らば我國に於て、今日優勝の位置を收めてゐるのは、如何なる都市であるか、と言ふに、僕の見る所を以てすれば、左の都會は、優勝的都會といつて良からうと考へる。東京や、大阪の如き暫らく措き、先づ人口二萬以上の都會を擧ぐれば、

名古屋、神戸、横濱、長崎、廣島、福岡、富山、岡山、福井、小樽、赤間關、佐世保、札幌、山形、長野、門司、小倉、四日市、丸龜、横須賀、和庄、足利、尾道、福島、

などは優勝的都會である。此中、神戸、横濱、長崎、福岡、小樽、福井、赤間關、門司、足利等は、専ら商工業の爲に、繁榮を加へたのであるが、廣島、山形、長崎、尾道、福島等は、商工の意味は、含んで居らぬとは言はぬが、寧ろ交通の便宜上、地勢といふ自然の上より繁榮を致してゐるので、佐世保、札幌、丸龜、横須賀、和庄は、海軍鎮守府、或は陸軍師團其の他官省の創設に依りて隆盛を致せる新式の城下！　名古屋、富山、岡山などは、如上の理由を等分に具備せる間の小都會か。

四　舊き商工地と新しき商工地

商工業に依りて成れる産業都會といふ中にも、舊るき商工の地と、新らしき商工の地とは、歴然と區別がある。此の相違を最も明らかに示してゐるのは、海峽を隔てゝ相對してゐる赤間關と門司。

門司市は、十年前頃迄は、僅に六七百しか人家の無かつた微々たる一部落であつたが今は人口三萬。馬關海峽に船を留め、對岸の門司を見ると、碧瓦鱗次、汽笛聞こへ、煤煙上ぼりて、その壯景凄まじなんど言ふばかりも無い。然るに赤間關は、依然として、舊式建物、軒を列べて、問屋仲買の類幅を利かせ、市民は、五穀祭に妙齢の女子を大道藝人に落として、市中をしやぎり廻らせて、喜んで居る。彼は新進、是は舊守、彼は石炭の都會、之は米穀の都會、門司市は亜米利加、赤間關は清國。左様だ、門司と赤間關と相對してゐ

るのは、支那の北京と、亞米利加の紐育と向ひ合つてゐるやうで、馬關海峽を隔てゝ、爰に新舊兩都會の模型を示してゐるやうにも思はれる。一方の眼には舊文明、他方の眼には新文明、恰も舊演劇と新演劇とを一處に見て居るやうな體。

新しき產業的都會と、舊るき產業的都會とは、右のやうな相違がある。で、商工の都會といつても、舊るき商工の地は、繁華といふ中にも、おのづから褪色のあるのは、爭はれぬ。高岡、四日市、酒田などを見ると、ます／＼この感を深くする。嘗て手島精一氏は、福井市と高岡市とを比較し、その都會粧に相違があるのは、一は內地的工業地で、他は海外輸出の工業地であるからだ、と解釋して居られたやうだが、實にその通りである。故に、今後の產業的都會でも、內地向製造品に拘泥し、舊守に甘んじてゐる都市は、いくら商工の地だといつても、曩日の政治的都會——城下が衰滅したやうに、前途の發達は覺束ない。

五　大都會と小都會

我國にては、大都會と、小都會とは、如何なる比例を以て、發達して居るか、手許に材料が乏しいので、まだ充分調査が屆いて居らぬが、獨乙の如きは、左の割合を以て發達してゐる。

	大都會	中都會	小都會	田舍都會
千八百七十一年	四・八	七・七	一一・二	一二・四
千八百八十年	七・二	八・九	一二・六	一二・七
千八百九十年	一一・四	九・三	一一・五	一〇・三
千八百九十五年	一三・九二	一〇・六八	一三・六二	一二・〇〇
千九百年	一六・一八	一二・六二	一三・四六	一二・〇九

といふ割合に進んでゐる。之を見ると、大都會ほど增殖力は激しいやうに見ゆる。即ち、千八百七十一年には、獨乙全國の人口は、田舍地方の百分の六三・九に對し、小都會の人口は一一・二、中都會は七・七、大都會は四・八であつたのが、千八百九十年には田舍地方の人口は減じて五七・五と爲つたのに、小都會は一一・五、中都會は九・三、そして大都會は百分の十一と四に上ぼり、更に千九百年には、田舍の人口はます／＼減じて、四五・六五といふ憐れむべき位置に下れるに、小都會は一三・四六、中都會は一二・六二、大都會は獨乙全人口の百分の十六と十八を占むるに至つて居るではないか。

之は高野法學博士が、特に僕の爲に調べて呉れたのであるから、無論信憑すべき數字である。で、之を以て見ると、今日歐洲に於て國家としても社會としても

最も活動してゐる獨乙の趨勢が判るてはないか。右の統計て、田舍の年一年に衰へゆくのが徴せられると共に、小都會よりも、大都會の發達が激甚であるのも諒つて參ゐる。唯、中都會は、大都會は固より、小都會よりも、その發達が著しく無いのは如何したものであらう。詩人的言い草のやうであるが、僕は此の異例に對して、幽玄なる意味が含まれてゐるやうに覺えてゐる。フ、フン。

知らず、我國に於ける都市發達の割合は、如何なる程度に在りや、之を全國人口に比較し、更に大中小と區別を置いて調べて見ると、大に趣味多き事實を得るてあらうと思ふが、稿を改めて、異日、讀者に質すとあるべし。因に、前記の大都會といふのは、人口十萬以上、中都會は、二萬以上十萬以下、小都會は五千以上二萬以下、田舍都會(ランドスタット)といふのは、二千以上五千以下の町邑。

軍事と廣島

丁字樓

◉今回の戰役に於て、最も有効なるもの丶一に、下瀬火藥を數ふるは、何人も異議なき所なるべし、而して此火藥の發明者たる、海軍技師下瀬雅允氏は、いづくの人ぞ。

◉日本海の海戰に於て、東郷大將の帷幄に參じ、神算鬼謀、その間に中り、我が艦隊をして人間以上の功を奏せしむるに、與つて力ありしは、其參謀長たる、海軍少將加藤友三郎氏なり、氏は嘗て上村艦隊の參謀長として、多く畫策する所ありしが、後島村速雄氏の後を継ぎて、東郷大將の參謀長とはなれり、蓋し我が海軍部内有數の偉材なり、而して此良將軍はいづくの人ぞ。

◉旅順攻圍軍中に於て、最も有力なる打擊を敵軍に加へ、彼をして震慴せしめたるものは重砲隊なり、開城の曉に至り、敵將ステッセルをして、重砲の恐ろ可きを言ひ、且その隊長の何人なるかを問はしめたるは、尚世人の記臆に新なる所なり、この威名赫灼たりし隊長、陸軍少將豐島陽藏氏はいづくの人ぞ。

◉露國との國交斷絶したりし時、早く已に旅順を衝きて、敵膽を奪ひし我が艦隊の快捷なる動作は、世人の齊しく壯快となす所、「吉野」は其艦列に加はりてより以後、大小幾海戰に、偉功を奏せしが、圖らずも旅順港外、奇禍に罹りて沈沒の不幸に遭ひ、悲しき運命を以て終れり、時に同艦長海軍大佐佐伯閑氏が、艦と運命を同じうして、之に殉ずるありしは、徒らに生を偷んで、恥を忍ばんとする、泰西武將の夢にだに想ひ到らざるところ、實に壯烈鬼神を泣かしむる者あり、而して此佐伯大佐は、いづくの人ぞ。

◉此他陸軍には、少將藤井包聰氏あり、同村山邦彦氏あり、海軍には少將中尾雄氏あり、主計總監村上敬次郎氏あり、また皆今回の戰役には、直接若くは間接に、功勞ある人なり、尚余の知らざる人にして、陸海軍中重要の位地を占むる人もあらん、而して所謂少英雄に至りては、もし

より數へ盡す可からず、廣島の人材を出せるも、斯の如く其れ多し、世は已に斯る地方的感情を以て、人材の多少を云爲す可き世に非ざれども、然も是等の先覺が、其地方に及ぼす感化力は、甚だ大なる者ありて、山て以て後進を激勵するの功鮮しとせず、乃ち知る、下瀨、加藤、野島、佐伯の諸氏の如きは、後進學生中、之を欽慕せる者、必らず多かる可きを。

⊙斯く記し來れば、余は勢ひ日清戰役當時の鬼將軍、佐藤正氏其人の事に、想ひ及ばずんばあらず、氏の如きは、啻に廣島の生產したる、傑出の異材なるのみならず、實に日本の生產したる異材なり、余は殆んど「余の理想に適へる武將」として、其人を敬愛す、氏にして夫の獨眼龍將軍(山地中將)を傳したるが如きは、殊に我意を得たる者なり、憾むらくば將軍隻脚を失ひて、其屠龍搏虎の大鐵腕を揮ふに由なく、空しく滿洲の天を睥睨す、余は切に同感に堪へざる者あり。

⊙此の如く、多く人材を生產せる廣島は、果して如何なる處ぞ、石川丈山云く、

　藝陽天府之國也、而名蹟淸勝、山川錘秀、海陸盡美之地也。

所謂天府之國なるが故に、毛利氏はこゝに築けり、所謂海陸盡美之饒地なるが故に、賴氏等多く詩篇を遺せり。

⊙嘗て春草堂詩鈔を讀みしに、杏坪の詩句に曰く、

　江郭隨處雜耕漁、生計雖殊同里閭、結網燈前織吉貝、養蠔田側種甘藷。

蓋し藝南沿海の諸村は、農漁相襍まり、眞に如斯の狀態に於てあるなり、而して如斯の狀態より、最もよく發達せるを廣島市となす、然れども、這は是れ都市發達の順序に付て言ふのみ、其地は則ち、四邊の郡村と與に、正に天府之國をなし、又海陸盡美之饒地として、廣島の如きを控へたり、人材の生產する、豈に是等自然の感化に負ふ所なしとせんや。

⊙廣島の地たる、人情敦厚なりと謂ふ可からず、風俗亦卑野ならざるに非ざるなり、否、余が如き上方贅六の眼より観るも、厭ふ可き通性の、其士民に存する者なきに非ざるも、大いなる廣島人は、些の地方的感化を被らず、全く彼自身大いなる者あり、乃ち又地方的習性の、之を累するあらず、たゞ時として、「廣島的に大いなる者」も亦之あり、余は或者に於て、正に其然るを認むるも、多くの場合に於て、「大いなる人材は、彼自身に於て大なり、」前揭の諸氏の如きは、余未だ親しく其人に接せざるも、必らずや又「彼自身に於て大いなる者」ならん、佐藤將軍の如き、尤も然り、彼は廣島の地方的習性より、全く超脫せる者なり。

⊙それ廣島は、如上の人材を生產して、この軍事に、貢獻せる處尠からざるのみならず、其地は毎に軍事上、至大至重の關係を有するなり。

⊙請ふ余をして、少しく是地に付て語らしめよ、廣島市の東方一里許にして、安藝郡府中村あり、埃宮の遺蹟は、同村の如何に久しき、史的因緣を存する所なるかを思はしむ、古事記に依れば、「其地(日向國の宇沙)より遷移して、筑紫之岡田宮に、一年坐しましき、亦其國より上幸でまして、阿岐國之多祁理宮に、七年坐しましき」とあり、埃宮は即ち此多祁理宮にして、今多家神社と稱す、實に是れ皇祖御駐蹕の地、余嘗て岡本臨輔翁と共に、こゝに詣で、其遺蹟を拜し、

　いにしへの宮居の跡を拜めは
　いよ〳〵たかし君の御稜威は

と吟みしとあり、此めてたき遺跡あり、後世廣島が、軍事上重要の地區となりし所以の者、また因緣なしと謂ふべからず。

⊙おもふに皇祖御東征の時、府中村は尚海岸近き所にありしならんが、廣島は遙か後世に至りて成れりしところ、是地今を距ると三百有餘年前に於ては、僅に五箇之庄の名の下に、點々部落をなせしのみにて、また

正に農漁相蒐まりし地なり、然るに今日に於ては商賈運營、儼として一都市を成し、戸數四萬八百八戸、人口拾參萬六百貳拾四人を有す、三百年間人力の蓄積は、斯く顯著なる功績を奏す、豈にまた驚く可きにあらずや。

◎此發達の跡を尋ぬる者は、必らず先づ中國の覇者たりし毛利元就の嫡孫輝元が、廣島に築城したりし事に想ひ到らずんばあらず、輝元の築城は、實に史上の一大事實にして、廣島の開市は、須らく此一大事實と關聯して、紀念せらる可き者なり。

◎既に然り、輝元は之を開市の恩人なりと謂ふも不可なし、然れども廣島市は、輝元を紀念す可き何物をも有せず、余は廣島市に於て、此恩人を紀念す可き、適當の物なきを憾とする者なり。

◎たゞ廣島城あり、彼自身之を永久の紀念として遺せり、廣島城は、又の名を鯉城と云ひ、又三十六鱗城と云ひ、泰擧基とも云へり、輝元の後は、福島正則在城し、次に淺野幸長及其子孫の居城となりて、以て廢藩置縣の時に及べり、而して此城や、城廓年々に古び行けども、松樹歲々に新たなる緑りを呈はし、風到れば梢頭聲あるを聞き、霧墜つれば地上音あるを覺え、中國の雄藩たりし昔より、日本の强兵團(第五師團)たる今に至る迄の歷史を、沈々不語の中に、證明せるあるを觀る、而して時代は漸々益々此城をして崇高偉大ならしめたり、日淸戰役、北淸事變、日露戰役等に對して、此城が如何なる發動をなすの、機關たりしかは、追し何人も臆想を絕つと能はざる所、この城は、今や此等「大陸との交涉」、「列國との共同的動作」、「歐洲最强國との軍事的競爭」に於て、多く愉快なる聯想をなさしむる、一大紀念物となり來れり、而して之を思ふ每に、余は毛利輝元の功績を、沒し去るに忍びざるを思ふ。

◎廣島市には、已に此一大紀念物あり、而して其一部は、實に日淸戰役の際、政機軍機の出たりし大本營なりき、又市の東郊比治山には、陸軍墓地ありて、幾多英雄の骨を埋むるあり、北淸事變の時、佛朗西共和國の爲に斃れたりし、戰死者の墳墓もまた之あり、特に又、市の南端たる宇品港は、前後三回の戰役に、至大至重の關係を有するのみならず、其築港を、苦心慘憺の中に經營したりし、千田貞曉氏其人の爲せし所は、稀に有る堅忍刻苦の美德を、顯はせる者なり。

◉此の如く、人間のENERGYを、特に多く軍事の上に觀るべきものに富める廣島市は、なほ豐太閤の法名によりて呼ばるゝ名利國泰寺を有し、又太閤當年の雄圖を追念せしむべき、其韓半島武的發展の助勢者、淺野長政を祀り、且當事の戰利品を藏する饒津神社を有し、程近き牛田村には、安國寺惠瓊が、韓國の木材もて造りし不動院を控へたり、是等の社寺は、多くの史的事實と史的人物とを、觀者の胸中に眼前に活現するあり、余は名所案内記を改刷して、讀者に示さんとする者にあらざれば、今一々之を列擧せざるも、斯類のもの尙太だ多し、しかも斯の如きは、他の地方に於ても、之を求め得ざるにあらず、但最近の史實(ヒストリカルファクト)と聯擧して、大いに後世子孫を興奮せしむべき、廣島城及宇品港の如き、他に多く其比ひを見ざるなり、況んや今日に於ては、猶前顯數氏の如き人材の各々其特技を持して、活動せるあるをや、學童の如き小國民の爲に被る感化は、決して尠少に非ざるなり。

◉余は每歲四月廿八日(大纛還幸の日)及九月十五日(大纛廣島に進轉の日)に於て、昧爽軍歌を高唱しつゝ、市人の深き眠りを破りて、舊大本營に行進し、若くは比治山上に戰死者を弔はんとて、攀登し到る學童の、聲の勇ましく、勢ひの剛きを、見もし聞もして、其前途の多望なるに深く望みを屬する者なり、想ふに廣島の地は、永く軍事と至要の關係を有す可し、廣島の人また恐らくば軍事に於て、成功する所多からん、

若し夫れ刺撃の、與よりし江田島よりするものは、別に篇を改めて、之を記さん、與とは鎮守府なり、江田島とは海軍兵學校なり。（終）

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲大疑問　本郷　解剖學者

或醫師の御調べに依りますると、日本の御婦人方の御尻は一體は西洋婦人のそれに比して余程發達したるそふで、即ち換言すれは御尻が大きいと云ふ譯てす、日本ては小さい方がよいと云ひ、西洋ては大きい方がよいと云ふのに。外見上許りてなく生理上にも一大關係を有する此反對にして且奇なる現象を生じたのは如何なる理由て御座いませうか、御婦人方の内て御教へ下さる方は御座いますまいか

▲非旅行説　芝區　面壁生

旅行は極めて樂しく面白く善い事て、何でも旅行をすれば一段嬉しくてもなる樣な大業な事を云ふ人があるが僕は大反對だ、生活の狀態が不規則に成て、睡眠時間食事時間食物氣候はまるて違ふ、金がかゝる、時日を費やす、家庭團欒の面白さはなく毎日知らぬ他人の中て始終用心して居なければならぬ、樂しい所か少しも身體も精神も休まる暇がない、だから古來旅は憂いもの辛らいものとちやんと相場が極まつてるのに近頃何んとか云て飛び出す人の氣が知れぬて

▲迷信市民　谷中　文明紳士

甚し、東京市民程迷信的な人間は余り類がないれ、何所かの稲荷神社へ奉納の鳥居が何間とか何百間とか連續してる事や、今ては田舍ても流行らない天理教などが、所謂文明の都なる東京にて猖盛んなるを見れば、市民の迷信の度が明らかに分かるてはないか

▲憐むべき學者　牛込矢來　快樂居士

世間て肉體的快樂は下等て精神的快樂が上等だと云ふ説がある、併し是は絶對的に眞理だとは思はれない、人間が精神と肉體から出來てる以上何も優劣がある筈はない、つまり如斯説があるのは所謂學者とか云はれる先生方が、自分の體面上及び財政上から肉體的快樂に耽ける事が出來ないので、地位を利用して嫉妬的に之を攻撃してかゝる奇怪なる説を生ぜしめたのだ、憐むべきは此快樂の眞味を樂しみ能ざる與太學者先生方

▲憚るべき事　本郷　細心生

便所を明ら樣に便所と云はずに憚りと云ふのは、人前てかゝる事を云ふは失禮だからそふ云ふので即ち正に人前て口にするのは大に憚るべき事だのだ、然るに此の憚るべき言を衆人稠座の中ても立派な席上ても一向憚らずに紳士淑女諸君が明ら樣に憚りは何所らですなど云ふのは甚だ憚からざる所爲てよくない、願くは我廿世紀の文明人士なる紳士淑女令息令孃の諸君よ、此憚るべき言語は宜しく以て大に憚て貰ひたいれ

▲大々的俳優？　荏原郡　馬足山人

田舍の人は淳朴だとか正直だとかに大變賞める人があるが大間違だ、彼等は表面上朴訥らしい親切らしい假面を戴て極めて巧に人目をごまかしてるのだ、裏は中々そんな者てなく、金を欲しがつて其癖しみつたれて愚闇て物の道理が分からない癖に押が強く、圖々しくつてのろ〳〵して血の環りの遲い奴等許りだ、夫が生馬の目を拔くと迄云はれる都人士の前に化の皮を現はさずに淳朴らしく正直らしく見せる彼等の手腕は本職

の俳優と雖も迚も及ぶまい

▲路上觀　　お茶の水　重瞳子

女が、殊に若い女が路上で出逢ふと、其内着物か容姿か劣た方は、他の自分より優れた方を必ずしも羨ましそふに振り返て見るものだ、見らるゝ方は見て呉れがしに高慢顔につんと澄して通るのだ、尤も海老茶式部とか仰しやる女の學生さんは、どちらでも自分の方が豪らいと云ふ顔付て、お前の方で己の方を見ろと互に澄し振り返らずに御通り遊ばされる

▲安心立命　　牛込　津田窓緑

安心立命といふのは別にむづかしいものでもない、趣味!!この趣味が安心立命の基である、即はち、自ら或る業に趣味をもつて、その津々たる趣味を樂しんでその業に從ふのである。てあるから、終身安心して、その業にむかひ研究をなして益々發達せんことを期するのである、

▲王政復古の色情狂

豐多摩郡草花村　夕郎生

余が村に所謂色情狂なるものあり彼や世の常の色情狂とは異なり嘗己に六十路に垂んとするなり

何たる心的作用の發現か遽からず地下七尺に白骨たらんとする老翁は翕然として青春の血燃ゆるが如き世の所謂若衆とは豹變せしなり夜に入ればパナマ帽に面を覆ひ宛然若衆になりすまして界限のドーターを索見す爲めに名聲宇内否村内に高し故に余は彼を王政復古の色情狂といふとかメか借問す世の心理學者以て如何となす



都々逸道德學

飛燕客

五

富貴は浮べる雲の如し、安ぞ浮雲の富を以て人生の最大快樂なりと云ふを得んや、然り吾人は、富貴以上の快樂を有す、これを戀愛と云ふ、戀愛の目的に對しては、富貴は更に何等の用なきなり、之れを擲ち之れを毀ちて、更に意とせざるなり、都々逸の神は曰く

手鍋さげても苦にせまいもの
賤が伏家も花が咲く

金のなる木を羨しやふりきつて
罪となる木にからみつく

錦を責、鳳を燒き、七珍萬寶に身をかざるとも何かせん、金殿玉樓唯一夕の夢のみ、迷へる者よ何を苦んでか、日れもす夜もすがら、徒らに財を貯ひ寶を集めんとはする、財寶は人生の最大快樂を買ひ得ると思ふか、將た又最大快樂なりと思ふか、愛もなく情もなき、唯白粉臭き形骸を買ひ得て、金の力の大なるを思ふが如き、野獸的の愚者は誠に禍なる

かな、寶眷婦の冷き形骸を抱かんよりは、寧ろ京人形の可憐を抱くに若かず、人形は飯も食はず、帶もりだらざればなり、苟も愛を解し情を知る者、何ぞかゝる冷々淡々の女を以て快樂を味ひ得んや、相愛し相想ひ、相慕ひ相戀ふあらば、朝に鹿を聞き夕にましらを友とする奥山住居、茅屋の軒の傾ける中にも、至高の香契妙の花、快樂の福音に喜ぶあり、大厦高閣美衣美食に飽くとも、猶この快樂に餓ひて泣くものあるを見ずや、アナクレオンも亦富貴を罵つて曰く、戰爭は黄金を好むより起ると

財寶然り、王位高官豈又然らざるの理あらんや、例のアナクレオンは叫て曰く、我れ王位の如きは空なりとなす、ペルシヤ王の其富强、我其王位も羨まず、只願ふ所は薔薇の花の我額を覆ひ、其香の馥郁たらんこと之れなりと

其初めアナクレオンが希望は富貴なりき、名譽なりき、高官なりき、而かも彼は終に之れ等を以て、人類の理性を滿足せしむべきに非らざるを知るや、遂に愛情の人となれり、彼は又其初め、道德屋の口吻を學びて、人類の自然性を壓せんとせり、而かもその不可なるを知るや、遂に愛情の人となれり、然り情愛の前には、王位も高官も、到底敵することを能はざるなり、都々逸に曰く

月の影さす賤が家なれど
　　水も洩さぬ好いた中
いやなお方の男侍よりも
　　好いたお方と旅乞食

然るに世界には高位高官を以て、之れよりもエラキありがたきものなしと思ひ、我より以下の者は、悉く下卑下劣と罵つて、したり顔なる大馬鹿ものあり、彼等は殆んど度しがたき者也、都々逸の神は、これ等大たわけを罵り、其不心得をさとして曰く

富士の高根に降るのも雪よ
　　賤が伏家の雪も雪

又曰く

井戸の蛙とそしらばそしれ
　　花も散りこむ月もさす

豈これ深遠なる哲學に非らずや

六

吾人が呼んで最大快樂なりと云ふ所のもの、即ち愛情の前には、何物も敵することなし、王位然り、高官然り、財寶然り、名譽然り、遂に生命をも擲ちて之れに降伏せんとするものなり、曰く

お前はんの心一とつて此剃刀が
　　喉へゆくやら眉毛やら

此所に至りて快樂は極まれりと云ふべし

生命は萬物の根源にして、宇宙の萬物何物も生命に及ぶ能はずとなし、徒らに長命をのみ冀ふもの偶々之れあり、これ其根底を誤れるものには非らざるべきか、如何となれば、生命の長からんを冀ふは、即ち最大快樂を得んとするに外ならざるなり、未だ其最大快樂の福音を禱らざるものゝ、煩悶苦慮、終に生命の長からんを欲するなり、而して長き生命の中に於て、最大快樂を得んと欲するなり、彼の生命あつての物種子と云ひ、畠あつての芋種子と云ふ、皆快樂に餓ひて死なんとずるが如き、淺墓なるものを誡しめしのみ、而して長き間に於て、其渇望を充せよと云ふにあり、これを以て直ちに、遮二無二長命せよとなすは、誤解の甚だしきものに非らずや、今死を以て最大快樂を得るの塲に臨まんか、何

すれぞ夫れ生命を惜しまんや、我は快樂なる短き生命を喜ぶ　憂苦なる長き生命を嫌厭するものなり、アナクレオンも亦我と稍相似たる思想を有せりき、曰く、我れ古代の長壽者ん羨まず、年長して足よろめき、心に恐れを懐くものとなることを願はざるなり、一小時の快樂は無味單調の永久よりも勝れるなりと、彼のバイロンも亦此の如き思想を有したり、曰く、我れ枯れ凋む薔薇たらんよりも寧ろ摘まれて摧くるものとならんと、これ其云ひ願しかたに於て、多少異る所ありと雖ども、竟畢するに瓦となりて全からんを恥るものなり、玉となりて碎けんの主義なるなり、玉となりて碎くるとは、人類の理性の爲めに死するなり、是大快樂の爲めに死するなり、即ち其快樂の爲めには敢て生命をも顧みざるなり、都々逸に曰く、

なまじ斯うして氣をもむよりも
　一層死んだがましかいな

と、なまじ斯うしてとは何ぞ、無味單調にしての義なり、平々凡々徒らに長命を冀ふの馬鹿者を罵りしの言ならざるなきなからんや

七

莊子曰く、哀は心の死より大なるは莫し、而して形の死之れに次ぐと、凡そ天の掩ふ處、地の載する處悲むべく、憂ふべく、泣くべく、叫ふべきこと多しと雖とも、戀愛の福音に接せざる程悲むべきものなく、憂ふべきものなく、慘憺たるべきものなし、彼等は自然性の快樂を味ふこと能はざればなり、即ち心の死なればなり、都々逸の神はこの悲むべき心情を歌つて曰く、

月も宿らず汲む人もなし
　木の葉隱れの谷の水

と、豈憐むべからずや、豈悲むべからずや、彼等は終に人類の理性を發揚する能はざるなり、人類の自然性を發らざるべからざるなり、人生の悲事これに過ぐるものあらんや、世を味氣なく思ひ、人生をはかなみ、世をかこち世を咀ひ、終に一種精神病的の不具者となる、又無理ならぬ事なりとす、

之れに次いて悲むべきは失戀なり、失戀は前者と同じく、たま／＼人をして狂的病者となすことあり、彼の泰西の天才を見よ、詩人を見よ、大抵は之れが爲めに泣き、之れが爲めに叫び、これが爲めに悲み、之れが爲めに死す、これ亦決して無理ならぬ事なり、如何となれば、快樂の誕園より放逐して、再び平凡の境に追ひおとされたればなり、等しく心の死なればなり、都々逸に曰く

たのしい榮たれの黄金の色の
　園を追はれし狂ひ蝶

人あり來つて、我に汝の生命を與へよ然らずんば汝の心より戀を去れと云はゞ、我は終に其人の刃の下に斃れん、我生命を彼に與へんなり、戀なうして生きんは、死なんよりもなか／＼つらかるべければなり、

八

詩に云はずや、昨日親友今日敵と、人情の輕薄蓋しかくの如きものあり、都々逸も亦人類の輕薄を罵つて曰く

器次第でまゝなる水も
　給具のさしよて替る色

杜甫亦曰く飜手作雲覆手雨、紛々輕薄何須數と、人情の輕薄これ今更ならぬ事なり、孔孟が仁義を說き、基督が愛を說く、畢竟するにこの惡風を改めんがためなり、而かも成功せるや否や、吾人は今此處に其斷案を

與ふるの必要を認めず、然りと雖とも、所謂外交政略とか、八方美人とか、これ目下最も勢力あるは事實なりとす、正直なるものはこれを痴愚と呼び、目から鼻へ抜ける奸物は、これを才士とあがめ奉る、娑婆の人情、義理も糸瓜も何のその、ピンからキリまで算盤玉にはじき出す恐ろしさ、地獄といへばこわさうなれど、恐らくこの娑婆の恐ろしきには若かぬなるべし

世人結交須黄金、黄金不多交不深、假令然諾暫相許、終是悠々行路心とこれ守錢奴的社會を罵倒せしものなり、都々逸に曰く

　　娑も切らうが小指も切らう

　　　　金がなくなりや手も切らう

と何ぞ夫鋒鋩の鋭きや

都々逸の神は又人間の嘘八百にして、信ずべからざるを罵つて曰く

　　板一枚下は地獄のあの船よりも

　　　　舌の二枚が恐ろしい

何ぞ其言の痛快なるや

二枚の舌を使ふもの悉く天國に入ること能はずとなさば、天國に入るものよく幾人かある、

甚だしいかな嗚呼、

　　金のある内や情夫とも云ふが

　　　　なくなりや虻とも思やせぬ

これをしも唯に賣色女の云艸とのみ思ふ可からず、曰く八字髯、曰く金時計　曰く高帽、曰く二重廻し、世間一般に呼んで紳士となし、或は貴人となすもの、概れ皆之れならざるなきに非らずや、これ上流社會なり、而かも思へ、上の爲す處下之れに傚ふ、下流社會豈又然らざるを得んや、ベサンは終に生存競爭の虎の卷なり、引かけしものは利巧なり、引かゝりしものは間抜なり、豈甚だしからずや

新刊批評

▲梁川文集

網島梁川著
日高有隣堂發行

今の世に頭腦を以て文章を書く人は多い。又心情を以て文章を書く人も少くはない。けれども頭腦と心情とを調和さした性格夫自身を以て文章を書く人は極めて寥々たるものである。若し寥々といふ形容詞を以て、古來いひふるした曉の星の數をあらはすものとすれば梁川氏の如きは確かに其中に於て曉明星の地位を占めて居るものである。其きらびやかなる光、其澄める色、其清き姿、たゞ之が爲めにすがすがしき朝の空の榮あるが如く、梁川氏の文章ありて初めて我文壇の光彩ありといふも溢美であるまいと信ずる。如何なる問題に對しても理を極め、情を盡して何處までも穩健着實ならんとする態度、何か疑問が生ずると「如何ににがき涙を嘗めても、之を解釋し了はらぬ限り、一種の安心は得られぬ」といふ眞摯熱誠の精神、卷中到る處に溢れて殆んど一篇の閑文字駄文字を見ぬのである。

氏の人生に對するや、徹頭徹尾眞面目である、眞摯である。決して一點の曖昧模稜と、一毫の輕浮誤魔化しとを許さぬ。これ氏が此書卷頭の一篇「福翁百話を讀む」に於て福翁百話を賞して「一篇達人の處世經也」といひ、福澤翁を評して

『福澤氏は學者にあらず、論客にあらず、はた政治家にもあらず、社會の先覺者なり、教育家なり、否むしろ僧正なり、説教者なり。社會は氏の寺院にして、宗旨は西洋文明宗也。「何かの機會に觸れて

世俗の先導者たらんこと我輩の願ふ所也」の一語、以て氏の抱負と天職とを知るべし。世にも氏の如く熱心に、氣長く、十年一日、西洋文明宗を奉ずるもの復とありや』

といひ、「其常識の豐富にして比較的圓滿なる、其實際的直觀力の鋭くして透れる、眼を大局の上に馳せて優に人生を瞰おろしたる」の偉なる嘆美すると同時に、福澤翁が一面「人生を以て一場の遊戲と觀ぜよ」と勸むる方便主義を難じ、これ人に自ら欺くを敎へ、僞善矯飾を勸むるものなりと罵り、「此の如き人生觀はたゞ機敏圓轉なる當世一流の社交的才子を生ずるには足らんも、そは到底主義あり熱誠ある眞骨頭の人を生ずるに足らざるなり」と論じ、終に「福翁百話一篇、要するに吾人心靈の深處を煖らす一味天上の火を缺きたり」と評したるを見ても明かに知らるゝことである。

又氏が他人の主義、主張、著述、作物を批評するの態度に至つては轉た今日の批評家なるものを赧顏せしむるに足るものがある。其疑問を呈出し、其誤謬を論難する前に、氏は必ず公平に對手の眞意を確かめ、充分なる同情を拂うて對手の論旨を明かにする。時とすると氏は對手自身てさへ明示し能はざりし對手の美點をも擧げて之を賞讚する、恰かも「他人有レ心、予忖二度之一」の風がある。かゝる寛大の解釋を以てするも終に同意すること能はざるに至て氏は初めて之を論難する。論難して剴爽淋身、殆んど完膚なく、到底物の役にも立たぬが如き敵手であつても氏は決して之を唾棄するの無情を敢てするものでない。尙其長所、美所を拾うて切られながらも有難涙に咽ぶ樣にして之を葬る。氏が木村鷹太郎氏の「國家主義」や「東西倫理學史」を評した文の如きは全く此趣が見ゆる。

日本の倫理道德學者といふものゝ多數は、冷やかなる理性をのみ重んじて感情を度外視するの結果、到底活ける人生の歸趣と、深き人生の眞味とを悟ることが出來ず、從て其說く所乾燥無味、全く實世間と風馬牛なるものが少くない。又日本の文學美術家と稱するものゝ多數は、狂へるが如き感情をのみ尊んで理性を冷眼視するの結果、到底高き人生の理想と、永き人生の進步とを知ることが出來ず、從て其いふ所放恣邪僻、殆んど實生活と沒交涉なるものが少くない。然るに氏の議論は氏の性格夫自身を以て書いたもので　溫かなる感情と、明かなる理性とがよく調和融合して自ら人生の羅針盤となり、人間の指導者となるのである。加ふるに其文字の妥當にして趣味深く、一も誇張浮華に流るゝの嫌なき、其文體の整正にして奧ゆかしく、決して破格亂雜に陷るの弊なき、共に氏獨得の擅場てあつて、殆んど他人の追從を容さゞるものがある。吾人は倫理、宗敎、文學、美術を論じた文章家て、氏の敵手たるものを求むれば、今日まで唯一人の故樗牛氏あるのみと思ふ。而かも此兩氏は各々其長と短とを有して實に好一對の對照をなして居る。豪放雄健、筆舞ひ墨飛ぶは樗牛氏の文てある。溫雅摯實、格正しく調整へるは梁川氏の文てある。彼には蒼海風荒れて狂瀾怒濤岩を嚙み岸を打つの槪がある。此には長江日晴れて靜波緩流草を潤ふし、砂を洗ふの趣がある。彼は飽くまでも尊大にして時に極端に流るゝを厭はぬ、此は何處までも謙讓にして常に穩健を期して居る。彼は譬へば高田の翳てあつて此れは寧ろ村田の技てある。若し强いて分析すれば彼は情七分にして理は三分、此れは情五分にして理も亦五分てある。讀んで面白いことは時に彼に多いが、味つて益する所は寧ろ此れに多いかと思ふ。要するに吾人は此書を以て明治年間に於ける最も眞摯なる、最も尊敬すべき著書として江湖の熱讀を推奬するものである。(定價二圓二十五錢)

▲半生の墓

堺利彥著
平民書房發行

堺枯川氏が亡妻美知子氏の一週忌の紀念として發行せられたもので、裝幀の清くして一點の俗氣を止めざる所先づ此種の著述に最も適して居ると思ふ。

卷頭の「哀史梗概」話の半ばまでもないのは甚だ惜い。哀史の如き大小說は必ず世間に讀まれればならぬ、止むを得ずんば其梗概丈でも讀まれればならぬ、其足を寫實の上に置いて其頭を理想の中に入れて居る此大小說は實に人世の大活劇、人情の大波瀾を描破して、人道の至高至美なるを感ぜしむる大說敎、大福音である。氏が其梗概を半ばまでも至らざるに止められたのは甚だ惜むべきである。

卷尾の「予の半生」は氏が今日までに至る自叙傳であつて其率直にして飾らず、且大膽にして掩はざる處に誠の敎訓を得らるゝのである。文章は餘りよいとは思はぬが、兩親の病氣又は死去に就て記述したあたりは一篇感慨の文字、漫ろに人の眦を潤ふさしむるものがある。氏の文はどうしても感情的の所が甘いやうに思ふ。

「獄中生活」は巣鴨監獄に於ける生活を記述したもので「予の半生」と共に卷中の最も面白いものである。此文の終りにある「獄中の音樂」といふ新體詩はなか〳〵よく出來た。

「一人の要する土地幾何」はトルストイの敎訓小話を譯したものである。一體トルストイの敎訓談は惡鬼とか幽靈とかいふ超自然的のものを持て來るのは僕の餘り好まぬ處であるが、其人生を洞觀したる思想と、其筆力――獅子を捧つ力がこゝには兎を取るに用ひられて居る――は此一小篇にもあらはれて居る。パクホムが今や丘に着かんとする時の描寫、「パクホムの一身は是に至つて正さ長さ五尺の土地を要した」の結末トルストイならではと思はるゝ。

其他「細君の說法」の輕妙、「不知所往列傳」の飄逸皆一讀するに足る。

氏の亡兄の作一篇と其俳句和歌なども收めてあるが其文才はなか〳〵見るべきものがある。

時潮やく讀書の候に向はんとする時、確かに一部讀書子の愛玩に値すると思ふ。（定價三十五錢）

▲英和日用會話　渡邊修二郎撰　內外出版協會發行

英語の初步を學べる者の爲めに撰べるものでなか〳〵丁寧懇切に說いてある。併しながら箇樣な會話の本は已に今迄澤山に出來てある。今更ら新たに發行するの必要が少かつたかと思ふ。（定價四十錢）

▲人生の行路第二　吉川潤二郎譯述　內外出版協會發行

先きに好評を博した「人生の行路」に續いて第二として發行せられたものである。人格論、男氣、眞理、職分、正直等重もに人生實際の生活に於て必要缺くべからざる心得を說いて居る。箇樣な書物は餘り面白いとはいへぬが甚だ有益なことは疑ない、今の青年諸子は小說を讀む時間の一部を割いて箇樣な書物も讀んで見るがよいと思ふ。（定價三十錢）

▲世界お伽噺第七十二篇　小人鼻助　岩谷小波編　博文館發行

▲世界お伽噺第七十三篇　龜の智惠　仝

前者は獨逸のハウフ作中最も有名なるものを譯し、後者はアフリカの龜に關するお伽噺三篇を譯せり、兩篇共に罪なくして面白く、少年子女の好讀物なり。（定價各八錢）

前田林外先生序
岩野泡鳴先生序
河井醉茗先生序
相馬御風先生序
秋元盧風先生序
入澤凉月君著

近刊 詩集 『吉備姿』 定價郵税共 金貳拾五錢

著者入澤凉月、平素作爲せし短歌を集めて一卷となし『吉備姿』と題して近日世に向はんとす、集む所はこれ君が悉く苦心の余に成るもの一として吟誦に價せざるはなし。凉月君は狂熱火の如き短歌詩人也、乞ふ霎時らく無名なるを以て其詩的價値を疑ふ勿れ。著者半面の歴史は實に熱と涙とを以て覆はれたり、即ち著者が熱血は茲に迸つて世の同情に訴ふ所あらんとして此集立ところになる、よつて來たるもの『吉備姿』の出づる豈徒爾然ならんや。收むる處の數百首、婉麗なるあり、清楚なるあり、はた峭拔たるあり、螢絕晶絕渾然として、一點の紛華をも止めず。即ち凉月君が『吉備姿』一篇は幸に江湖の受誦に價せんか乞ふらくば發兌の日を待つて一本を机上に供へよ

發行所 岡山市花畑 白虹發行所 血汐會

青年の壇の明星

革新せる國詩の
新生面を見よ

編輯擔任清水橋村

卷壹號六

國詩

九月一日發行

▲編輯所東京下澁谷四二〇
國詩編輯所

▲毎月一回一日發行▲定價一冊金拾錢
▲六冊前金六拾錢送付する者を社友と
▲なし社友の作物には報酬す

▲國詩は微小なる雜誌なれども詩壇唯一の新雜誌なり號を重ぬる五小說雜誌『にひしほ』と合し茲に刷新の號を出す、國詩は又最も新思想、新形式を備へたる處の者活動的新興國詩壇の明星たりまつ詩に憧るゝ者は速かに吾人がこの新たに作れる新機運に乘して國詩の大圈に入り來れ
▲小說、美文、新體詩、俳句、短歌、繪葉書圖案等を毎號懸賞募集す▼

刷新號要目

▲闇を例へば(長詩)…岩野泡鳴
▲丘上吟
▲若き女
▲桃のはえ
▲人へやろ扇に
▲野の虹
▲わつらひ
▲夢の藻
▲睡蓮
▲ゆふしほ
▲短絃
▲夢のゆくへ
▲聖燭
▲批評
▲俳句

前田夕暮 高信峽水 蕫月一露 細越夏村 三木露風 山本露滴 よし春伏峯等 妙子、千重子等 正富汪洋 淺山露風 神尾江村 愛美、道一才

▲敍事的敍情詩『炎の夢』清水橋村

發行所 東京市神田區猿樂町二番地 國詩社

EAST AND WEST

A New English Monthly Magazine

英文新雜誌發行

前『英語世界』記者布施知足氏主任

九月十日 第壹號發行 要目左の如し

CURRENT TOPICS 時事短評
SELECTED ARTICLES 英米の新聞雜誌より殊に我國人にとりて興味多き文の拔萃 滑稽笑話と偉人ノ逸事
GOSSIPS AND ANECDOTES
SHORT STORY 英米名家の短篇小說 LITERARY
NOTES 英米文壇の消息 近刊英書の紹介
雜錄 邦文の記事と雜評
註釋 毎號附錄として添ゆ

●毎月一回(十日)發行 ●定價一冊六錢郵稅五厘 半年分郵稅共三十六錢 一年分同七十錢

東京神田表神保町十 『英學生』發行所 東西社

九月十五日發行

日本園藝雜誌

秋の卷　第拾七年第九號　定價二十錢　郵税一錢五厘

東京下谷上根岸六十三番地　日本園藝會　電話下谷一九四五

大賣捌所　田中屋　盛文堂　裳華房　勉強堂　服部書店

日本 **涅槃の巻** 美術

八月發行（第七十九號）

定價
每月一冊發行　金貳拾五錢　郵税金一錢宛
半箇年六冊分　割引郵税共　壹圓四拾五錢
一年十二冊分　割引郵税共　貳圓八拾錢也

東京市下谷區谷中初音町四
日本美術院編輯部（電話下谷四百一番）

● 自今　美術院の編輯部　廢止 ●

九月 **日本美術** 新刊

豫告

●稚見觀音＝狩野芳崖○山水＝橋本雅邦○秋景＝寺崎廣業○元祿の面影＝岡田三郎助○彫刻＝ロダン○以太利鑄造章牌○團洲の渡邊華山○北米の瀑布

●予が藝術に興味を有する所以＝鳥居龍藏○美術界の今昔＝河瀬秀治○佐渡が島＝高村光雲○芳崖と雅邦＝狩野友信○寧樂の都＝園田春耕○九代目が事＝堀越福三郎

▲新に無扉門の一欄を設けて、廣く投稿を歡迎す。△以下臨時の藝苑時觀、海外消息、及び常例の他山の石、美術界彙報、其他とも前例の通り。

（定價其他とも從前の通り）

● 第八十號より　特設の本社　に於て發行す ●

日本美術社

東京市本郷區根津宮永町三十五番地

柳川春葉著

家庭小説 **母の心**

實價　錢
郵税　錢

園藝文庫全部完成

全部十二卷、別卷二卷、毎卷石版極彩色口繪二葉挿入、植物寫生畫毎題入
▲▲實價一冊六十錢郵税六錢▲全部十四冊八圓四十錢小包料四十錢
▲全部十四冊取揃御注文に限り特別　七圓十四錢小包料四十錢

園藝文庫別卷第二 草木栽培全書

千山萬水著
▲實價金六十錢
▲郵税金六錢

明治の本草綱目として江湖好園藝家の歡迎を受けたる園藝文庫十二卷別卷二卷は茲に本卷を以て完結を告げたり本卷揭ぐる所は花卉盆栽果樹蔬菜の栽培接木壓條下种根分より土壤肥料の説明溫室の構造造庭法に到るまで殆んど盡さずといふ事なし而して園藝文庫十二卷は本書の應用に由つて始めて以て其活動の妙を完くすべく是れを得て以て對さば歷々として掌中の物を搜ぐるが如けん若し夫れ此の完結は斯界に於る最も重要なる位置を占むべきものなるは言を須ひず

山草繪葉書

五百城文哉畫
全部十枚、五枚一組
實價一組二十五錢郵税二錢

發行日次
（一）大櫻草、雪割櫻、千島桔梗、敦盛草、深山龍膽
（二）白根葵、高根菫、長之介草、車百合、白馬風露
石版極彩色刷

娛樂實用 園藝界

▲毎月一回五日發行
第二年第九卷　九月五日發行
實價參拾錢郵税一錢
六冊前金郵税共　一圓五十六錢

發兌元　東京日本橋通四丁目角　春陽堂

學の友の兄 御まち兼の

總かな付 どなたにも讀めます

成功と少年

第一號 九月一日 天下一品

開卷の花

少年記錄 日記帖

習畫手本

習字手本

自畫葉書

戰地寄贈 學生時代 東郷大將寫眞 其他

東郷 ラングドン 兩大將成功談●少年講談●滑稽ばなし●少年裁判所●お伽小說其他狂句柳樽等

附錄

○和歌をつくる法 ○俳句をつくる法 ○漢詩をつくる法 ○文章をつくる法 ○新體詩を作る法 ○手紙―をかく法 ○彩色畫をかく法

每月一回 一日發行 定價九錢 郵稅一錢 半年五十五錢 一年一圓

東京神田千代田町 博報堂

總裁 二條公爵

會長 本多男爵

殿下御上覽

九月十日發行

青年議會

各欄擔任

金子薰園　田口孤雁　秋廣秋郊

渡邊光風　榎本幹齋　渡邊香涯

編輯監督 中村文學士

會務監督 篠田法學士

優等ナル投書家には本會記者トメ毎月手當金ヲ送附ス

見本郵券 拾錢 十一期第一號

每月一回（十日） 會費一ケ月拾錢 半ケ年五十五錢 一ケ年壹圓

東京神田千代田町 青年議會

小學生徒用 少年少女

學の友

◎毎號きれいな繪切手卅枚は勉強をおうちへしらせる爲です

◎父兄の君よ子供の爲におためしあれ見本郵券三錢

天下一品 大評判

毎月一回 九月分 八月廿日第七號發行

面白いおはなしがたくさん有ます

◎一册貳錢五厘郵稅五厘一年郵稅共三十二錢

◎毎號きれいな郵便切手臺紙 貯金は皆樣方の末のお樂しみ

東京神田區千代田町二 博報堂

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること
▲締切は毎月十八日最終便まで
▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

●但海外（淸國は本邦郵便局所在地を除く）は郵税六錢ヶ要す

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四ノ頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社山名并に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし
一郵券代用の場合は必ず壹割増のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらざれば御需めに應ぜず
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らざれば其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添へられたし
一御拂込み金額の端金の場合には左表に準じ御勘定可致に付御注意相成たし
一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割
一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

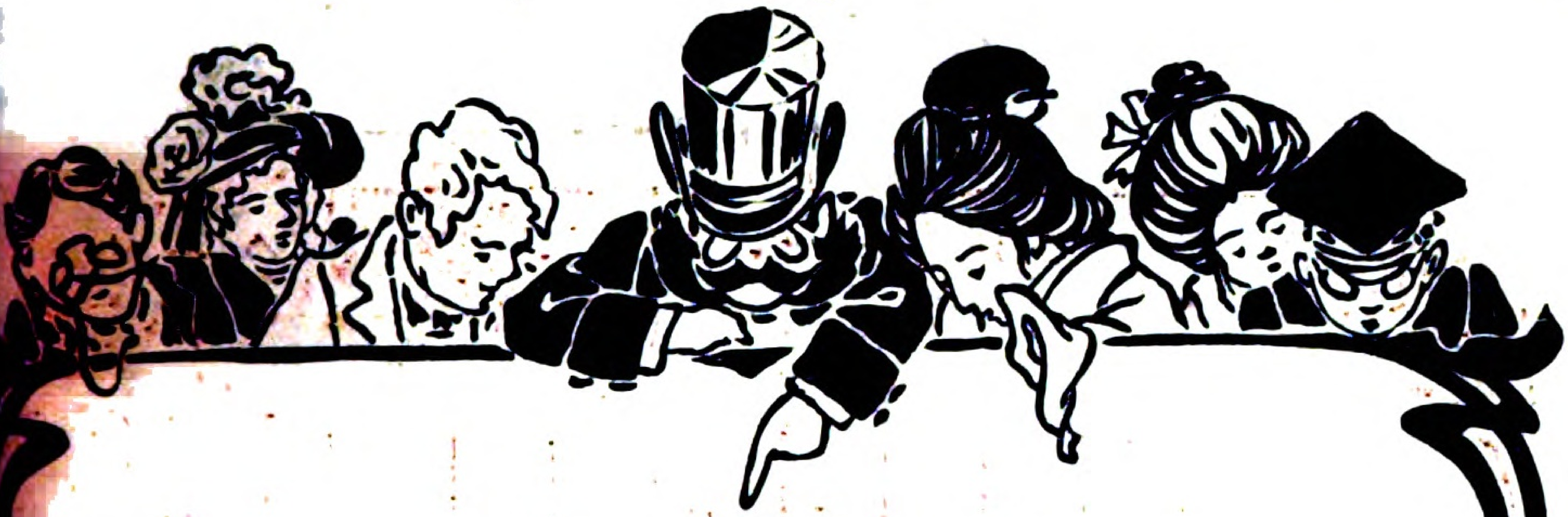
神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四　東海堂
本郷四丁目　文明堂

明治三十八年八月卅一日印刷
明治三十八年九月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　淸水金右衞門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場



中央公論

No 198

明治十九年創刊
明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
明治三十八年九月一日發行（每月一回）

東京本鄕區駒込西片町十番地
發行所 反省社
（電話下谷九一九）

東京牛込區加賀町一丁目
印刷所 秀英舍第一工場

大賣捌所
神田表神保町 東京堂
神田裏神保町 上田屋
京橋銀座四丁目 東海堂
本鄕四丁目 文明堂

（定價一部金十二錢） 郵税一錢

前號概目